

森ニイマス

美術と教育—ふたつのアート・プロジェクト

IN THE FOREST

Art Project of the Tow "ART and EDUCATION"

岡部昌生

私たちは昨日雨の森にいました。一歩足を踏み入れると優しい匂いのする空気に包まれ、とても久しぶりに木に触れたことに気づきました。樹はあたたかく、ぬくもりがありました。美しい森の緑を背景にして皆さんそれぞれがまるで樹と対話しているように見えました。岡部先生の語られるお話を聞いて、美術を志すということは、常に「問い続けること」なのだと思います。かたちや色彩、構成、描写はもちろん、制作している時間をつくるものが孤独で自分と向き合う。「自分とは何か。」そして「生命について、自然、環境、人々の歴史について、哲学や思想について、自分を取り囲むさまざまな出来事について感じて、考えて、問う」ことが表現につながっていくのだと改めて気づかされました。(北見柏陽高校教諭 太田玲子)

「大人になったら芸術家になりたい」16歳の少年は答えた。

2011年8月25日、北海道高等学校文化連盟網走支部、第56回美術展研究大会の会場となる北網圏北見文化センター美術館のふたつの展示フロアは、ほぼ200人と1,200点を超える作品によってぎっしりと空間が埋められ、そこに集まった美術する高校生に、その少年の問われた応えの言葉から話しかけた。東日本大震災と大津波で大破した家屋から、祖母と孫が相次いで救出された。地震発生から9日ぶり、新聞は石巻の「奇跡」と報じ、メディアによってこのことが広く知られていたから、記憶する人たちも多かった。

「救出された少年は16歳でした。救出されたあと、「将来の夢」をと救出にあたった警察官に尋ねられたとき、こう答えました。「芸術家になりたいです」。私は16歳のとき、芸術家になりたいとはっきりと言えたかどうか、それを知って私は非常に動揺しました。アーティストでなく、美術家でなく、クリエイターでもなく芸術家になりたいという少年の意志。仙台の高校で、美術部で活動していたそうですが、瓦礫のなかで9日間、耐えしのぎながら救出された。なにかを失ったかもしれない少年が、必死で生命を将来につなげた瞬間に、「芸術家になりたい」と発した言葉にとっても驚きました。」

「アート」と「芸術」という捉え方の今日的な状況を再考することと、私もまた、16歳のころから美術をはじめたことを思い起し、その時期の私はどうだったのだろうか、ここに集まったオホーツク圏で、仲間とともに美術クラブで活動する少年少女たちにこのことから話しかけ、「美術する」ことを問いかけた。

前日の会場設営と展示、明日には撤収という圧縮された時間のなかで、この日の午前にはプラネタリウムで、私の美術のアーカイブをスライドショーと映像をつかひながら、芸術は幅広く時代も社会も人生をも投影すること、森の中で思考することのプログラムを伝えた。それを引き継いで午後、森のツアーと多色の樹膚のフロッタージュ作品の制作。あいにくの雨の中だった。それでも、版の原初的な手の作業をとおした樹膚の感触に、樹木が紙のうえに載り、森が手元に引きよせられるという技法の発見の新鮮さに夢中になれたようだった。

夏の潤んだ空気に湧くように群がる蚊の襲撃にたじろぎながらも「それも自然のひとつなのだ」と言えたり、「森は雨を防いでくれたし、雨が葉にあたる音」がいいという発見だったり、「自然と触れ合いながら」美術することで「私の中に何か生まれたのを感じた気がする」と、生命の満ちた空間に、自身の生命のなかにあるものを重ねて感受できた高揚した気持ちが、やり終えて戻ってきた表情にも会場にも全開して溢れていた。

雨にあたり色が流れ、クタクタとなった紙片を延ばしたりつなげたり、全長70m高さ3.5mの大壁面にほぼ1,000点、多様多彩な樹膚のフロッタージュが貼り込まれた。森の作業の記録映像と写真によるドキュメントが作品の中に差し込まれた展示がつくりだす空間には、森の豊穡が映され、美術館に移ってきたかのような彩りと華やぎ、生命感に満ちた力強い会場に、生徒は一人一人の手作業が集積集合したスケールの大きさと美しさ、みんなで美術することの楽しさと素晴らしさを体験したことへの感動をあげたことと思う。一人一人の手が生み出す豊かな表現、手の力と、なにより美術の力というものが、あらためて気づかされたことだろう。

「森ニイマス」というアートプロジェクトが教育プログラムとなることへの状況と意味。社会(あるいは他者)を対象とする美術をやりつづけてきた私の美術が、記憶や記録も含めた近代、都市、時代、社会の諸層に手を差し込んでとりだしてきたことが、自然を対象にしたプロジェクトとして、文明史的な遠近法のなかでの意味をもつのだろうか。近年の作業を照射しながら、美術と教育—ふたつのアートプロジェクトを考えてみたい。

I. 森ニイマス

教育プログラムとしての「森ニイマス」

北網圏北見文化センター美術館で開催される、北海道高等学校文化連盟(高文連)網走支部平成23年度第56回美術展・研究大会ワークショップの指導と展示、講評に招請された。開催に先立つ6月、オホーツク圏の網走、北見、美幌、斜里、留辺蘂、遠軽、訓子府地域の12校の美術教科専任教諭、美術部顧問が集まる顧問会議で、フロッタージュによるワークショップを美術館に近接する森の中で行い、原生の姿をのこす森の樹木の樹皮を擦りとり、参加者の作品が集積され大きな共同作業の総体となるような構想を提示した。都市の中にある森が、都市の時間を照射する、遠近をかかえた作業となることの構想だ。

ここはオホーツク圏、北辺に栄えた文化のあるところ。それを生み出したのは宗谷から知床までつづく400kmもの海岸線をつくる広大な斜面の大地、千島孤内帯であり、オホーツク海とそのエッジにたった人々だった。森のなかで、静かにゆっくりと流れた時間に触れてみる。触れた感触が身体にみちて思考することを促し、感受する自分を見いだすひとつのきっかけとなるだろうか。自分のなかに森に流れた時間のあることを気づかされる「森ニイマス」というプログラムをすすめた。

オホーツク圏で美術することに感慨をもつ。生まれ育った町が空襲にあい、町の八割が焦土となって、家も失った家族は、知床連山武佐岳の麓の標津郡川北、小さな町の、坂の上の家に移った。原野開墾で親たちは苦勞したが子どもたちには自然がいっぱいで楽しい夢のような一時だった。が、金環食をガラスに煤つけて見たときききみみたいなものを描いた絵にまわりつく残傷の瘡が剥がれない傷ももった。美術することの始まりを、このことで忘れない。この地に立つと思ひ出す。生活の糧は、冷害と日照不足と経験もなかったから挫折せざるをえなかったのだが、山の向こうの斜里は、はるかに豊かな農作ができた、聞いた記憶が消えない。時がうつり、町をでて都会に住んで美術する少年になった。世相はアンポ、その火照りを浴びて生まれた赤い絵が「人形五つ」。ある公募展の会友賞をえたが、同期に「涛沸湖をわたる人」の林弘亮さんがいた。敬愛こめた信頼が、長く大学の仕事ともつながり美術する少年たちを「オホーツクのエッジから」視る立場をもつことになる。

北辺のエッジといわれる地点にたって美術のありようを探った思いが、「森ニイマス」に重なっていった。林さんの言う「冷涼冥々たる大地に両足をふまえ、変転しつづける時流を直視し、新しい価値の創造者として、活発な歩みをつづける」というエッジに立つ意志をどこかでうけとったのだと思う。

地域の切実な問題を反映、それを学ぶ

このプログラムのなかには、この地域の文化・教育の切実な問題がこめられ、露呈している。研究大会の趣旨にはうたわれず影をひそめているが、地域の困難な状況に対応することが出来ることにこそ、今回参加の、とりわけ教育プログラムのあることを位置づけた。

美術表現が領域や境界を横断しながらゆるやかに幅広く思索を促し共有していく視点、その教育プログラムのフィールドワーク(1)は歴史や社会学、文化人類学などに結ばれる可能性をもち、長い経験をもって組み立ててきた。1988年、オーストラリア、クィーンズランド州ヌーサでの、初めての海外個展がワークショップ「ハイスティング街150mのフロッタージュ」のはじまりでもあり、南半球ではじめての万博に際して、「建国の200年は侵略の200年だっ!」と先住民族のアボリジニの側から声があがる中での実施だっただけに、鮮烈な印象を持った。ステューデントと称したサポーターに美術家や教師、市民や子どもたちの参加もあったこのプロジェクトは、教育プログラムの最初といえるものであった。以降のワークショップのプロジェクトの実績(2)が、ベネチア・ビエンナーレでの150日間もの連続するワークショップや2010年の茅野市美術館「諏訪をめぐり、縄文にふれる」プロジェクトでは、諏訪湖をめぐる五つの美術館、博物館との連携や市民と子どもたちの参加、そして小学校と美術館が連動しながらともにすすめた教育プログラムも取り込んだ実践は、その集大成ともいえた。

そして、2011年1月に開館したオーストラリア、タスマニアのMONA(Museum of Old and New Art)が、ベネチア・ビエンナーレ日本館の展示作品「わたしたちの過去に、未来はあるのか」の被爆石を含めた一部を再構成して「タスマニアのヒロシマ、未来のアーカイブ Hiroshima in Tasmania-Archive of the Future」として、アンゼルム・キーファーやクリスチャン・ボルタンスキーとともにパーマネントコレクションとして公開され、恒久的なワークショップとして来館者が被爆石をフロッタージュしたのも美術家の作品同様にアーカイブされると

いう、これまでどこにもなかったユニークなかたちの教育プログラムが創出された。私のワークショップのコンセプトが、これを体験した人々によってそれぞれの地域のなかでも展開していける、地場を磁場としてとらえる視点も獲得できる開かれたものとしてあることだ。

北海道の大都市と言われる以外の地方にあっては、美術教師の配置、授業時数の圧縮の余波もあり、美術教科の質、量ともに十分に確保するのは難しい状況にある。一方、とりまく環境として公募展や大学の存在が現場のなかで作家と教師を同居させ、美術と教育の遠近もかかえてしまうということもある。近年、高文連の研究大会にワークショップのかたちで参加し、教育現場のきびしい現況も突きつけられる経験をする。その問題も明らかにながらの運営であったが、ともに活動してきた釧路根室支部と網走支部の美術教育を取り巻く現状のレポートを紹介し、今回の「森ニイマス」はその教育の現場からあがる現状を再考する機会として、さらには、美術を楽しく享受し、美術が本来もつ力を再発見する機会としたい。それは美術する高校生たちの気持ちにも刻まれ、新しい価値を見いだし生み出す力が一歩ふみだし、創造の力となることを願うことからだ。

美術教育を取り巻く状況について—北海道江南高等学校 上野秀実

授業時数の削減

平成10～11年に改訂され高等学校では平成15年度に施行された現行の学習指導要領では、高等学校を卒業するために必要な修得総単位数をそれまでの80単位以上から74単位以上に改訂。それに合わせて芸術教科の必修単位数がそれまでの「最低3単位を下回らない」から「最低2単位を下回らない」に縮減された。その大きな理由は学校完全5日制の実施がある。土曜日に実施していた授業を削減したため、その分の授業時数をカットしなくてはならなくなったのである。他教科の標準時数も見直され標準時数の縮減の影響は大きいものであった。

従前、芸術教科は音楽、美術、書道、工芸の中から選択し、1年間で2単位(1週間に2時間)の授業を行うこととなっていた。通常1年生で芸術Iとして2単位の芸術科目を履修し、それ以降の学年で学習指導要領に定められた残る1単位を芸術IIとして履修するようになっていたが実技教科の特性を考慮し芸術は更に1単位を加え合計2単位の授業として多くの高校のカリキュラムに位置づけられていた。しかし、現行の学習指導要領の施行により2単位のみ必修となり多くの高校で1年生の芸術Iだけの履修に留まり、芸術IIやそれ以降に履修可能な芸術IIIは他教科との選択授業の一部に位置づけられることでその選択人数も自ずと限定的なものとならざるを得なかった。つまり、それまでに比較し高校卒業までに授業として芸術教育を受ける機会が半減したとも言える。更に義務教育での芸術教科の時数削減も加わって子どもたちの造形活動の機会が大きく減少した。

少子化の影響

学校の統廃合や間口減など少子化に伴う影響はそこに勤務する教職員数の減少をもたらした。学校規模に応じ規定されている教職員定数がある。一つの学年の学級数が減ることによってそれに応じた職員数まで現存の教員を減らさなくてはならず普通高校では募集間口数が1間口減るごとに複数名の教員を年度進行で毎年減らして行かなくてはならない。国語や数学、英語といった教科では複数の教員が各学校に配置されているが授業の持ち時数の関係から音楽、美術、書道といった芸術教科は各1名ずつしか通常は配置されていない。教職員定数を減じる際、それぞれの教科から教員を減らすのが芸術教科の教員が減るということはその3科目あった芸術が2～1科目になることを意味しており、生徒の選択の幅を狭める結果となってしまった。

もともと全道すべての高校で芸術科目に美術を開設していた訳ではないが標準単位数の縮減と併せて、定年などの退職を機に美術を教える専門教員を不補充とし、美術を開設することを止める、時数の少なくなった学校は外部からの時間講師などに切り替えるようになった。

これらの影響を受け、美術担当の専任教師の数は大きく減少することとなった。釧路・根室管内の高校では平成5年の時点で10名を数えた美術の教員は平成20年度において根室管内で0、釧路管内で4名にまで激減した。現在はこの4名の専任の他に時間講師を招聘し授業を行っている高校もあるが極少数である。尚、釧路・根室管内では美術を授業として開設している私立も含めた全日制高等学校数は平成21年度の時点で22校中8校で開設。過去最も多かった時は24校中12校で美術を開設していた。

※追記 平成23年度 21校中7校で美術を開設(内、専任4校・講師3校)

義務教育での学習

小学校では「造形遊び」と呼ばれる授業が図画工作で行われるようになった。「造形遊び」では様々な素材を使い造形体験をするが、それまで行われてきた学校や家族との時間などの生活の中に題材を求めた描画や立体表現による系統的な指導を圧迫し鉛筆や筆などの描画材料、はさみやカッターなどの工作道具を使って作品にするという機会が減少するようになった。また、「造形遊び」は複数の子どもたちの即興的な表現に終わることもあり、できあがった作品をじっくり味わったり、自分の家に持ち帰って作品を家族に見せることも減少した。

また、中学校でも美術の授業時間数が学習指導要領の実施に伴い減少。高校受験の為に教科ではないことや学校行事などを確保する観点から授業の間隔が隔週になったり、美術の時間を削ったまま回復されない例も少なくなかったと聞く。その結果、小学校高学年から中学校にかけての発達段階では、目に見える対象を正確に表現しようとする要求が高まる時期に、ものの形の客観的な捉え方や色彩の効果、イメージの構成などの普遍的な造形要素を身につけずにままに高校へ進学することになる。更に学校規模によっては図工や美術を専門とする教員を配置できず、専門外の教員が指導にあたることも多く十分な指導がなされないまま高校に入学。高校で美術を希望して選択する生徒でも緑色や肌の色などの混色が分からなかったり描写しても自分の描いたデッサンの狂いに気付けないままにいる生徒や失敗することを恐れ伸び伸びした表現ができずにいる生徒の数が以前に比べ増加したように思える。

指導内容の変化

従前は表現として「絵画」と「彫塑」は区別して扱われてきた領域であったが、学習指導要領の改訂により「絵画・彫刻」と一体的に或いはどちらかを選択して取り扱うこととなった。それは新たにビデオや写真、パソコンなどを使って表現する「映像メディア表現」の新設を受けてのことである。このことでそれまでの指導と大きく異なる変化に現場の美術教師たちは混乱した。「絵画」「彫塑」「デザイン」それぞれ性質の異なる表現活動と鑑賞をすべて授業で扱うことにしていたそれまでの学習指導要領から大きく内容が変化した。特に「映像メディア表現」では、文科省が意図する表現のための機材が学校では十分に用意できず一方の選択肢であった「デザイン」を重点的に扱う学校も多かったのが実態であった。最近では研究も進み「映像メディア表現」としての作品も見られるようになったが必要機材、施設などのインフラが未整備な状況、かつ現場の美術教師に十分な研修が行われない自助努力の状態が続くままでは教材として扱えない現場が多いと言わざるを得ない。

参考として(上野私見)

美術の科目性

美術という芸術科目の教科性を明らかにし、これを享受して成長することの意義を確認する。

①無形を有形にする活動

自己の感情などから湧き起こるイメージを形や色に置き換えることが美術における表現であり、子どもたちはこの過程で自ら課題を設定し困難を乗り越えて創造する喜びを味わうのである。

②異なる個性の理解と共感

子どもたち個々が作り出す作品に同じものではなく、それぞれが個性の表れである。互いの違いを知り、自分と異なる個性の存在を認め合うことを授業を通じて行われることは貴重な体験と位置づけられると考える。

③多面的な生徒理解

勉強が苦手でも運動が得意だったり歌が上手な子どもも少なくない。絵を描いたり彫刻で良い作品をつくる子どもは周囲から認められる機会を得る。子どもの能力や個性を知る機会が多い方が良い。

④手仕事の有用性

鉛筆や筆、はさみやカッター、彫刻刀など作品を制作するにはそれに応じた道具を使いこなさなくてはならない。手を使った仕事で技能を高め表現に生かされることは子どもたちの発達に大いに影響する。

⑤個性の表出

表現教育として創作に重点を置いた学習は美術が最も特徴的であり他教科にはないものである。個性を重視する現代社会においてもっと重要視されて然るべき教育活動と考える。

オホーツク圏の美術教育の現状・問題—地方の美術教育

美術館等との連携について

新しい学習指導要領において、「地域との連携」が強く求められています。これは他者・社会・自然・環境との関係において、たくましく生きる力をはぐくむことが重要視されているからです。美術においては、主に鑑賞授業の充実の延長線上とも考えられますが、具体的には生徒間だけにとどまらず、保護者や家族、地域の人々との作品を通しての交流を広げていくことが求められます。たとえば、作品展を行う上で、会場に適した場所や適切な機会・方法等をどのように創出していくかがカギです。また、それらに精通し、互いに協力して相乗効果を図っていくために美術館の存在がカギになります。管内の美術館との連携は①高文連として、また②北見市内の高校が北網圏北見文化センターで美術展を立ち上げた事例、③網走市美術館と同市内高校の美術部とのものがありますが、他の市町村においては顕著な取り組みが聞かれていません。主に連携する美術館が近くにないという問題があります。また、生徒の作品を様々な方に見ていただける状況を生み出すための取り組みとして、北見藤女子高等学校「Web美術館」があげられます。コンピュータ操作に詳しくなることが求められますが、地域に限定せず多くの人に作品を見てもらえる事例として、今後僻地の学校が活路を見出すきっかけになると思われます。

※北見藤女子高等学校 Web美術館は同校 HP からリンクが張られている。

中学校美術教諭(免許所有者)による授業が少ない

僻地には、学校規模の状況から、美術を専門に教える教諭を1校に1名配置できないという問題を抱える中学校が多いようです。そのほとんどは美術と他の教科を並行して指導する教員で解決していますが、専ら美術以外の免許状を持つ教員が、免許申請を行っているのであって、美術教育を学んでいない教諭が生徒を指導するという問題がついてまわっています。他教科教諭の協力があって必修美術の授業が成り立っている事は感謝すべき事ですが、専門外であるがために①教科指導に苦慮し、②基礎・基本の着実な定着が図れないこととともに、③十分な教材研究を行って魅力的な題材研究が出来ないなど、美術科にとって事態は深刻です。

さらに今回の学習指導要領改訂では、必修教科としての美術の時数減は免れましたが、選択教科がなくなったため、今後選択美術を開設できなくなってしまいました。つまり、小・中規模の中学校では美術専任を置く程の美術授業時数がないため、美術だけを専門に教える教員がいなくなるという事です。都市部の大規模校では1校に3名の美術教諭がいたところ、1名に縮小されてしまうという、非常に大きな問題を抱えることになるようですが、大規模中学校のない僻地から、美術専科教諭がゼロになるという事の方が、非常に深刻な問題です。小規模の町村においては、2〜3の小規模小学校、1つの中学校しかないというところもたくさんあります。そのため、複数の小中学校をあわせても町村内に美術教諭免許を持つ教諭が一人もいないという事が、現実の問題になっています。

高等学校美術科の展開の状況

平成11年の学習指導要領改訂により、高等学校の課程における芸術科目の必修単位数が3から2に減少したのを受け、芸術教科の単位が英語や数学といった教科の単位へと置き換わってしまいました。数値による学力把握の実態調査等が進む中、現在もこれらの観点の学力向上を意識した教員配置が進学校を中心に進められています。この流れの中で、じわじわと美術IIや美術IIIを開設する学校が減り、現在はごく一部の学校にしか残っていません。

網走管内でもその流れは同様で、芸術科教諭の持ち時数が減少し、教諭の設置基準から既存の授業展開では教員を配置していることが難しくなっています。この問題を解決するため、今までは3クラスあるいは2つのクラスを音楽・美術・書道の3展開にしてきたところを、1クラス2展開へと少人数展開に移行している学校が多くなっています。この際、書道や美術の教員が減となり、学校から消えているようです。さらに追い打ちをかけるように生徒数減、場合により学校の存続そのものが難しい状況が発生しているため、芸術教科の教員の授業持ち時数が減少し、専任を配置出来ない状況から非常勤講師に置き換わっているところが多いのです。書道や美術でこれらの流れは顕著で、音楽については比較して磐石のように思われましたが、現在は音楽においても同様の現象が起っています。(地域キャンパス校から消えている。)

これまでのことを踏まえ、中学校だけではなく高等学校でも美術教諭が減少しているため、地域そのものから美術を専門に教えることの出来る人材がいなくなっていることとなります。つまりそれぞれの土俵で出来ることをしていくだけでなく、中学校・高校・美術館等、美術にかかわる者が互いに連携し、今後訪れるであろう「更なる苦境」を乗り切るために知恵を絞っていくことが求められると考えます。

網走管内の高文連について

管内の美術教諭が激減する中、この先5年後10年後を考えると、美術専科教諭が何名残っているのか、非常に心配である。特に、今まで高文連の運営については、美術専科が専門委員を引き受けて行ってきた流れもあることから、極論として美術専科がゼロになった場合に、手立てを打たなければ空中分解する可能性もある。また(他の分野も同じ問題を抱えるのであるが)美術に関しては特に専門的内容に不安を持つ教員が顧問を引き受けていることから、審査や運営に戸惑いを持っているようである。要望があげられた事が直接的原因ではあるが、少しでも専科外教諭の不安を解消するために、支部の運営体制の改革を試みたが、さらなる美術科教諭の減少により、美術専科教諭への負担は著しく増大していることにつながっている。他の支部との再編・統合という選択肢もないではないが、過去の「北南空知」、「留萌・旭川と留萌・道北」の様に、比較的近い支部同士が統合されるという地の利は、網走にはない。もし支部の再編を進めるなら、全道大会の在り方(南北で全道大会を区切る、など)を変更するなど、既存の枠を超えた抜本的な改革が必要である。また、美術専科教諭がいる限りは専科教諭が中心に運営することが望ましいが、あまりにも減少した場合は、専科外の教諭が専門委員を引き受け、また道高文連の理念そのものを変えて、現実に即した運営が可能になるように融通を図っていく必要がある。(現状としては道高文連の理念を変えるという話にはならないし、最も尊重していかなくてはいけないものであるが、それに付随している尾ひれはひれの解釈により、全道大会当番の引き継ぎが硬化し、支部開催が難しくなっている、という問題もある。



管内美術教諭の変遷

網走(オホーツク)管内における美術教諭の配置状況

平成	遠軽	藤女	柏陽	留辺蘂	緑陵	北斗	美幌	南ヶ丘	向陽(網走桂陽)	専科教員数
11	●	●	●		○	●	●(○)	○	○	5
12	●	●	●		○	●	●(○)	○	○	5
13	●	●	●		○	●	●(○)	○	○	5
14	●	●	●		○	●	○	○	○	4
15	●	●	●	●	○	●	○	○	○	5
16	●	●	●	●	●	●	○	○	○	6
17	●	●	●	●	●	●	○	○	○	6
18	●	●	●	●	●	○		○	○	5
19	●	●	●	●	●	○		○	○	5
20	●	●	●	●	○	○		○	○	4
21	●	●	●	●	○	○		○	○	4
22	●	●	●	●	○	○		○		4
23	●	●	●	○	○	○		○		3
24			—							今後は先細
25										りの見込み
26										
27										
28										
29										

※美幌高校の H11～13 は、育児休暇及び時間講師の配置の意味

※～15 の北見緑陵高校の講師は、同校を定年退職したあと時間講師をしていた

※H16 は北見で全道大会(北見柏陽高校が当番校)

※専任が講師に切り替わったタイミングや、講師がいなくなったタイミングは曖昧

※太字の年度は網走支部が高文連全道大会の当番支部(下線は高文連支部専門委員)

※上記は専任あるいは講師配置の高校についてのみ記載(その他は美術が開講されず)

高文連の研究大会のひとつとして「森ニイマス」がどのように作用したのか

1 共同・協同による作品制作の場になった。

- ・ワークショップが初めてという生徒も多かった。

(他者と一緒に作品を制作・展示すること、場を共有すること。)

- ・言葉を超えて、造形(美術を)通して単純な行為で人がつながるということ。

(ベネチアビエンナーレでのワークショップのVTRと解説をお聞きして。)

- ・教員にとってもワークショップ運営の学びの場になった。(展示方法含め)

企画・運営の一連のプロセスを経験することができ、これから先のワークショップ実施のノウハウを身に付けることとともに、授業やワークショップ題材のテーマを考えるきっかけとなった。

- ・美術教員及び顧問の間の共同の意識が今まで以上に高まった。美術にとっては難しい局面を迎えるが、今後協力して取り組んでいく気概が形成された。

2 擦り取る技法「フロッタージュ」を知った。

- ・生徒は、単純な行為であってもアートできるということを知った。

(表現が万人に広く開かれているということ、誰もが関われるということ)

- ・工夫次第で擦り取って浮かび上がるものが違うということの魅力に気付いた。

(経験を通して、表現の奥深さとともに、フロッタージュの魅力を体感した)

3 美術が他分野ともつながっていることを確認した。

- ・今回のワークショップが北見の自然や歴史と深いつながりを持つことを理解した。

4 森(自然)の豊かさ、厳しさに触れる機会となった。

- ・森の匂い、音、空気を通して、動物・植物を感じた。

- ・幼少時以来の自然体験だったという生徒もいた。

5 美術専科外の顧問にとっては、美術と触れる貴重な機会となった。

- ・顧問をしていても、顧問自身は美術に触れる機会があまりないことから、美術に親しむ良い機会となった。美術に対しての理解が深まった。

6 美術教諭にとっては、美術館(北網圏北見文化センター)が出来ることがわかり、連携していくことの重要性和今後の可能性を確認した。

- ・当初は隔年実施の予定だったが、次年度以降、毎年支部大会の会場を北網圏に置く方針になった。

(プラネタリウム施設等の活用が有効、次年度はデジタルプロジェクターが新規にリース導入されるらしく、活用の幅が広がりそう。)

- ・次年度の研修についても、北網圏職員の協力を得て行うことになった。

(星(仮)をテーマにワークショップを行う。今年度の研修会が強力な後押しとなり、レクチャーガイダンスを専門職員に依頼したところ、快諾を得た。)

- ・交通の便が良いので、もっと北見市民にも見て頂けるよう模索を始めた。

網走管内 芸術科目・美術部の状況一覧(2011年度)

	学校名	クラス数	美術	音楽	書道	高文連加盟校	部員数
1	北見北斗	18	時間講師	専任	時間講師	○	18
2	北見柏陽	18	専任	専任	時間講師	○	15
3	北見緑陵	15	時間講師	専任	専任	○	15
4	常呂	3					
5	北見商業	12		専任		○	22
6	北見工業	12			時間講師		
7	北見藤女子	12	専任	専任		○	12
8	網走南ヶ丘	15	時間講師	情報との兼任	時間講師	○	12
9	網走桂陽	12		専任	期限付	○	20
10	紋別	15		専任			
11	女満別	5					
12	美幌	14	時間講師	専任	時間講師	○	14
13	津別	5		専任			
14	斜里	9	時間講師	清里高から派遣	国語科教員	○	7
15	清里	3		専任			
16	小清水	3		専任			
17	訓子府	3		専任		○	13
18	置戸	3					
19	留辺蘂	7	時間講師+民間講師	専任	専任	○	5
20	佐呂間	5		専任			
21	遠軽	16	専任	専任		○	15
22	湧別	5		専任			
23	滝上	3		専任			
24	興部	3					
25	雄武	5		専任			
	専任		3	18	1	12	168
	時間講師		5		6		
	期付						

資料：北海道教育関係 職員録 2011年度版(北海教育評論社)

教育プログラムとしての「雄別炭砒を掘る」

2009年8月7日-11月8日 釧路市立美術館+旧雄別炭砒遺構

2009年は東京の目黒区美術館「文化資源としての〈炭砒〉展」と釧路市立美術館「雄別炭砒を掘る」がつながり、夕張の炭砒遺構で制作した三点の巨大な「ユウバリマトリクス」(YUBARI MATRIX 1992-94. YUBARI MATRIX 1994-95. YUBARI MATRIX 1998 旧北炭真谷地炭砒清水沢電力所遺構)を公開できたこと、釧路と夕張の炭砒を主題としながら個人史を刻み、炭砒、都市、ヒロシマ、日本近代化の受皿としての北海道開拓、人の営みの痕跡や記憶などを通して近い過去としての「近代」を手繰り寄せる仕事を続けてきたが、身近にあった炭砒の主題をえたとしても10年の時間を必要としたという感慨が強い。1990年からほぼ前後して雄別から夕張へ、そして回帰するようになり迎っていた雄別炭砒プロジェクトだった。

2005年の釧路市と音別町、阿寒町の合併が、釧路市立美術館の活動を広げた。そのひとつに学校など教育機関への情報発信、市の「生涯学習バス」による「鑑賞ツアー」、鑑賞サポート事業「アートスクール」など、市民が美術に触れることのできる環境づくりを推進してきた。道東出身の美術家との共同作業を通じ美術への関心を深めるとともに、雄別炭砒創業90周年を機に釧路の基幹産業として栄えた歴史を振り返る機会とすることから企画され、年齢層や幅ひろい市民参加として開催された。美術に接する機会をえて、広域的な文化活動として展開できることを探ると同時に、美術活動がさまざまに領域を越えてつながるような展開と発想を構想した。

博物館や地域の人とつながり、そこに教育プログラムを組み込み、地域の異なる世代との交流、教育機関との連携をはかり、道内の他の地域と同じく美術、図画工作の教員配置や授業時数など十分でない教育状況にある地域ゆえに、美術に接する機会を提供し、理解を深め、つくる楽しみを再発見するということがあった。「雄別炭砦を掘る」はアートプロジェクトであり、中高大生に市民の参加という意味ばかりでなく、幅広い教育プロジェクトとしての位置づけもあった。

雄別炭砦は1919年に開坑された。開拓使や屯田兵など北海道の開拓の歴史からみると、この年は北海道の炭砦の歴史ではさほど新しくはない。開道50周年が1918年。この頃、王子製紙など官営の会社もすでにあり、函館ドックは1896年に設立され、幌内炭砦と幌内鉄道は1882年から始まる。採炭と輸送が一体となり一つの企業が運営をこなす、近代の産業のかたちがつくられる。一方、広島では1894年に宇品線が敷設・開通され日清戦争が始まる。私の美術にとっても、戦争(原爆/ヒロシマ)/ベネチア・ピエンナーレ開設/レントゲンの発明と、パズルのように事項が後で符号する1894年前後の時代は、近代の問題を掘り下げる時間の層ともいえ、「雄別炭砦」や「夕張炭砦」と重なる意味をもつ。その背景があつての手をつつこんで「炭砦を掘る」ことだった。

日本の近代を支えた石炭産業。戦争をめぐり、炭砦集落に集散する人々の生活と暮らしを形成し、固有の文化をかたちづかった炭砦。「岡部昌生フロタージュ・プロジェクト雄別炭砦を掘る—そこは 石炭の町 ぼくらの町だ」(2009.9/19-11/8 釧路市立美術館ほか)とは、文化遺産としての炭砦と考古学、日本と北海道の近代史からみた炭砦、文化と生活など主題の広がる視線を示しながら、美術が本来もつ力を地域のなかに持たせ、シンプルな美術の手法で記憶を掘り起こし、その記憶の未来を美術によってつくる試みとした。

合併から三年すぎ、阿寒の奥にある炭砦をテーマとした展覧会を釧路市の美術館でおこなう釧路と阿寒をむすぶ試みがあり、それに合わせたプロジェクトでもあった。

初夏の雄別地区。木々の瑞々しい緑。北の地は野性のすべてをおしだし、百花繚乱咲きほこる自然へと変容させる。啼きかわす鳥の声、わたる風、せせらぐ清流、遠くに瀑布のように轟く水音。豊かに自然が息づいている。空を突き刺すように聳える大煙突の遺構が目に入らなければ、ここにかつて炭砦が在ったとは思えない緑のなかの廃墟。この中での作業は印象深い体験だったろうと思う。

釧路の夏、高文連釧路根室支部美術部研究大会の共同制作として実施し、管内14高校の美術部生徒と顧問あわせて150人が参加。1,000点のフロタージュ作品が高文連美術展に、釧路市立美術館の「雄別炭砦を掘る」には二か月間にわたり、中学生、高校生、大学生そして市民が擦りだしたフロタージュとともに2,500点が展示された。緩やかなアールをもつ壁面は、廃墟の大病院のアールをもつ大きな開口部に差し込む冴々とした雄別の緑の光景にもにて、廃墟の風景を異化し変容させた手の力がここでもいきいき息づいていた。美術館に「雄別の夏の森がやってきた!」、という印象をもった。

「雄別炭砦を掘る」とは地域の歴史のなかに近代の歴史を「掘り下げる」ことであり、閉坑して40年近く経って夕張と同様に廃墟が自然の圧倒的な力に呑み込まれていく。かつて自然のなかに巨大な建造物が在り、何万人もの人々が集散を繰り返し、特有の生活と文化をつくってきた炭砦。その炭砦の廃墟が自然に抱えこまれ自然に還っていく、その営みに立ち合うことで自然の力と時間の流れをもつよく感じたことだろう。





岡部昌生フロッタージュ・プロジェクト 雄別炭礦を掘るワークショップ / 旧雄別炭礦遺構
北海道教育大学釧路校付属中学校 (2009年8月3日-4日)
北海道高等学校文化連盟釧路根室支部美術研究会 (2009年9月10日)
写真提供：釧路市立美術館



岡部昌生フロッタージュ・プロジェクト雄別炭礦を掘るワークショップ/旧雄別炭礦遺構
北海道教育大学釧路校教育学部美術研究室(2009年8月6日-7日)
写真撮影・写真提供/釧路市立美術館



アートプロジェクトとしての「森のなかで、野付牛にふれる」

オホーツクのエッジから

「森のなかで、野付牛にふれる」は、北網圏北見文化センター開館 15 周年記念美術展「オホーツクのエッジから 三つベクトル 林弘堯・岡部昌生・田丸忠 Three Vectors, from the Edges of Okhotsk」(1999.7/23-8/15)の関連事業「アーティスト・トーク自作を語る」ともに行なわれた。展覧会の開催を告げるチラシには「北海道、その東端に位置し深い山々と海に隔てられたオホーツクは、冬には流水が訪れる美しくも厳しい北辺の地。このオホーツクのエッジからせりあがってくる精神を、強く内と外にむかって発信しようとする三つの表現」とある。三人が空間を埋めるインスタレーションが全館にわたり、さらに館外に出て私のワークショップが近接する森の中にも展開する。都市の成りたちと森、森と棲息する生物の観察ツアーなどのプログラムを提示しながら、美術館と文化センターとの連携、領域の異なる学芸員との共同など横断、越境する美術展となった。美術の斎藤知子学芸員、自然史・樹木・昆虫の柳谷卓彦学芸員ほかひろく市民との共同だった。さらに北海道立近代美術館の佐藤友哉学芸第一課長(当時)、網走在住の写真家高田邦彦さんの支援を受けての作業でもあった。

林弘堯さんは地場を磁場とするエコロジ的発想でさまざまな素材を混淆して劇場の空間を創出し、荒々しく無垢なオホーツクの原像を放つ。田丸忠さんのプリントメディアを駆使したグラフィックな表情は、オホーツクに棲息する動植物を記号化反復し、そのユニットを連結し増殖する。ふたりは対照的でありながらオホーツクの大地に足を踏張り展開と膨張を際限なく生成させている。

私の作品は「N'OUBLIEZ PAS 忘れない」。1996 年からのヒロシマパリを往還するフロッタージュ・アエログラム・プロジェクトによった。ヒロシマは市内 40 カ所に設置されている原爆被災説明板。原爆投下直後の広島市街の被災を記録した写真の腐食銅版。擦ると画像が白黒反転して史実が強度をまして迫ってくるようだ。もうひとつの場のフロッタージュ。軍港宇品港につながる旧宇品駅プラットホームの遺構。大本営の設営、日清戦争開戦からアジア侵略の派兵がここから始まり、結果、原爆を呼び込むことになる。加害と被害を象徴するプラットホームの被爆石。一つの都市にふたつの場のふたつのヒロシマをみる。加害と被害。日本の近代化の一つの帰結がヒロシマに刻まれている。一方パリは、マレのユダヤ人街の建物に掲げられる拉致の史実の銘板のフロッタージュ。《ゲシュタポに捕られ／みな殺しにされた／アウシュビッツで／ユダヤ人として生まれたがために／忘れることなかれ》。あまりに具体的な言葉が鮮烈に飛び込んできて、目が痛くなるほどだ。20 世紀の都市に刻まれた「忘れない」のかたちを採取して交わす往復書簡のメールアート。いずれも個人史のなかから紡がれ組み込まれる。

広島市現代美術館の制作委託(1986)は原爆の痕跡を主題とするきっかけに根室空襲の消えかかる記憶を引き寄せたことからだったし、パリ滞在(1979)時から理解と応援のあったハタオとニドラ・ポーラー一家の影響がつよい。ユダヤ移民の娘として生まれ今はパリのマレに住むニドラは、「個人の友情以上の使命を感じながら」のガイドと応援だった。パリ／ヒロシマのアエログラムが貼り込まれたパネルが組み合わせられ円環状に吊られ、床には宇品のプラットホームが円環を突き抜けていく、スケールの大きな美しいインスタレーションで、東京エスパス OHARA(1997)以来の展示だった。円環の中にたち、ふたつの都市に埋め込まれた記憶に触れ、かつてそこに在った人々の小さな声を聞く、というものだった。

《仄暗い空間に、直径 7 m の円環が吊られ、床置き 22 m が刺さり込む展示。根室の赤く燃える町の原光景からはじまる私のヒロシマが、もうひとつの往還を辿ってオホーツクへたち戻ってきた(3 Aug. 1999)》

《この年の前半は随分と北見紀行を重ねたと思います。小さな、しかし熱い思いが少しずつ膨らみ、人と物事を巻き込みながらつよく裏打ちし、この地場を磁場にする「オホーツクのエッジから」発信できるいい展覧会になりました。足元を凝視することは、視線を世界へ遠くに、パラレルに放つことだと思いました。林さん、田丸さんと共になしえたことをうれしく思います。斎藤知子さんのこの展覧会にける思いを、北網圏北見文化センターの皆さんが総力で支えて、熱い力にしたこのつながりと人間的な思いの深さに、感動に似た気持ちを覚えます。(13 Aug. 1999)》

森のなかで、野付牛にふれる

ワークショップは、市民との共同作業。北見の地勢や歴史に触れようとするもの。野付牛はアイヌ語でヌブ・ウン・ケシ(野の端)と呼ばれ、1942 年市政が施かれ北見市になるまでそう呼ばれていた。広大な北見盆地の湿地帯から狩りにやってきたアイヌの人々はどこまでもつづくならかな丘をみてそうこの地を名づけたと語られる。この森でのワークショップは、ここの自然とともに過ごしてきたアイヌの人々の心、自然観や世界観にも触れることになる。古いファイルのなかの制作メモにはこう記されている。

岡部昌生フロッタージュ・コラボレーション・プロジェクト 1999

「森のなかで、野付牛にふれる」

多くの市民と路上で展開するフロッタージュのコラボレーション(共同制作)は、都市と美術の行為が一体となったものです。簡便な手法ゆえコンセプトと技法、創造の現場を多くの人と共有することが出来るからです。そこには美術とコミュニケーション、都市と美術、地域と美術と美術館、社会と美術……、外へ、周縁へ、環境へと関わっていく美術のフィールドを内包させながら、美術を実感し、美術と向きあい、美術をとおして現実と向かい合うことを促していきます。

野付牛公園は起伏に富んだかつての原生の記憶を色濃く保持する都市のなかの森。ここに生育する樹木の樹膚をフロッタージュします。ゆるやかな傾斜の大地の力を感じながら、みどりの空間をゆっくりと移動してみる。太い樹幹や梢、緑陰のつくる繊細なリズム、歩行のリズムが視線の移動と重なり呼吸し、身体のリズムに繋がりが広がっていきます。森を歩き巡りながら、擦りだされた一本一本の樹膚は、天と地をつなぐ燃え上がるような生命のかたち。それは、都市の記憶と自然の生命のかたちに触れることでもあります。

森のなかで、野付牛にふれる。

森のなかは大きなアトリエ。

森のなかは大きな緑の美術館。

森のもつ、生命あふれる空間のなかで、ものが生まれる現場を構想する。

森のなかにある、生命というものを実感する。

かすかに自覚する生命の感触というものにふれてみる。

樹膚がもたらえる生命の感触、葉や梢の、生命の先端にふれる感触。

自分のなかにある生命への感覚を呼び覚ましてみる。

森のなかのコラボレーションは、生命あふれる森とのコラボレーションです。

「森のなかで、野付牛にふれる」時間は、

「都市」と「自然」の狭間に添えられた「庭」で遊ぶ至福の過ごし方。

都市の記憶と往還するゆったりとした時間の過ごし方。

それは、わたしの少年の頃の、夢のような時間につながります。

野付牛公園の樹木をフロッタージュ(3)しながら、野付牛公園や北見の歴史、アイヌの人々の世界観、自然の生命について考えます。

樹木が保持する太古からのオホーツクの積層する時間にふれる。なにより手に伝わる生命のかたちに触れること。森から学び、森に触れる幅広いワークショップを構想しています。(Aug. 1999)

岡部昌生フロッタージュ・コラボレーション「森のなかで、野付牛にふれる」

1999年8月6日-9日野付牛公園

- ①アシスタントスタッフ募集
- ②参加者の募集
- ③スタッフのためのガイダンス
- ④コラボレーションのための作家によるスライドショー
- ⑤野付牛公園の樹木について
- ⑥北見の風土と歴史、文化について
- ⑦フロッタージュのトライアル
- ⑧森のなかに仮設の展示架台を設営
- ⑨仮設のベンチのような横長の書架設営
- ⑩森のなかにカラーコピー機設置
- ⑪森のなかにモニター設置
- ⑫野付牛公園で制作 森はアトリエ
- ⑬アシスタントスタッフの作業分担と対応
- ⑭制作班
- ⑮写真とビデオ撮影記録班
- ⑯展示班
- ⑰森のなかでの展示(オリジナルとカラーコピー版画)
- ⑱ベンチのような書架に作品ファイルの展示

- ①樹木の樹幹にピンナップで展示
- ②制作風景がモニターによって放映
- ③森のなかのテンポラリーな美術館
- ④森のなかでトークショー
- ⑤制作キット(紙 A4 版 50 枚 鉛筆 ブッシュピン フィクサチフ 布テープ ファイルなど)
- ⑥樹木マップ
- ⑦昼食 飲み物 帽子 タオル
- ⑧参加者：市民 102 人 ボランティアスタッフ 21 人 記録班 4 人 スタッフ 10 人 美術関係者 8 人 野付牛公園 8 ha

《自然のなかで、巨樹の樹膚から伝わる感触を体内に取込ながら、街の時間やいまの自身と重ね、堆積していく時の記憶の記録です。参加した多くの人たちに記憶されることを願っています。(13 Aug. 1999)》

《2,500 枚を超える樹膚の色とりどりのファイルが森の仮設の展示架台のに載り、緑の起伏に沿って空間を切って延びていく印象深い森のインスタレーションでした。この市民参加のプリントワークの行為が、これに関わり目撃した多くの人たちにプリントされ記憶されることこそわたしたちのコンセプトでした。1988 年のオーストラリア、ヌーサのコラボレーションから 10 回目となる「森のなかで…」が開館 15 周年の記念の年にオホーツクで展開できたことを感慨深く思います。(13 Aug. 1999)》

《会期が「原爆の日」や終戦記念日を十分に意識して設定されていること、今になって気づきました。観者も岡部さんの作を見た後で、新聞で原爆や終戦の活字を目にして、もう一度反芻していることでしょう。(江川博 9 Aug. 1999)》

《憧れの北見へ 地名への憧れ 広がる空への憧れ 濃い土へのそこにすーっと根を伸ばす木への憧れ 谷間から訪れた者をゆるやかな掌で迎えてくれた大地のつながりに感謝 触多樹 木に触れる 自分に触れる 木のしたたかさが指先から伝わる 初めて夕張の土と草と木にわたしも直に触れたい 暑さの真っ只中で動くことの快さを体験させてくれた北見の自然と人にありがとう 今回もいい時間を素敵な人たちと 共有できたことを感謝いたします。(上木和正 14 Aug. 1999)》

《これまで、美術表現についての言葉による描写の不確かさに、言い知れぬ焦慮感を感じていましたが、あそこで樹肌にふれながら腕を無心に動かしていることで、少し気が楽になりました。造形言語の記述には、どのように裏打ちが可能かということ考察する機会となりましたから……。例えば、ポプラの根元にあった枝払いの跡。その深いウ口のような凹みをどう刷りとろうかと、つい熱中しながらその凹凸を平面に取り込んだだけですが、言葉として「手のキュビズム」という言い方が閃きました。視覚における科学的な成果としてのキュビズムが触覚の所産として成立している(ようだ)。そんな受信感覚が新鮮でした。貴兄の仕事「ピッキに触れて」がまさにこれだったと、気づきました。こうしたコラボレーションは、貴兄にとっては 10 回目になるということですが、それは現代美術と市民を結び営みとして有効な手段というばかりではなく、現代社会では忘れられかけている人間本来の無償の能動性が、眼を覚ます契機となるように思います。(吉田豪介 18 Aug. 1999)》

森ニイマス

2011年 8月 25日 北網圏北見文化センタープラネタリウム+野付牛公園+美術館

北海道高等学校文化連盟網走支部平成 23 年度第 56 回美術展・研究大会(8/24-26)は、北網圏北見文化センターを会場として事務局北海道美幌高校、会場当番校北海道遠軽高校を中心として運営され参加 12 校、展覧会出品者数 168 名、参加生徒人数 167 名、顧問 18 名と大会役員によって構成された。研究大会は教育現場の現況もふまえて、1999 年の「森のなかで、野付牛にふれる」実施の繋がりと経験、美術教育に携わる美術家として連携するワークショップが大学の理解もあって実現した。

前項で記述したワークショップのコンセプトと手応えを「森ニイマス」に援用した。その成果をガイダンスや実施の詳細をひとつのテキストにすることができたこと、私自身にとっても、自然を対象とするワークショップが進化し深化することができた。その応えが参加者ひとりひとりの森の中での体験として綴られている。

森の中に入り、さまざまな生命に触れた。今まで感じることのなかった感覚。

- 雨が降ってきて、木が潤って、そこに私が入って、なんだか浮かんでいる感じでした(高橋杏奈)
- うまくできなくても夢中で手を動かしていました(三嶋奈々)
- 森の中に入り、久しぶりにその大きな懐に入ることができ、気持ち落ち着いて心が静かになっていく自分を感じました(小堀芳子)
- 木はすごいなあ(佐藤梨緒)
- 森とともに生きてると実感しました(工藤美幸)
- 野付牛の木は、存在感があり雨に濡れていても温かみをもっている(結城未来)
- 木をよく見ていると、虫が木をのぼったりおりたり、森と近くになれた気がした(鈴木美憂)
- 樹膚にはその樹が

生きてきた歴史を感じた。シンプルだからこそわかることがあるのだと実感した(青木琴音)●生命を写す素敵な作業だとわかった(横井智香)●生きた樹を生きた作品にする素晴らしさを体験することができた(大和典一)●森から少し力をももらった(河野芽衣)●自分が描くのではなく、木が表現しているように感じた(稲葉まり)●あいにくの雨、逆にまた「水」から「命」というものを感じた●絵のカーみんなの絵を集めるとすごいインパクトがあって絵の力ってすごいなあ(古瀬雪菜)●静かであり、やわらかであり、森はとても表情ゆたかな場所(藤井麻由)●木のウロを触ると、木の生きてきた恒久の刻が私のなかにしみわたった(竹林ひかる)●森の中に入り、さまざまな生命に触れたことで今まで感じることのなかった感覚を知った(名古屋夢乃)●紙の上に木が写しだされていくのが楽しかった。紙面に木が生えたような感覚でした(成々澤まり乃)●フロッタージュするとき、木に手を触れ、「何色がいい？」と心で聞きました(中原礼子)●一人一人が個性豊かな色で好きなように木をフロッタージュすることで、色とりどりの素敵な森をつくりだせた(葛西美穂)●木のいままで生きてきた生を写しだし、別々の生きものながら、お互いになにかを感じあいわかりあえた気がした(瀧口紗己)●自然に触れ合えて、それがアートになったことにとっても感動しました(坂地葵)●あんな自然に囲まれてみんなで何かするのは初めてだったので、とても新鮮でした(飛澤佑香)●森のなかでの作品づくりは生きていることを感じる経験でした(榎本すずの)●森にいと、匂いや音が感じられて、森と一つになったような気がしました(佐藤ひかり)

あいにくの雨だった。湿った空気が森の匂いを一層つよく感じさせ、濡れた緑が森を大きくみせた。樹に触れると、ぬくもりが身体に入ってくる。樹が生きている、森が生きていると感じたことだろう。フロッタージュは触る、擦る、手を動かすという身体行為。そこから発せられることばは、本能に近いような、無心になれる普遍的な領域にたどりつくような感覚だろう。草花や虫、小さな生命にも眼差しを注ぎ、何より自分も虫や樹と同じく生きているという親しみと近さの感覚が開かれていることを、森から還ってきて書かれた感想文から、そう感じとれた。「森ニイマス」は、「私が森のなかで」思考し感覚を全開して「在ることの意識」を自らに促していく、否、森に促されているのだろうと思う。

初めて樹木に触れたワークショップは1992年、札幌でのチキサニ・プロジェクト。教科書会社の企画ページの委託で、「地域のなかで美術すること」の試みとしてだった。札幌市内の中学生と一日がかりのハイキングのように、紙と鉛筆と地図をもって街をめぐった。チキサニはアイヌ語でハルニレの樹の名前(4)。《かつて札幌は原始の森に覆われ無数の川が毛細血管のように張り巡らされていた。都市の生成が森と川を失ったが、先住民族のアイヌの人々にとっても、開拓に加わった人にとってもハルニレはランドマークのような樹木であることから多く残されている。市内のハルニレを巡りその位置を地図に印し、さらに古い地図に重ねあわせたその位置に、かつての川の存在のあることを知る。アイヌ神謡の国づくりに登場するチキサニ姫ものがたり、人間(アイヌ)の火の獲得、アイヌの自然観、都市の歴史と(都市の)原像などさまざまな川をめぐるイメージが想起させられるワークショップだった。》(「市民との主なワークショップ 岡部昌生フロッタージュ・コラボレーション・プロジェクト」岡部昌生 わたしたちの過去に、未来はあるのか」東京大学出版会)

この時、事前の学習のひとつとして、『カムイ・ユーカーラ アイヌ・ラッ・クル伝』(山本多助 平凡社)のなかから古代人の天地創造ものがたり、美しいハルニレの女神(チキサニ姫)の物語を伝えた。人間(アイヌ)の誕生と火の獲得、壮大なものがたり世界のなかで人(アイヌ)が誕生していく国づくりものがたりが語られ、想像力をひろげ、ものを生みだす力を刺激してくれる。アイヌの人々の歴史と文化が結晶した素晴らしい世界である。ヌブゥンケシ(野の端)野付牛の語源の響きを今に残す森には十数本のハルニレが聳えたつ。今回も美しいチキサニ(ハルニレ)姫の物語を伝えて、森に向かった。







「森ニイマス」参加者の感想文

遠軽高校1年 佐々木通

強い雨と大量の蚊のせいでたったの4枚しか描くことができなかったけれど、久々に自然に触れ合えたのでとても楽しかったです。

遠軽高校教員 藤根淳一

フロッタージュは初めての経験でしたが、新しい描写の視点としてとても新鮮なものでした。当日はあいにくの湿り雨でしたが、わかりやすい技法の説明によって生徒の中でもとてもよく描いていた生徒もあり、大変良い研修会となりました。ありがとうございました。

留辺薬高校2年 佐藤杏南

部活中に、何回かフロッタージュをしました。外で、しかも森の木々をやるのが初めてだったので、とても楽しかったです。その時は、雨が降っていて木以外にフロッタージュできなくて残念でした。フロッタージュは最もカンタンな美術だけど、その中に深いものがあるのだと思いました。でも正直、私のものは子供の落書きかと思いました。不思議です。自然と触れ合うのは楽しいと思いました。

留辺薬高校2年 奥澤ゆずき

はじめてのフロッタージュだったけど、楽しかったです。最初は、フロッタージュをやるのは、嫌だなと思いました。だけど実際に外に出て、説明をもらい、実際にフロッタージュをやったら、とても楽しかったです。木の名前などもわかって、勉強になりました。

留辺薬高校1年 佐藤句瑠未

最初フロッタージュがなんなのか知らなくて、一体どんな事をするのだらうと思っていたけど、フロッタージュのDVDや実際のやり方を見て、とてもカンタンなもののだと思いました。でも、自分が実際に紙に紙をはりつけ、クレヨンでぬっていくと、思いのほかなかなか木のデコボコ感が表現できなくて、フロッタージュはかなり奥が深い技法なのだと思います。雨が降っていて、蚊もいてとても嫌な環境でしたが、紙にうまくデコボコ感が出るよう何度もやるのに夢中で、蚊は少し気になったけど、雨は全然気になりませんでした。外で木のフロッタージュをする気なんてめったにないので、今回の研修はとてもいい思い出になりました。

留辺薬高校教諭 福田淳史

フロッタージュの技法が面白く、とてもめり込んで作業が出来ると思います。今回の研修はクレヨンでした。レクチャーガイダンスで見た時の音がクレヨンではだせなかったのが非常に残念でした。

留辺薬高校3年 飛澤佑香

最初は雨が降っていて「うわっ！」と思いました。こんな中で研修会が…とちょっとテンションが下がっていたのですが、研修でいろいろな木をフロッタージュしていくうちに楽しくなって、気がつくとも8枚も完成していました。あんな自然に囲まれてみんなで何かするのは初めてだったので、とても新鮮でした。ファイルが泥まみれになったり、5本ぐらいクレヨンを折ったり、トラブルは沢山あったけど、機会があればまたやりたいなと思いました。すごく楽しかったです。

遠軽高校3年 窪内瑠里

蚊や雨がとても嫌だったのですが自然と触れ合えて楽しかったです。

遠軽高校2年 石川瑞稀

初めてフロッタージュをしてみてもおもしろかったです。スライドショーを見た時、どれもすごいと思いました。フロッタージュでは、すごいいろんな木の種類があってびっくりしました。楽しかったです。

遠軽高校3年 山口いずみ

蚊がたくさんいたり、雨がザンザン降ってきたりと、大変な環境での作業でしたが、森と触れ合ったりするのがとても楽しかったです。

遠軽高校2年 佐々木麻由

自然の、木によって違う感じが、人によって違うということと似ていると感じました。私の地元にも山とか自然はありますが、改めて自然の偉大さを感じることができました。

遠軽高校2年 堀嶋彩希

一口に木、木肌と言っても色々な種類があるのだな、と思いました。同じ木でも、一つひとつ、場所によっても柄が違って、フロッタージュしやすい木、しにくい木、柄がよく出る木、でない木。クレヨンの色や、斜めに塗るか、横に塗るか、縦に塗るか。色々な組み合わせで全く雰囲気の違いのものになりました。人と同じで、木も1つ1つ違うのだな、と思いました。

遠軽高校2年 平塚里梢

初めに、説明を聞きながら野付牛公園の木々を見わたしていたとき、私は立ち並ぶさまざまな木と空を隔す

葉々に圧倒されました。フロッターージュの作業をはじめ、1つひとつの木肌にも差があることに気付いて面白かったです。家の周りにも自然が多いので、今度じっくり観察してみようと思いました。

遠軽高校3年 井上加菜

今回、初めて木の上から紙でクレヨンを使って、木の肌を出すのが難しかったです。しかし、研修を通して紙から浮き上がる木の肌がわかり、勉強になりました。研修中は、雨も降り、蚊も多く、クレヨンでやるのがとても大変でした。

遠軽高校3年 工藤綾華

何気なくある普通の木を使って絵を描くなんて考えもしませんでした。自然とあんなに触れ合う事はあまりないので、とても楽しかったです。また、いろんな木を観察したり、触れたり、とても貴重な体験でした。しかし、少し蚊が多かったので大変でした…。

遠軽高校3年 山崎達也

木を使って描く、とてもユニークだと思いました。実際やってみて楽しかったです。この研修で何かを得たような気がします。

遠軽高校3年 七條信夫

自分は初めてフロッターージュをして、うまく出来なかったがこれを描けるようになればいろんな事を表現できようになるのだらうなと思いました。

遠軽高校1年 長屋里穂

初めてフロッターージュという技法で絵を描いてみて、シンプルなのに、結構難しかったです。森の樹肌なんて、生まれ初めて描いたけれど、どの木も違う質感で面白かったです。あいにくの雨で、たくさん描くことが出来なかったのも、次は天気の良い日にやりたいなあと思いました。

遠軽高校1年 佐藤梨緒

今回の研修を通じて「木はすごいなあ」と思いました。同じ種類の木なのに、木の肌ざわりが違ったり、もちろん違う木同士でも肌ざわりが違ったり、木の生命力を実感しました。今回の研修では、新しいことを体験できてよかったです。

遠軽高校1年 山下朋香

雨が降っている中での研修でしたが、フロッターージュを通じて自然の豊かさを感じることができて嬉しかったです。木がたくさんある場所に行くことは滅多にないことなので、すごくいい経験となりました。また、岡部先生の話も聞くことができてよかったです。

斜里高校3年 薬科誠実

木の説明を聞くことはたまにありましたが、木自体に触れたりすることは本当に久しぶりでした。見た目はゴツゴツとした木肌なのに実際に触れてみると本当は柔らかく、驚きました。このような体験をすることは、これからもっと少なくなっていくと思うので、今回のフロッターージュはとても勉強になりました。本当にありがとうございました。

斜里高校3年 植木沙也加

木のフロッターージュは初めてだったけど、自然と触れあうことができて良かったです。木の名前も知ることができて良かったです。コインでやるよりも少し難しく大変だったけど楽しかったです。

斜里高校3年 川口伶奈

森の中は虫がたくさん居て嫌でしたが、作品を制作している間は虫の不快感を忘れるぐらい真剣に塗れたと思います。このような試みは小さな子供から高齢者の方まで、幅広く楽しめると思います。ありがとうございました。

斜里高校3年 三谷正美

木はいつも近くにあるけれど、改めて木をきちんと近くで見ると一つひとつ全然模様が違って木を擦り出しすると同じ木でも違う模様ができて楽しかったです。

斜里高校3年 北浦愛由美

自然に触れながら研修をするとは思いませんでした。

森の中に入るととてもリラックスでき、フロッターージュをしているときは時間を忘れて作業をしていました。また生き物を見たり木の説明を聞いたりとても楽しかったです。なかなかクレヨンでこすっても浮き出てこなく、とても難しかったです。

斜里高校教諭 工藤美幸

木の表情を写し取る作業をする生徒の表情もとても活き活きとしていました。あの時、あの作業を通じて私達は森とともに生きていることを実感しました。ありがとうございました。

訓子府高校教諭 中村善教

森の中に居て、樹をフロッターージュすることにより、樹の生命力を感じることが出来たように思います。1本1本異なる樹皮の違いに、樹の重い、樹の気持ちを想像しながら色合いを考えて作業するおもしろみを感じました。また次は石や岩でやってみたいです。

訓子府高校2年 山崎佳恵

フロッターージュという技法はしたことがありますが、その名前がフロッターージュというのは知らなかったのもので、勉強になりました。木に紙をおしあててクレヨンで浮き出るのが、すごく楽しくて、10枚は出来ませんでした。5枚ががんばりました。今回は外での作業で、すごく楽しかったです。

訓子府高校2年 村井早織

今回のフロッターージュをやってみて、樹の表面が写すのにとっても苦労しました。表面を出すのに良い方法を見つけたのですがそれでも全然出来ませんでした。普段、部室などで描くとは違い描きづらい部分もあったのですが自分の中で描くのもいいなと思いました。めったに出来ない体験だったので、不思議な感じでしたし、とても勉強になりました。

訓子府高校2年 三浦優希奈

フロッターージュをやった感じは、初めてだったけど楽しかったです。木の大切さなどを改めて感じる事ができたと思います。

訓子府高校1年 南出すみれ

フロッターージュという技法を初めてやって、とても楽しかったです。木をフロッターージュするのはとても難しかったけど、色々な木を擦り取るのは面白かったです。たくさん色を使ったり、ひとつの色を使ったり、色やクレヨンの使い方を変えるだけで色々な表現になって、人をそれぞれ違うものができて、たくさん作品を見るのもすごく楽しかったです。

訓子府高校2年 河野芽衣

久しぶりに森の中に入ったのでとても新鮮でした。森から少し力をもらった気がしました。

訓子府高校2年 長谷川綾花

いつも同じ室内でしか作品を描かないので、外で描くというのがとても新鮮でした。フロッターージュという技法も知らなかったのもので、とても楽しかったです。木の幹が作品になるというのが面白くて夢中で描きました。去年の研修とはまた違った研修でとても勉強になりました。

訓子府高校2年 伊藤葉月

色々な木を見て、一つひとつの木が違う形でおもしろかったです。途中で雨が降ってしまいましたが、これも今となっては思い出です。楽しい一日をありがとうございました。

訓子府高校1年 濱口萌衣

感じたことは、皆さんのとても上手な絵を見せていただき嬉しく思っています。それと、フロッターージュはとても難しかったのですが、森の中に入り、虫や木々たちと触れ合ったという、良い思い出ができました。描くのがとても大変だったのですが、自分の好きな色などを使って描くことが楽しかったです。それに、皆さんの描いた絵は個性があって見えて楽しかったです。いろんな形があって、いろんな色があって、いろんな模様が合ったことに少し感動しました。雨にぬれながらも一生懸命

やらせていただきました。苦労しながら描いた絵は、とてもステキで自分の中の思い出の1ページになると思います。このような機会をつくっていただきありがとうございます。雨の天気ではなく晴れの天気で、またこのような機会をつくってくれることをお願いいたします。とても、楽しくできてとても嬉しいです。本当にありがとうございました。

訓子府高校3年 戸田捺美

初めてフロッターージュという作品を作成してとても楽しかったです。今回は残念ながら雨の中の作業でしたが、実際にやってみてどうしたものなのか、また自然の中でどのような作品ができるのかなど知ることができました。

訓子府高校1年 長谷川和紗

フロッターージュは、初めて聞いた技法で、最初「それも技法なの!？」とびっくりした記憶があります。森の中に入るの、覚えている限りでは初めてで、すごく「木って大きい」とか、写真とかで見ると、ざらざらしてて触ってみると思ったよりも、懐かしい?と感じることもありました。フロッターージュは、全然木のあとが残らなくて、すこしイラッとしたところもありましたが、クレヨンを横に使うとあとが残りやすいのだとわかりました。跡が残ると、やっとフロッターージュの良さがわかってきたような気がします。森の中は、とても神秘的で、きれいで(蚊がいなければ)次の作品は、木や草をやってみたいな、と思いました。今回は、本当にありがとうございました。

訓子府高校1年 宮本莉奈

フロッターージュは最初変わっているなあと思いました。先生のをしていると、とてもおもしろそうに見えました。実際にやってみると、とてもおもしろかったです。難しいものかと思っていました、そんなことではなく簡単に描くことができてよかったです。クレヨンでやっているとすぐにクレヨンが折れてしまっ大変でした。木に紙をおきえてやっているとポコポコにした木の感じがすごいなあと思いました。今度は鉛筆でもやってみたいなあと思いました。

訓子府高校2年 川又未来

木に紙をあてて描くという描き方は初めての経験で最初はなかなかうまくかきけなかったけど、最後の1枚くらいはうまく描けてよかったです。自然の中で描くということで虫や雨などに襲われながら大変だったけど、とても貴重な経験ができてよかったです。

訓子府高校3年 佐々木亜衣

初めてフロッターージュというものをやって、ただ絵の具を使って描く絵では味わえない楽しさを味わうことができた。

網走南ヶ丘高校1年 千葉 優

昔、紙の下にコインなどを置いて、上から鉛筆でこするという遊びが私の中で流行っていたことがあります。まさかその方法がフロッターージュというものだとは思いませんでした。木でそれをやるのは難しく、とても大変でした。またクレヨンということもあり、なかなか上手くはいきませんでした。しかし、外で自然と触れ合いながら作品を作るということで、私の中に何かが生まれたのを感じた気がします。

網走南ヶ丘高校3年 小助川有里香

普通生活している森との接点がほとんど無いものなので、今回昔のままの姿を残した森に入り、木に触ったり作品をつくったりとなかなかできない体験ができました。森にいる間は、人以外の生き物についてや、昔の森の姿を想像したりしておもしろく思いました。貴重な体験をさせていただきありがとうございます。

網走南ヶ丘高校3年 横井智香

最初はフロッターージュが何をすることかわからなかったけれど、木に触れて描くことはとても楽しかったです。木に触れたのは、本当に久しぶりで森林浴効果が無心になって描けた気がします。昔、誰かがここにいたと考え

ても面白いと思いました。フロッタージュは生命を生き写す素敵な作業だとわかった良い経験でした。

網走南ヶ丘高校3年 猪崎奈津美

初めてフロッタージュをしたので、最初はコツがつかめず苦戦しました。後の方からは色や描き方も工夫できて面白いなと思いました。木でやるのは楽しかったですが、また機会があったら色々なものでやってみたいと思います。自然に触れられて楽しかったです。

網走南ヶ丘高校3年 葛西由香

最近、受験勉強などで忙しく、自然から離れた生活をしていましたが、今回の研修でたくさん木の、そして自然に触れ、そのものが持つ優しさ、あたたかさを改めて感じ、心がほっとしました。

網走南ヶ丘高校1年 佐藤未來

森の中で、たくさん自然にかこまれてフロッタージュをするという、初めての体験ばかりでしたが、森の中にいることで、たくさん「命」を感じながら取り組んだ作業は、とても気持ちよかったです。あいにくの雨でしたが、それが逆にまた「水」から「命」というものが感じられたなあと感じました。

網走南ヶ丘高校1年 藤井麻由

すごく久しぶりに木に触れました。静かであり、やわらかであり、森はとても表情が豊かな場所だと思いました。

網走南ヶ丘高校2年 名古屋夢乃

緑豊かな北海道の地に住みながら、今まで森に足を踏み入れる機会はありませんでした。ですからこの研修において森の中に入り、さまざまな生命に触れたことで今まで感じることの無かった感覚を知ることができました。貴重な体験をありがとうございます。

網走南ヶ丘高校2年 結城未來

せっかく自然が身近にあり、恵まれた環境で生活していたのに、なかなか木にふれる機会がなくて、今回の研修で久しぶりに自然にふれました。野付牛の木は、存在感がとてもあり、雨にぬれていても、温かみを持っていました。フロッタージュという作業をしたのは初めてでしたが、手軽に自然の形を手元に残せて、とても楽しかったです。

網走南ヶ丘高校2年 成ヶ澤まり乃

フロッタージュというものを経験したのはこれが初めてです。今回森の中に入り、木肌を擦り取って感じたことは、今まで意識していなかった木のあたたかさ、たくましさなどです。太い木もあれば細い木もあり、葉の形も多種多様で、自然の世界の広がりを感じとれました。雨が降っていて虫が大量に発生していましたが、これも自然の中にいるからこそのことだと思いました。木肌をすりとり中で、紙の上に木が写しだされていくのが楽しかったです。紙面に木が生えたような感覚でした。

網走南ヶ丘高校2年 藤田梨緒

私はフロッタージュを体験するのが初めてでしたが、思っているよりも難しく、うまく木の跡ができませんでした。でも、普段生活している中で忘れかけているような自然や木に触れながらフロッタージュすることで、すごく良い経験になった気がします。いつも筆で描いているのとは違う、こすることで感じられる自然の感触のようなものを忘れないように、これからの作品にも生かしていきたいと思います。ありがとうございます。

網走南ヶ丘高校2年 熊谷麻莉恵

私にとって森は小学校のときに行って、すごくウジャウジャしたミミズの集団のようなものを見た以来、来ていませんでした。その森は網走の公園の森ですが、何年かぶりに森の中に入って森に包まれるような気になりました。すっかり森のことを忘れていた私を森は優しく受け入れてくれました。何年かぶりにあの頃より成長した私は今回改めて森の大きさを知った気がしました。今度は網走の森に行きたいと思います。

北見藤女子高校1年 堀田美月

雨が降ったりして大変だったけど、久しぶりに木に触れて、楽しかったです。ありがとうございます。

北見藤女子高校1年 阿部松梨奈

雨の中で蚊に怯えながらフロッタージュするのは辛かったです。クレヨンで木を写すのが懐かしかった。

北見藤女子高校1年 貞廣有佐

雨中、虫がいっぱいて正直怖くて木にも出来れば触れたくなかった。(木に虫がいっぱいたが多分虫が雨やどりしていたからだと思う。)蚊などが寄ってきて追い払うのが大変でした。けれど美術部の皆とこんな活動が出来て楽しかったです。

北見藤女子高校1年 高橋遥香

正直なことを言いますと、虫がいたので楽しめなかったです。虫がいなかったら自然の中で楽しんでいただいでしょう。せめて蚊がいなかったらよかったです。しかし、フロッタージュは今までやったことのないことなので新鮮でした。

北見藤女子高校1年 竹田 茜

大人になっていくにつれて、森の中に入る気がなくなってきたので、久しぶりに森に入り木に触れたので楽しかったです。雨が降っていて集中できなかつたのが、残念です。晴れた日にもう1回やってみたいです。フロッタージュを初めてやって、だんだん木の模様は浮かび上がってくるのが楽しかったです。次は鉛筆で石などをやってみたいと思いました。

北見藤女子高校3年 稲葉千佳

フロッタージュという方法もやり方も初めて知りました。美術は本当に一人ひとりの感性があるので同じ作品はうまれないし、感想等もすべて違うということはこの研修を通して再確認できました。スランプがいっぱいあって、それゆえに絵から遠ざかることもあったのですが、スランプの時こそよたさんの作品を見て参考にして、向上力を高めたいと思います。時間があたらいろんなものをフロッタージュして楽しみたいと思います。

北見藤女子高校3年 竹中彩乃

森とあまり触れる機会がなかったので、今回「フロッタージュ」ということで、森をとても近くに感じました。木の凹凸がクレヨンの彩色と共に浮かびあがるのが、とてもキレイだなと感じました。またフロッタージュをいつかやってみたいなと思いました。今回は、ありがとうございます。

北見藤女子高校3年 野崎倫未

初めてフロッタージュをやってみて、たくさん樹木の模様が分かって楽しかったです。普段、木をさわったりする事がなかったので、フロッタージュをやって肌で感じる事も出来たので良かったなと思いました。木の他にも、いろいろな物をフロッタージュしてみたいと思いました。

北見藤女子高校1年 高木彩花

今回、初めてこの大会の研修で、フロッタージュを体験してみて、木や地面をクレヨンで紙の上に擦り出す方法がすごく新鮮で楽しかったです。でもやっぱり、初めてやった私よりはるかに先生の作品はすごくて、本当にその木を写しとったみたいで、またやってみたいと思いました。

北見藤女子高校2年 佐野穂乃香

雨の中の森は大変だったけど楽しかったです。みんなそれぞれ違ってました。木とか地面とか壁で絵ができるなんて驚いたけど楽しかったです。

北見藤女子高校2年 富田明日香

最初は難しそうだなと思ったけど、紙に写ると意外と簡単で、楽しかったです。森の中に入って虫は嫌だったけど、最終的に良い思い出になりました。

遠軽高校2年 新関聖夏

はじめてのフロッタージュは雨が降っていて蚊がたくさんいたけど楽しかったです。最初はうまくいかなか

たけど、数を重ねるうちにコツがつかめて嬉しかったです。自然ともふれ合えてよかったです！

北見北斗高校教諭 大和一典

フロッタージュ。初めて経験した生徒ばかりで良い研修であったと思います。子どもの時に鉛筆と紙でこぼこの物体をなぞった生徒はいますが、大きな紙に樹の表面を表現する際、なぞる方向、クレヨンの面積のとり方、力加減で全く異なる作品となり全てが様相の違うものが出来上がる楽しさ。また生きた樹を生きた作品にする素晴らしさを体験することができました。人間の手によって、方法によって「生かす」または「生かさない」ということに影響を及ぼすことがまさに自分の手で操作するといった奥深い研修でありました。貴重な体験をさせていただき感謝申し上げます。

北見北斗高校1年 稲葉まり

今回、フロッタージュという美術を初めてやりました。先生が見本でやっているのを見たら、簡単そう！だと思ったのですが、実際自分でやってみると全く樹を写しだすことが出来なくて難しい！と思いました。そして、とても面白い！と思いました。自分が描くのではなく、木が自分で表現してくるように感じました。2色の色を使うと深みがでて、3色使うと動きがでて。新しい観点で木をみる事ができました。そして油絵や水彩画しか知らない私は、フロッタージュという美術は新しく興味を引くものでした。自分が日々、目で見ているものが、また違う物としてあるように思える。そしてそれを描いているのは自分なのだと思うと、わくわくしました！！

北見北斗高校3年 山根志織

岡部先生のフロッタージュの作品の制作過程の映像を見て、ただ鉛筆で石などを写しとっているだけのはずなのに、他の画法にはない独特の迫力のようなものを感じました。実際に本物の作品を見てみたかったです。森でのフロッタージュは思ったより難しかったです。岡部先生が木に紙をあてて写し取っていたときはとても簡単そうに見えたのに、実際に自分でやってみるとなかなか木目が写し取れなくて、フロッタージュは奥が深いと思いました。充実した爽りの多い研修でした。ありがとうございます。

北見北斗高校3年 榎本すずの

あいまいな表現技法で表す作品作りはかなり衝撃的でした。森の中での作品づくりは生きていることを感じる経験でした。木の表面は見ただけでは感じられないものが多いですが、触ってみると感じるものが多くなるのかもしれない。また、近くで見ると、虫の生命をより近く感じられ、私たち人間と同じように生きている、息をしていると改めて深く感じる事ができました。今回は展示会の研修会としての参加でしたが、また何かふとした機会にやってみたいと思います。

北見北斗高校1年 津嘉田真梨子

森の中に入ると、入る前は気がつかなかった広大な自然が広がっていました。さっそくフロッタージュの作業に入ってみると、木の表面の凹凸がきれいにでてとても面白かったです。色を塗る方向によっても模様の出かたが違うので、色々な描き方を試しながら、自然を感じていました。今度フロッタージュを使って絵を描くときには、樹木の表面だけでなく、他の素材も使ってみたいと思いました。

北見北斗高校1年 柴原 悠

今回、初めてフロッタージュという画法をやりました。森の中に入って、雨にぬれながら、という大変な研修でしたが、実際に木に触れている間に、心があたたかくなりました。絵自体は上手くいかないことばかりでしたが、普段とは違う絵を描け、貴重な経験が出来たと思います。ありがとうございます。

北見北斗高校2年 安瀬裕太

最近僕は見たものになんでも影響を受けます。ですから今回のフロッタージュもとても影響を受けました。僕ははもを作ったりすることが好きで、特に曲を作ること

が好きです。なぜなら歌というのはメロディーを通して、自分の思ったことや感じたことを詩にして、人々に伝えることができるからです。あと、しゃべることが苦手な僕でもカセットなどに録音して、みんなに聴かせるからです。その点でいえば、詩や小説もそうかもしれません。そして今回新たに人々に自分の思いを伝える方法がわかりました。それは芸術というものでした。今まで僕は芸術というものを作品としてしか見ていませんでした。しかし岡部先生は芸術を通して戦争の悲しさなどを表現しています。ですから僕もこれから、絵や立体作品を作るときには、そういうことも考えて芸術作品を作っていきたいと思います。本当にありがとうございました。

北見北斗高校2年 幸崎雅恵

自分は2年生になってから美術部に入学したので、支部大会研修に参加したのも初めてでした。当日は雨が降ってしまい、靴はどろどろになってしまいました。雨のおかげ？か、蛙に出会えたのがとても嬉しかったです。プロッタージュの1枚目は木目がまったく出ず、幼稚園児のお絵かきみたいな感じになってしまいました…。2枚目はきちんとキレイに木目が出て、嬉しかったです。3枚目、4枚目は木目を使って模様や柄のようなものを出してみました。

北見北斗高校1年 太田早紀

今回、初めてプロッタージュを体験してみて、木の模様が本当にたくさんあって、びっくりしました。そして、どんな模様がでてくるのか、描くたびにわくわくしました。普段あまり気にしていなかった木や森を知ることができて、とても楽しかったです。これからまた、プロッタージュをする機会があれば「参加してみたい!!」と思いました。今回は、多くの事を教えていただきありがとうございました。

北見北斗高校1年 鈴木美葉

最近、自然と触れ合うことがなかったので、良い機会になりました。木を良く見ていると、虫が木をのぼったりおりたりしているのがわかり、森と近くなれた気がしました。うまく木の凹凸が出なかったのですが、楽しかったです。プロッタージュは保育所に通っていた頃にやったことがあるだけで、それ以来やったことがなかったので新鮮でした。木や石だけでなく、色々な物をプロッタージュしたいと思いました。

北見北斗高校1年 根本有紗

絵を描いて、改めて自然のあたたかきを感じました。普段は部屋にこもって絵を描くことが多いのですが、今回の研修では外で絵をかくことの楽しさや喜びを体感しました。描くものに直接見て、触れることで、私の中で描く物に対しての新しい見方を見つけることができて、本当によかったと思います。これからは、この研修で学んだことを生かして、自分の絵をもっともっと素晴らしいものにしていきます。このたびは、本当にありがとうございました。

北見北斗高校1年 千釜玲香

普段木を触ったりすることはあまりないので、今回の研修で、木とふれ合えてよかった。プロッタージュは、ただこするだけなので簡単だと思っていたが、きれいに模様がはず、難しかった。雨が降っていたので虫はあまりいないと思っていたが、蚊が大量発生していた。木の葉が雨を遮ってくれて、木の幹は全然ぬれていなかった。

北見北斗高校1年 千釜遥香

雨が降っていたが、木が雨を遮ってくれてあまりぬれなかった。木はいいなと思った反面、蚊がたくさん居たのは嫌だった。こすって下の物を浮き出させるあの行為にプロッタージュというカッコいい名前がついていて、岡部先生はすごくアツ(こすっているだけなのに!!)でプロッタージュをあなどっていたなと思った。そして、プロッタージュ難しい。簡単そう、鉛筆やレースや葉っぱをこすり取るより、木+クレヨンが難しく、模様がほとんどでないこともあった。皆で1つのもを作るのは好きなので、今回みんなで貼ったりできて良かった。出

来た作品もたくさん並ぶとキレイで、良いと思った。

北見北斗高校3年 森田 航

この研修は2日とも雨で森でのプロッタージュはなかなか難しかったです。でも、おもしろい体験ができてとてもよかったです。また、今回の大会では、とても良い作品が多くて驚きました。今回の大会で3年生になって初めて入選しました。夏休みの少し前から描き始めて、夏休み中美術室の暑い部屋の中で描いていたので、なかなか作業に集中できず、完成できるのかも思いましたが、なんとか完成させることができました。今回出展された作品を見ていて、幻想的なものや、自分が過去に見たことのある風景、すごく惹かれるものも数多くあり、非常に良かったと思っています。

北見北斗高校2年 月居美雪

木の表面をよく見ることが今までなかったので初めての経験でした。なかなか木の模様が出ず、コツがつかめなくて苦労しました。クレヨンもたくさん折れたり、爪の間に挟まったり、指でこすって伸びてしまっただけでこれまた大変でした。木の葉でもできたらしそうだと思います。

北見北斗高校2年 尾崎真紀

なかなか思うように木の模様がでなくて大変でした。今度は鉛筆や他の物でプロッタージュしてみたいです。とにかく、興味ができました。プロッタージュは小さい頃に100円玉を紙の下に置いてやっていた記憶がありますが、その頃はそれが美術の技法だとは知らずにやっていました。なので、今度は美術の作品として、また絵の中にとり入れたりして、やってみたいです。

北見北斗高校1年 坂本理帆

プロッタージュは小学生のときにやった以来で、久しぶりにやりました。木をやるのは初めてで、岡部先生のお手本を見ると、最初は簡単そうかなと思いました。でも実際にやってみるとなかなか木の模様がでず、苦戦しました。そのあと岡部先生に少し教えていただき、だんだんと模様がでてきて、嬉しかったです。その後は、黙々と自分の好きな色合いでこすり出すのがすごく楽しくなりました。普段あまり木にふれる機会がないので、木の表面もいろいろあるっておもしろかったです。自然と触れ合いながら作品をつくってくれてよかったです。ありがとうございました。

北見北斗高校2年 竹林ひかる

森の中に入ったら神秘的だった。森の木のいやしの力が私を穏やかな気持ちにさせた。そう、今私は森と同化している。森の力を存分に感じているのだ。木に触り、木の温もりを感じた。木のうろを触ると、木の生きてきた恒久の刻が私の中にしみわたった。「この温もりを他の所にもうつしとりたい」という気持ちから私は紙とクレヨンを手にとり、そっとこすりつけた…。木の感触が手に伝わってきた。木の表面が紙の上に表示れる。本物の表面とは違った木肌が生まれた。「これがプロッタージュ。こんな技法があったのか!」私は感動した。これからは森に入り、プロッタージュを生かしたいと思っています。岡部先生、本当にありがとうございました。

北見北斗高校2年 広沢安菜

うまく木の模様がでませんでした。虫の多さに驚きました。重度の虫嫌いである私が、森にいて自然と共存するのは無理でした。楽しかった人や感動した人がいた反面、私のように思った人もいます。(お世辞なしに正直に書きました。)

北見商業高校3年 斉藤かおり

はじめてのプロッタージュは普段感じることができないことばかりでした。やはり直接描くのと違って、さわって感じるのによって、なんか新鮮さを実際に感じる事ができたのはいい経験になりました。プロッタージュは、始めのほうはうまく描けなくて苦戦しましたが、慣れてくるとどんどん楽しくなりました。来ていただき、いい経験になってとても嬉しかったです。いい刺激になりました。

北見商業高校2年 遠園いづみ

私の家は農家なので自然をよく感じるのですが、最近では忙しく、自然と触れ合う機会がありませんでした。今回の研修で、(あいにく雨の中でしたが…)自然を感じる事ができて楽しかったです。蚊は腹が立ちましたが、それはそれで森の中という感じで難しかったです。先生のように木の模様が全然出てこなかったり、とにかく大変でした! ですが、初めてのことを皆とできたのはうれしかったです。今回はこのような体験をさせて頂きありがとうございました。

北見商業高校3年 青木夢音

今回プロッタージュを体験し、久しぶりに木にふれ、自然を感じる事ができました。ただ擦り取るだけと聞いていたのですが、いざやってみると擦り取った樹肌にはその木が生きてきた歴史を感じる事ができました。とても簡単な作業ですが、シンプルだからこそ分かることがあるのだと実感しました。新しい価値観を自分の中に見つけられたこの研修は、私にとって意義のあるものとなりました。また、壁一面に貼られた絵をみたときにはそのすごさに圧倒されました。一人一人の絵が一つになるとこんなにも素晴らしいものを作れることに感動いたしました。この研修をいつまでも忘れずに、これから生きていこうと思います。本当に大切なことを学んだと思っています。

北見商業高校1年 中原礼子

まず、いろんな人の作品を見て「ああ、こういう表現の仕方もあるんだ」とか「いろんな想いが込められているな」と思い、とても参考にしたいし、勉強になりました。また、岡部先生と他の生徒たち、先生方など、みんなで直接、森に行きつめたプロッタージュはとても興味深いものでした。改めて自然の偉大さ、歴史、木のあたたかみなどを体で感じる事ができました。私はクレヨンの色を選ぶ時、プロッタージュをする木に手を触れ、「何色がいい?」と心で聞きました。3枚くらい描きましたが、やはり木によってその返事は違っていて、1枚目は黄色のクレヨン、2枚目は赤色のクレヨン、3枚目は水色のクレヨンで描きました。「生」というものを感じる事ができました。協力して下さった皆さんに感謝したいです。ありがとうございました。

北見商業高校2年 小林なつき

初めてプロッタージュをやったので、全く上手に出来ませんでした。雨の中蚊や他の虫と戦いながら、木に紙を貼りクレヨンで塗っていくと木の表面の柄が出てきて少し嬉しくなりました。こういう機会はないと思うので、大変貴重な経験をさせてもらったと思っています。また時間があるときに自分で木を探して挑戦したいと思います。

北見商業高校2年 西堀成美

今回研修でやったプロッタージュは私にとって初めての体験でした。岡部さんはすごく淡々とやっていたけど意外とやってみたら難しく大変だった。やっぱりすごいなあーと思った。今度また体験してみたいと思いました。今回はいろいろとありがとうございました。

北見商業高校2年 森下あずさ

プロッタージュを通して、私は木の優しさを知りました。雨が降ってしまいましたが、木々たちは、私を雨から守ってくれました。自然はとても大切なものだと知り、そして壊されるものだと思います。プロッタージュは、その壊されるものを記憶しておける唯一の手段だと思います。

北見商業高校2年 横岡海織

プロッタージュというものがかどういものかさえ知りませんでした。今回の研修でプロッタージュの説明を聞いて、最初は、ただこするだけなら簡単そうだと思います。しかし、いざ自分でやってみると意外と難しく、全く木の皮の模様がうつりませんでした。プロッタージュをやるのは、今までにもこれからの、これが最後だと思うので、いい経験ができてよかったです。

北見商業高校3年 高橋ありさ

私はフロッターージュという技法を初めて知りました。天候はあいにくの雨…。ですが森の中の澄んだ空気はとても気持ちよかったです。直に木に触れ、凹凸を感じ、紙を貼ってクレヨンでなぞっていくと、そこには木の凹凸がうつしだされ、とても面白かったです。貴重な体験ができてよかったです。

北見商業高校3年 今野綾香

雨の中の森というのは初めて入ったもので、とても不思議な感じがしました。そんな中でフロッターージュという今までやったことのない技法を用いて絵を描くことにとても興味を持ちました。一見、簡単そうに見えましたが、やってみるととても難しかったです。木肌が凸凹なのでうまくクレヨンが動かず、大変でした。雨の効果もあってクレヨンが溶けてしまい、紙もぐちゃぐちゃになってしまいました。ですが、雨に濡れて流れ落ちていくクレヨンがまた新しい魅力を出していたのではないかと思います。個人的に木に行った一枚は桜の木です。これはとても描きやすく楽しく描けました。他の木は描くのが難しかったのですがどれもあたたかさを感じることが出来ました。木に触れるのは本当に久しぶりでしたが、どこか懐かしく、笑顔になれました。雨だったのは本当に残念でした。

北見商業高校3年 高橋未希

私は、今回の研修を通して改めて美術の持つ「素晴らしさ」や「楽しさ」を再確認することができました。他校の子の絵を見て毎回感動し、ヒントをもらえる、そんな素敵な場所もあるので美術部に入部したことを、私は誇りに思っています。そして今回「フロッターージュ」というものを教わりました。私は初めて聞いたので、どんなものなのか、ワクワクしていました。画用紙を木に固定し、鉛筆やクレヨンなどで樹肌を写し取る作業は、とても楽しかったです。なかなか思うようには写し取れませんが、また新たな美術に触れることができ、良い経験だったと思います。これから先も「美術」というものにたくさん触れて、もっともっと絵などを好きになれたら、と思います。ありがとうございます。

北見商業高校3年 山下夢乃

1日目はたくさん絵に圧倒されました。フロッターージュがうまくできなくて、意外に難しかったです。2日目は、佳作をとって最後に作品と旅立ちの日を迎えられなくて残念です！フロッターージュ楽しかったです！

北見商業高校3年 古瀬雪菜

私ははじめてのフロッターージュでしたが、とても楽しかったです。フロッターージュは思っていたよりもすごく難しく、なかなか模様がでませんでした。先生はサラサラと描いていて、やっぱりプロだなと思いました。一枚だとあまり迫力はないですが、みんなの絵をあわせるものすごいインパクトがあって絵の力ってすごいなあと思いました。また、もし機会があれば、やりたいなあと思いました。絵の中に刻みこめるというのがとても印象に残りました。私の小学校は廃校になりました。この研修をさせていただいて、私も小学校をフロッターージュして、刻みたいと強くおもいました。新しい表現の方法なので勉強になりました。ありがとうございます。

北見商業高校3年 平岡冨彦

初めてフロッターージュという言葉を知りました。説明と映像を見た時、正直簡単だとかかをくくっていました。ですから、始めに上手く出来なくても、次頑張ればいよいよ、と思っていました。ですが、何枚やっても思い通りに描けなくて困りました。その上、はじめから濡っていた所に、雨の勢いが強くなっていき、紙はグシャグシャでクレヨンまで濡れ、散々でした。おまけに、やっている最中に蚊に刺される始末。それでも諦めないでやっていると、やっと満足できる物(まあ1枚だけなんです)ができました。森に触れるということは幼少の時からなので、心から楽しめました。また機会があれば今度は暗れた時にやりたいです。

北見商業高校3年 櫻井樹奈

私は今回初めてフロッターージュをやりました。フロッターージュをやってみて、あまり上手に出来なかったのですが、楽しくやることができました。木に触れることは、あまりないのでとてもいい経験になりました。雨が降ってしまってもあまり描くことができなかったのですが、フロッターージュをする機会はありませんので勉強になりました。また美術のおもしろさを知ることができてよかったです。最後に、フロッターージュを教えてくれてありがとうございます。

北見商業高校2年 増田菜都美

木のボコボコした感じを出すのがなかなか出なくてとても難しかったです。でも、何枚か書いたらだんだん出てくるようになり、出てくるようになったら、楽しくなりました。また、植物や虫の名前を知り、とても勉強になりました。いつかまた、こういう機会があれば他の事をもっと知りたいと思いました。また、プラネタリアムで聞いたガイダンスに参加して、自分の知らなかったことがたくさんあって、とても絵の勉強になりました。本当にありがとうございます。今回の研修に来ていただき、ありがとうございます。今度の大会でもまた教えていただければ嬉しいです。本当にありがとうございます。

北見商業高校2年 石田 蒼

研修をやって、とてもよかったです感じています。雨が降ってしまい残念ですが、初めての経験ができて、うれしいです。お忙し中、来てくださってありがとうございます。

北見商業高校2年 國奥知寛

今回の研修で、私は木に触れ合うことの素晴らしさを学んだ気がします。木のザラザラした感覚を写しとっていくことは、はじめはうまくいかなかったのですが、描いていくうちに、どんどん浮き出てきて、描くのが楽しくなってきました。今まで知らなかった種類もあり、とても勉強になりました。このような機会を与えてくださったことにとても感謝しています。ありがとうございます。

北見商業高校3年 田中杏奈

今回フロッターージュを体験し、私は木の素晴らしさと自然の尊さを思い知らされました。フロッターージュをやりはじめ、最初はうまく擦れなく全然浮き出てこなかったのですが、枚数を重ねるうちにその木の模様が出てきて楽しくなりました。今回の体験を通し色々な事を学ばせていただきすごく感謝しています。

北見商業高校2年 坂地 葵

私は高校に入ってから、あまり自然に触れることはありませんでした。今回のフロッターージュで久しぶりに自然と触れ合え、それがアートになったことにとても感動しました。残念だったことは雨天だったことですが、雨の中でも木々の中に入ると、晴れている時とはまた違う雰囲気新鮮な気分になりました。今回の研修に参加できとても勉強になりました。

北見商業高校2年 陰山結衣

私は昔フロッターージュをやったことがあって、久しぶりに出来て楽しかったです！クレヨンで木のフロッターージュをやってみたのですが、あまり上手く出来なかったのが残念です。今回このような体験をさせてもらい、とても勉強になりました。

北見商業高校2年 小川みちる

私は、この研修をするまでフロッターージュというものを知らなかった。実際に森に入ってフロッターージュをやってみて、こんな絵の描き方もあるんだな、と感動しました。このように新しい絵の描き方を知る機会をいただけて、すごく嬉しかったです。今回の体験を活かし、これからの作品も頑張っていきたいと思います。

北見商業高校教諭 太田剛夫

先生のフロッターージュに対する熱い思いが生徒に伝わったことから、生徒たちは真剣に取り組んでいました。新しい世界観が形成されたことと思います。感謝いたします。

ます。根室に対する思いも大変身近で感動しました。ありがとうございます。

北見緑陵高校1年 植村麗美

雨の中での研修でしたが、普段は木に触れることがないので良い経験になりました。木の模様がそのまま紙に写されていくのが不思議な感じがした。

北見緑陵高校1年 相田侑里

支部大会研修を通じて、フロッターージュを森で行いましたが、虫がいっぱいいたり、雨が降っていたりなど大変だったし、初めてフロッターージュをやったのであまり上手には出来なくて残念でした。けれど、たくさんの人たちの作品をはってみると、いろいろな色があってキレイだったと思います。

北見緑陵高校1年 関まどか

森の木を擦りとりて描いた絵は1つ1つ違って展示されたものはすごくカラフルだった。あまり経験できないことができたのでよかったです。

北見緑陵高校1年 佐藤有紀

フロッターージュというものの自体知らなかったのですが、紹介のDVDや岡部さんの話を聞いているうちに、とても奥深いものなのだと思います。形をとることで、その場になくとも、そのものの感触や形などが伝わってくるものだと思います。

北見緑陵高校3年 土田沙季

初めてフロッターージュをして、すごく新鮮で面白かったです。先生の手の動きを見て、やっぱり違うなあと思いました。様々な色の作品が集まって、美しい空間を完成させることが出来て、嬉しかったです。ありがとうございます！

北見緑陵高校3年 後藤優香

今回の研修で初めてフロッターージュという芸術を知り体験しました。最初はこれのどこが楽しいのかわからず、ただ茫然と色を塗るだけでした。ですが、だんだんとやっていると木を利用して芸術を作るという美しさがわかるようになり、次第に楽しさがこみあげて来ました。とても楽しくできました。ありがとうございます。

北見緑陵高校3年 馬場ほなみ

フロッターージュがなんなのか最初はよくわかりませんでした。でも自分でやってみると、フロッターージュっておもしろい！と思いました。雨と蚊さえいなければもっと楽しめました。13カ所さされました。とてもかゆいです。でも、かゆさ分、楽しかったから良いです。いつか森に行く機会があれば、紙とクレヨンを持って行きたいです。そして色々な物をこすりたいたいです。13カ所の内、10カ所は足です。しかも靴下を履いていた部分を刺されたので、岡部先生も気をつけて下さい。また11年後に北見に来て下さい。そしてフロッターージュを広めて下さい。来て頂き本当にありがとうございます。先生のお話とてもためになりました。ありがとうございます。

北見緑陵高校2年 村岡沙耶佳

たまには森もいいなと思った。そして虫がいっぱいいた。フロッターージュというのは紙をあててこするだけという単純な作業だけど結構難しかったです。

北見緑陵高校3年 能城 薫

私は、木をフロッターージュしなかったのですが、フロッターージュによって紙に型が浮き出る楽しさは体で感じました。フロッターージュしたものは違っても、私はみんなと同じ時間を過ごせた気がします。本当に楽しかったです。この機会を与えてくださってありがとうございます。

北見緑陵高校2年 佐藤緑真

久しぶりに森を感じ、木や地面などの自然のありがたみを感じました。岡部先生、ありがとうございます。

北見緑陵高校3年 那須 悠

木の近くには思いのほか蚊が大量発生していた。自然を感じてぼんやりしている肌を出していた部分の虫さ

されが酷かった。フロッタージュは思っていたよりもきれいに木目を出すのが難しかった。

北見緑陵高校3年 関口実里

森にはいるんなものが住んでいるんだなと思いました。フロッタージュは難しかったけど、上手にできるようになるにつれて楽しくなってきました。また天気の良い日に今度は道路などをフロッタージュしてみたいと思いました。

北見緑陵高校1年 橋本実咲

小さい頃からフロッタージュに近いものはやったことはありましたが本格的なものは初めてやりました。それに久しぶりに木に触った気がしたのでとても良い体験ができたと思います。

北見緑陵高校1年 旗手まどか

初めてフロッタージュをやってみて最初はどんなものだろうと思いました。実際にやってみて楽しかったです。森の中の色々な木をフロッタージュしてみても上手くできなかったけど楽しくできたのでよかったです。また今後機会があればやってみたいです。

北見緑陵高校1年 熊谷 渚

今回、初めてフロッタージュというものを体験しました。やった事もないし、見た事もない、聞いた事もないものだったので、少し緊張していましたが、実際はそんなに難しいものではなく安心しました。天気が悪くて、虫も多くて大変でしたが、今までやった事のない良い体験をする事ができてよかったです。とても楽しかったです。

北見藤女子高校教諭 小堀芳子

このプロジェクトを岡部先生からお聞きして、二年が過ぎました。手探りの中で岡部先生のご指導のもと、今回の高文連網走支部の研修が実りあるものに終り、本当に感謝しております。普段、私達美術教員でも体験できないもので、生徒にとっても貴重な経験になりました。先生のいろいろな想い、考えていかななくてはならないことなど深く思い入りました。減少に行くことのない森の中に入り、久しぶりにその大きな懐に入ることができ、気持ちが落ち着いて心が静かになっていく自分を感じました。フロッタージュの行為を通して木に愛しささえ感じられた気がします。たくさんのご教授をありがとうございます。

北見柏陽高校3年 太田歩夢

一見同じように生えている木も、近くで見ると触れてみると、それぞれ違うことに気がつきました。種類にかかわらず、一本一本の個性の差がクレヨンを通して手に伝わってきました。自然を自然のままに紙に表現できるすてきな技法だと思います。雨が降る中の研修でしたが、葉が雨水を遮ってくれる森の優しさも感じられました。

北見柏陽高校2年 佐藤ひかり

普段家や学校など、室内にいる機会が多く、森の空気がとても新鮮に感じました。虫がたくさんという、大変でしたが、森にいと、匂いや音が感じられて、森と一つになったような気がしました。雨の森も悪くないなと思いました。

北見柏陽高校1年 滝崎紫月

私の町にもたくさんの木がありますが、木に触るという機会はありませんので今回の体験でたくさんのことを学べました。

北見柏陽高校2年 石井みずき

いつも森に囲まれて暮らしているけれど、虫がいるからという理由で近づかないので、久しぶりに木に触れて、幼かった頃の、無邪気に遊んでいた頃を思い出しました。成長するにつれて忘れていた、自然と触れ合う事が大切なことだと改めて思いました。自然の温もりに触れられる良い機会になりました。地元の山を見つめ返すようにしようと思えました。

北見柏陽高校2年 渡邊真佑

はじめてのフロッタージュで、最初はなんでこんなこ

とするんだろうと疑問だったけど、やっているうちに楽しくなって、無心でやっていると、心がすっきりして、気持ちよかったです。なんとなくですが、やっている意味がわかる気がしました。色をただ塗るだけじゃなくいろいろなやり方があるって、個性がでて、いいなーと思いました。ありがとうございます。楽しかったです。

北見柏陽高校2年 小野寺里奈

最近は外で遊ぶことも少なくなったので、懐かしい感じがしました。

北見柏陽高校2年 橋爪志奈

久しぶりに森にふれて、懐かしい気持ちになった。昔はよく森に、というか木に触れていたけど、最近は全く触れる機会がなかったが、良い気分転換になった。

北見柏陽高校3年 阿部 遥

普段木に触れることがそんなになし、クレヨンを使うのも久しぶりの気がして懐かしく、楽しかったです。木によって全然違う模様になるのが面白かったです。自然の中で絵を描くことはあまりないので新鮮に感じました。

北見柏陽高校2年 松原奈美季

今回、初めて高文連に参加したのですが、どれもすごい作品ばかりで驚きました。見ていて創作意欲がわきあがってくるばかりでした。とても良い時間を過ごせたと思います。

北見柏陽高校3年 加藤美咲

初めてやることで、うまくできるか心配でしたが、自分なりにうまくできたのでよかったです。

北見柏陽高校1年 山本 紫

私はこの研修に参加して、木に触れて、森を身近に感じました。もっと色々なものに触れてみたいと思いました。簡単にできて、色々なものを感じられるのが良かったです。

北見柏陽高校1年 川瀬安咲

今回、フロッタージュを経験し、木のぬくもりを感じることができました。私の住む津別町は「木のまち」ですが、身近にありすぎて、あってあたりまえだと思っていました。この経験でもっと津別の木にも触れてみようと思いました。今回はありがとうございます。

北見柏陽高校3年 吉田有斗

普段見るだけの木々を初めとした自然に触れる機会が木々の感触を味わうことができ、良かった。また、フロッタージュということで、最初の方の作品はただクレヨンで塗っただけのような感じになってしまったが、徐々に明暗が出てくるようになり、美術の魅力を再発見出来た。

北見柏陽高校2年 三嶋奈々

虫がたくさんいたり、雨が降ったりと、嫌なこともあったけど、フロッタージュをしている時は楽しむことができました。うまくできなくて夢中で手を動かしていました。とても簡単に、すぐにできるフロッタージュは、身近に感じられました。

北見柏陽高校3年 佐々木瑠美

あまり自然の中でこのようなことをする機会が無かったので、出来てよかったです。その時にあるものを形にのこせるというのとはとても良いことだと思います。

北見柏陽高校教諭 太田玲子

私たちは昨日雨の森にいきました。一歩足を踏み入れると優しい匂いのする空気に包まれ、とても久しぶりに木に触れたことに気づきました。樹はあたたかく、ぬくもりがありました。美しい森の緑を背景にして皆さんそれぞれがまるで樹と対話をしているように見えました。岡部先生の語られるお話聞いて、美術を志すということは、常に「問い続けること」なのだと思いました。かたちや色彩、構成、描写はもちろん、制作している時間は作るものが孤独で自分と向き合う。「自分とは何か。」そして「生命について、自然、環境、人々の歴史について、哲学や思想について、自分を取り囲むさまざまな出来事につ

いて感じて、考えて、問う」ことが表現につながっていくのだと改めて気付かされました。心から感謝致します。ありがとうございます。

網走桂陽高校2年 不破有紗

今回の研修は、とても興味深く、勉強になりました。最近では、体験することも少なくなってきた森との触れ合いを今回の場で体験でき、今まで忘れていた自然の良さ、あたたかさを思い出しました。それに、こんなにも木や自然と向き合ったのは初めてかもしれません。木の種類にも様々なものがあり、その木一つ一つにも特徴があったのを今まで気がつきませんでした。ただ、今回はあいにくの雨もあり、本来の森を見ることができなかったのは残念でした。ですが、雨の中の森というものとても興味深かったです。森は雨を防いでくれましたし、雨が葉にあたる音など様々な発見がありました。今回は本当に貴重な体験でした。ありがとうございます。

網走桂陽高校2年 高橋真希

フロッタージュという芸術があることを岡部さんのおかげで知ることが出来ました。色々な国や土地を訪れている人と聞きました。これからもフロッタージュをぜひ色々な国の人に広めていって、フロッタージュの素晴らしさ、おもしろさを伝えていって下さい。色々な場所を訪れるので病気など、体調の方崩さぬようどうかお気をつけ下さい。楽しい時間をありがとうございます！また会える機会があることを心より祈っております。それでは、さようなら。

網走桂陽高校3年 瀧口紗己

美術には様々な技法があるのだとあらためて再確認しました。木の今まで生きてきた「生」を写し出すことで別々の生物ながら、お互いにかを感じあひわりあえた気がしました。

網走桂陽高校2年 葛西美穂

一人一人が個性豊かな色で好きなように木をフロッタージュすることで、色とりどりの素敵な森を作り出せたんだと思いました。森に生きる虫に出会いながら、木に触れ、生きていることを実感して、一本一本違う木をフロッタージュで写し取るのができたと思う。

網走桂陽高校2年 福井玲奈

道とか物とかにできなかったのは、生きた木々などに触れて色々感じてほしいのかなー、とか、自然について考えさせられました。フロッタージュは簡単そうに見えたけど実際やってみたら、うまくできなくて1枚もうまく書けませんでした。見ただけで何でもできそうって考え少し改めてよと思いました。

網走桂陽高校2年 塩崎春香

最初、フロッタージュを木でやると聞いた時、「木でフロッタージュ？ そんなことできるの?」と思ったけど、体験してみると案外できるものなんだなと思った。外の天気は雨が降っていて、決して良いとは言えない天気だったけど、森の多くの木が雨を少しだけ防いでくれたことに感動した。森の中も色々な種類の木が生えており太い木、細い木が様々だった。虫も結構いて嫌だなと思ったが、それは森特有の自然なのもかもしれない。フロッタージュは目標10枚だが6枚しかできなかったことが少し残念だ。蚊もたくさん飛んでいたがそれも自然の1つなのだ。こういった体験を来年の高文連にもあったらと思いました。

網走桂陽高校1年 月岡ちづか

とてもすてきな研修でした。ふだんふれることの出来ない木々の幹にふれることが出来とても新鮮でした。またフロッタージュという技法で木々の幹をすり取るということもめったに出来ないことです。たいへん貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございます。

網走桂陽高校2年 高橋杏奈

この小さなスペースにたくさんの木があつて驚きました。どの木もそれぞれ違ってその木のよさ、悪い所を感じる事ができました。雨が降ってきて、木が潤って、そこに私がいて、何だか浮かんている気分でした。

網走桂陽高校1年 米村沙弥花

今回は森に入り木の皮をフロッタージュしました。木に触れ、自然を楽しみながらフロッタージュをする、ということは、私にとってかなり新鮮な体験でした。とても不思議な感じがして、またやってみたいと思いました。フロッタージュは近くにあるもので材料ができてしまうので、いつでも挑戦したいと思います。

網走桂陽高校1年 小池 和

私は自然が好きで、よく森に行きますが、直接木に触れることはあまりないので、今回、木に触れ、紙を通して木をうつしとるということに興味があり、楽しかったです。写しとられた木はさまざまな色と形で見ていてとてもおもしろい展示になっていたと思います。私も見ていてとてもおもしろかったです。

網走桂陽高校3年 立崎莉乃

雨が降っていて天候に恵まれない中の研修はつらかったのですが、木の模様がうきでた時の感動はすごかったです。ひさしぶりに木にさわり雨でつめたいはずなのにどこかあたたかく、心がほっこりしました。貴重な体験が出来ました。

網走桂陽高校1年 中村桃子

初めてこれをして、戸惑ったけれど、楽しかったです。今までにこういうようなことをやったことがなかったので、これから何かに生かしたらいいと思いました。

網走桂陽高校1年 石井真里奈

フロッタージュをとおして木の質かななどを身近に感じられたので次木などを描くときはフロッタージュで学んだことを生かしたいです。

網走桂陽高校1年 小原瑞樹

とてもためになりました。森の活動はちょっとつらかった…。

網走桂陽高校1年 玉井理仁

森にはたかくさんのartがあったと思います。しかも、造形物にもartがあることがわかりました。

網走桂陽高校1年 中島稔祈

フロッタージュの描き方を教えてもらってとてもためになった。

網走桂陽高校2年 西内麻衣

木をフロッタージュしたのは初めてでとてもいい体験をしたと思います。上手にはできませんでしたが楽しかったです。岡部先生の話は興味深くとても参考になりました。

網走桂陽高校3年 新岡奈々

フロッタージュというものが、どんなものか経験した事はありませんでしたが、今回の支部大会研修で、森にあるいろいろな木の模様をすりとりという作業はとてもいい勉強になりました。今度、フロッタージュをもう一度やってみたいと思いました。

網走桂陽高校2年 田中優希

今回はじめてフロッタージュを経験してみたことは、何かを擦りとりて形に残していくということはとても素敵なことだと思います。岡部先生の作品は本当にすごいものだと思います。ありがとうございます。

網走桂陽高校教諭 高島美緒

物の表情がそのまま擦りとれるのが不思議で、幼い頃夢中になって楽しんだフロッタージュを今回は生徒たちと一緒にやるということで私自身が研修をととても楽しみにしていました。生憎な空模様でしたが、いつもとは違った環境で生徒が生き生きと作業を進めている姿を見ることができ、嬉しかったです。私自身も久しぶりに自然に囲まれて木のぬくもりを感じ、新鮮な気持ちになりました。岡部先生、大変お忙しい中、私達に貴重なご講義をいただき、ありがとうございます。先生のご活躍を楽しみにしております。

美幌高校2年 大西末帆

最初、フロッタージュと聞いて、「ずっと木にへばりつ

いているなんてとても疲れるアートなんだなあ」と思っていました。いざ研修会に入りフロッタージュしてみると、擦るたびに浮き出てくる樹肌を楽しさを感じ、時間を忘れ、疲れを忘れ、ただただ夢中になっていました。研修の後、他の人の作品を見ると、石を擦り出したり、ハート形だったり、地面を擦りだしたりしていて、なんでもアリなんだ！と思い、フロッタージュはとてもすてきなアートなのだと感じました。フロッタージュというとてもすてきな技法を私たちに教えて下さり、ありがとうございます。そして私たちのために時間をさき、網走支部大会にお越し下さり、ありがとうございます。美幌高校3年 立石夢葉

自然に触れ、木々のざわめきや空気のおいしさ、生き物たちの生命力を感じました。その中に自分がいることは不思議で、奇妙な感覚がしました。直接木に紙を当ててフロッタージュしていると自然と一体になった気がしてとても気持ちが良かったです。

美幌高校3年 川内美有

普段はあまり入ったりしない森に入るることによって新しい発見があり、来年は絵を大会に出す、ということはありませんが、また違ったものに、今回学んだことを活かしたいと思います。今回学んだ技法は簡単に自然を感じられるので、休日などに自然に触れる1つの方法としてとてもいいと思います。

美幌高校3年 岩村 睦

フロッタージュというのは初めてでしたが楽しかったです。初めはただなぞってうつつだけの作業で楽しいのかよく分らなかったけれど、実際やってみるとなぜだか楽しくて、意外にも夢中になりました。簡単そうだけど岡部先生のように上手く描けなくて、でもやっているうちにコツのようなものは掴んでいってとても楽しかったです。貴重な体験を岡部先生ありがとうございます。この後の活動頑張ってください。

美幌高校3年 佐々木華緒里

最初にプラネタリウムで見たスライドショーで衝撃を受けました。濃い色の部分と薄い色の部分でこぼこぼこが出ていて、写真のようでした。実際、森の中でフロッタージュを体験してみて、正直なところを言いますと、木に変な虫がたくさんいて描けないなど、本当に楽しいのかなと思っていましたが、だんだんやっていくにつれ、木の幹の違いなど、いろいろなことに気がついて楽しむことができました。自然の美しさを感じ取ることができる貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございます！

美幌高校2年 伊藤彰則

雨が降っていました。木の下には蚊が集まっていた。その周りに私たちはいました。蚊は、木を頼っていました。私は樹皮を探していました。木に触れて私は蚊が嫌いになりました。私は蚊にさされませんでした。蚊も私のことが嫌いなのでしょう。フロッタージュがうまくできませんでした。木も私のことがきらいなのでしょう。自然と共に生きるのはつらいと思いました。生きるのはつらいと思いました。

美幌高校2年 川畑将也

初めてフロッタージュを体験したので、全然うまく描くことができませんでした。虫がたくさんいて、雨が降ってきてあまり集中できませんでした。これも自然をかじることなのかなと思いました。

美幌高校3年 豊島璃菜

森に入り、自然を肌で感じて、景色や空気・音などでもいつもとは違う、なにか不思議な気持ちにさせられました。

美幌高校3年 柴原央佳

正直最初はなんで森の中で作業しなくちゃいけないのだろうと思ったけど、やってみると意外と楽しかったです。あんまり上手くできなかったのがちょっと残念だっ

たけど木の温もりみたいなものを感じることができてよかったです。

美幌高校3年 山野下枝里

思っていたよりもとても楽しく描くことが出来ました。久々に森の中に入り、自然の偉大さを感じました。このような自然はいつまでも残ってほしいです。

美幌高校3年 神内美柚

今回、初めてフロッタージュを経験し、最初やる前は「なんだろう？」とあまりよく分かってなかったけど、やってみたらこの作業の良さがとてもわかり、自然ってやっぱり良いなあと思いました。森の中での作業は良いですね。生命っていいなあと思いました。機会があったらまた経験してみたいです。

美幌高校3年 松田えりか

初めてフロッタージュを経験して、まるでその場にあるような感じが素晴らしい画法だと思いました。

美幌高校3年 菅原良太

種ごとに違う木の温もり、とても大きく力強いものに守られているという安心感を木の下に立っていて感じました。

美幌高校3年 豊島璃紗

フロッタージュをするために木を選び、何枚か描いた後で思ったのですが、同じ名前のもでもフロッタージュの絵を見ると全然違った雰囲気になってしまい、木々の一本一本が違う命のだなと自然のすばらしさを再確認しました。貴重な体験ができてとても楽しかったです。ありがとうございます。

美幌高校1年 森 弘成

初めてで、色々まどい緊張したりもしました。初めはフロッタージュがよく分からず苦戦しましたが、他の人たちを見ている内に最初上手いかなかったのも、終わりの方にはなかなか上手く出来たと思います。高文連では、普段なかなか話しかける事が出来ない他校の生徒や今回のフロッタージュみたいに、森林の中で木々などに触れ合う事が出来るなど、貴重な体験ができました。

「森は生命にみちている」—遠軽高校教諭 川添龍一

私たちは、この森の事を、どれだけ知っていたのだろうか。さらさらと雨の降る中、森は樹の腕を天に広げ傘にし、私たちをやさしく包み込んでくれた。懐かしい匂い…。私たちは目の前に見える樹肌に、何も描かれていない紙をあてがい、隠す。クレヨンを持った手を、樹々と会話するように動かす。そして手を動かしただけ、白かった紙が太古から続く野付牛の森の皮膚へと、徐々に姿を変えていった。湿気、そして取り囲む雨音、鳥や虫たちの息遣いを感じながら…。(森は生命に満ちている…)野付牛の皮膚となった紙を剥がすと、そこには今まで見えなかった森の記憶が、肉として露わになる。そう、フロッタージュを通して私たちは野付牛を受肉した。そして私たちは、共に擦りつった野付牛の皮膚を壁面いっぱい広げ、出現した空間に包まれることによって、この森を共有した。私たちは、この森の事を、どれだけ知っていたのだろうか。このワークショップは、すぐ近くにありながら、気が付きもしなかったこの土地の記憶をあらわにするプロジェクトだったと思う。しかも、擦り取るという、極めて原始的な行為で、共同作業で。先生の問いでもあるのですが、紙の上に浮かびあがる過去の記憶に、生徒は未来を見つめていたのではないかと、そう思います。岡部先生には本当に忙しい中にもかかわらず、事前の打ち合わせを含め実に細部にまでご指導いただき、今回の実りある研修へと導いていただきました。岡部先生へ心より感謝申し上げます。ありがとうございました。そして、あの日野付牛公園で共に擦り取った若者の、未来の活躍を、夢見てなりません。

北見の森 こすり取る

フロッタージュ 生徒166人が挑戦

高文連支 美術研究大会

高文連網走支部の美術

術展研究大会が25日、

北見市の北網圏北見文
化センターで開かれ
た。札幌大谷大短大部
教授で美術家の岡部昌
生さん＝北広島市在住



部を生徒が樹木に紙を
当て、クレヨンなどで
こすり取る「フロッタ
ージュ」に挑戦した。
管内の高校12校、生

徒166人が参加。講
師の岡部さんは、被爆
地・広島などをテーマ
としたフロッタージュ
作品を制作する美術家
で、2007年、イタ
リアでの国際展「ベネ
チア・ビエンナーレ」
に日本代表として招待
されるなどの実績を持
つ。北見では1999
年に、野付牛公園で市
民らとフロッタージュ
作品を共同制作してい
る。

今回の研究大会も野
付牛公園で岡部さんと
生徒がフロッタージュ
作品を制作。雨の降る
中、ハルニレやシラカ
高校生らと一緒に野付牛
公園の樹木をフロッター
ジュした岡部昌生さん
(中央)

バナなどの表面を思い思
いの色のクレヨンでこ
すり取っていた。出来
上がった作品は、生徒
が事前に描いた油彩画
やアクリル画とともに
同センター美術館に展
示された。

初めてフロッタージ
ュに取り組んだという
北見商業高美術部部長
の齊藤かおりさん(3
年)は「最初は難しか
ったけど、慣れてくる
と面白く描くことがで
きた。美術にはいろん
な表現方法があること
を学べた」と喜んでい
た。1千枚近くに上る
作品が壁に張られた会
場で岡部さんは「色彩
豊かな作品が並び、こ
の空間に森が移ったよ
うだ。一人一人の手の
力に称賛を送りたい」
と講評した。
作品は26日正午まで
展示されている。入場
無料。



(久才秀樹)

「雨の森ニイマス」―北網圏北見文化センター 学芸員 柳谷卓彦

野付牛の森

野付牛の語源は「ヌブンケシ」野の端の意味を持つアイヌ語地名の響きを今に残す森である。詩人の谷川俊太郎が、オホーツクの地に足を運ぶとき、このアイヌ語の音としての響きが「異国情緒を思わせ、心地よい響き」と話されていたことを思い出す。

この土地に暮らす私たちには何でもない響きが、旅人の心には深く響く音になるのである。

昭和17年、市政が施行され「野付牛町」は「北見市」という名に変わったが、この響きを今に残し造成されたのが「野付牛公園」いわゆる野付牛の森である。

この森と触れ合うことは、自然とともに暮らしてきたアイヌの人々の心に触れることでもあるが、この大地には、10,000年前に暮らした旧石器時代の人々や縄文、擦文、アイヌ、現代へと続く歴史も刻まれている。

アイヌの人々から「オンネム」と呼ばれた常呂川が作り出した広大な北見盆地の湿地帯を、彼らがここから眺めていただろうことは想像できる。

約100年前、自然が織り成す世界に、新たな息吹が刻まれた。公園の造成である。本州からやってきた人々は、自分たちのふるさとの風景を持ち込もうとしたのである。自分の生まれ育ったふるさとに繋がるものを少しでも感じていたい。異国の地にやってきた先人たちにとっては、人として極当たり前ことをやろうとした。開拓者の気持ちのなかには、やっかいな北の大自然を征服し、全てを作り変えたいとの思いがあったはずだ。

しかし、ハルニレやミズナラ、ドロノキ、イタヤカエデなどの太く立派な木は残した。北見盆地に広がるヤチボウズが広がる広大な湿地帯、大自然との闘いの中から、自然への畏敬の念を強く感性の中に育んでいたのではないだろうか。

野付牛の森の木々たちに宿る時間的な縦軸と横に広がる先人たちの生き様、北の大地に宿る生命観、精神文化を透写するワークショップ「森ニイマス」は、平成11年に開催したワークショップ「森のなかで、野付牛にふれる」に続く2回目の挑戦であった。

高校生たちは、この作業を通して何を感じ、育んだのだろうか。若い感性は何を見つめたのだろうか。出来上がった作品は、カラフルな色に表現され、飛ぶような勢いを感じさせていた。

まるで野付牛の森の木々が、走り出し、空を飛ぶように表現されたのである。生命の躍動感がそのまま伝わる展示会場。アートに携わる喜びに満ち溢れていた。それは古代の人々が洞窟の中で壁画に自然界に満ち合われる動植物を描いた感性に通じるものがあるかもしれない。

雨のなかでいつまでも作業続ける高校生の姿には、アートの魂に火がついている様子が伺えた。

「Art in You」芸術はあなたの心のなかにある。まさしく芸術に対する感性のスイッチが入った瞬間に思えた。一本の木から伝わる生命観、歴史、その木のまわりで起こった悲しみや喜びまで掬い取ろうと頑張る姿が印象的だった。

森と美術が繋がった瞬間。

このプロジェクトを指導した岡部昌生教授の美術家としての後姿を目の当たりにした高校生たちは、野付牛の風土と歴史が生み出す精神文化、雄大な大自然に宿る神々を一本の木から感じることに集中していた。作品を生み出していく過程、美術に集う人々の心を重ね合わせることも作品の一部であり、アートの世界なのである。「森のなかで、野付牛にふれる」で感じた世界観、多くの美術家がシャーマンにも似た世界観を持っているように、これがこのプロジェクトの目指す、美術教育のひとつの教えの世界なのかもしれない。

木はなにも語らない。ただ凜と立ち、人や動物たちの生き様を見つめながら自然がなすがまま、時の移ろいとともにある。



野付牛公園の樹木(アイヌ語名)

アイヌ語名/ピンニ pinni 日本語名/ヤチダモ

アイヌ文化

ヤチダモはまっすぐに成長するので、チセ(住居)の屋根の構造材や壁の横木に使われました。

また、エベレセツ(小グマの飼育檻)やブ(食料庫)の構造材、物干し竿としても使われました。

また、この木は弾力性があるため、丸木舟の棹として利用しました。このほか、この木で丸木舟を作ることもありました。

湿地に生育するため、コタンーコルーカムイ(シマフクロウ)が羽を休める神聖な木としても大切にされていたようです。

その他

・アオダモの代用として野球のバットの材料としても使われています。

・北海道の雪の季節を知らせる雪虫の総称で知られるアブラムシの一種のトドノネオオワタムシの寄主植物としても知られ、晩秋、将来世代に生命をつなぐためにトドマツからヤチダモに移動するために飛んでいる姿が雪虫の正体です。

アイヌ語名/トペニ topeni(意味乳汁の木) 日本語名/イタヤカエデ

アイヌ文化

早春に樹皮を斜めに傷つけ、そこに容器をおいて樹液が流れ込むようにしておくと、一晩ぐらいで1~2㍑ぐらいの樹液を採取できたそうです。採集した樹液は、冷やして飲んだり、煮詰めて甘味料として使いました。

その他

・カミキリムシの幼虫があけた穴から、樹液が出て早春のころの野鳥や休眠から目覚めたキリガ(ヤガ科)など多くの生き物たちの食事になる。葉はミスジチョウ(タテハチョウ科)の食べ物となります。少し堅い木なのでくわやまさかりの柄などの農具としても使用されました。

アイヌ語名/カリムパニ karimpani 日本語名/エヤマサクラ

アイヌ文化

タシロ(山刀)やマキリ(小刀)の鞘を補強する材として、樹皮をはぎ取ってこれらに巻きつけました。また、このサクラの皮はトクサを使って磨くとツヤがでるといわれ、磨いてから使ったそうです。

その他

・エソシロチョウやカラスシジミ、フタオタマムシやノコギリカミキリなどの昆虫類の食樹となることもあります。また、赤い色も強く、花と葉がほぼ同時にでる特徴があり、本州のサクラとのちがいがはっきりとあります。

アイヌ語名/チキサニ cikisani 日本語名/ハルニレ(別名アカダモ、エルム)

アイヌ文化

伝説の中にハルニレはドロニキに次いでこの世に2番目に生えた木であるというのがあります。また、ハルニレと雷の神からアイヌラックル(始祖神)が生まれた話が伝わっています。

その他

・属名のエルムの木と呼ばれ道内では親しまれています。アカダモとも呼ばれ、タモギダケと呼ばれる黄色いキノコが育ち、キノコ愛好家に親しまれています。

・ヒメミカツキキリガ(ヤガ科)やエルタテハ(タテハチョウ科)などの蝶の食樹としても知られます。また、クヌギの木が育たない北海道ではクワガタムシ(クワガタムシ科)やヤマキマダラヒカゲ(タテハチョウ科)などの昆虫たちの食料となる樹液の出る木として重要な役割も

果たしています。さらに北海道開拓で入植した先人たちは、この木が育つ場所が農地に適した肥沃な土地である証拠(指標植物)として利用していました。

アイヌ語名/コムニ komuni トウン ニ tun-ni 日本語名/カシワ

アイヌ文化

丈夫な木なので家の柱や梁、炉ぶちなどに利用し、また枯れ木は薪に使うなどさまざまに利用されました。

その他

・子供の日に食べるカシワモチを巻いている葉として親しまれています。日華区系の代表的な植物で、代表的な蝶のミドリシジミ(ゼフィルス)の仲間の食樹として重要な役割を果たしています。縄文の時代ではカシワの実のドングリは食料でした。また、ヒグマやネズミ類など多くの哺乳動物やヤマカケス(カラス科)などの鳥類の重要な食料として、生物多様性を支えています。

アイヌ語名/タツニ tatni kamuy-tat(カムイ タツト)など 日本語名/シラカンバ

アイヌ文化

カンパ類は、主に樹皮の部分を利用しました。山で狩小屋を建てる際、この樹皮で屋根をふいたり、カッコムという水を汲むひしゃくを作ったりしました。また、木の棒の先端を割り、そこにカバの樹皮を巻いたものを挟んで松明にしました。このほか、かつて女性が入れ墨をした際に、染色として、カバの樹皮を焼いたときにでるヌスが用いられました。

その他

・シラカバはバイオニア樹種と知られ、裸地化した荒れた土地にいち早く育ち、森を形成する最初の林を作ります。白い樹皮は、北海道的な、高原の景観を作り出し、そのモチーフはお菓子などの商品や芸術作品などに描かれ、オケクラフトなどの工芸作品にも利用されています。・シラカバなどに発生する、チャーガ(カバノアナタケ)というキノコが健康食品として脚光を浴び、温泉などの入浴剤としての活用もされました。・雪解けとともに地中の水分を吸い上げるため、樹皮に穴をあけ樹液を採取して飲み物などに使われています。・カバシヤク(シヤクガ科)やエルタテハ(タテハチョウ科)、オトシブミの仲間の食樹としても重要な役割を果たしています。

アイヌ語名/スス susu 日本語名/ヤナギ

アイヌ文化

ヤナギは各地でカムイ(神)に捧げるイナウ(木髷)を作る材料になりました。十勝ではヌサ(祭壇)に立てるイナウをはじめ、アベフチイナウ(火の神へのイナウ)などいくつかの種類イナウがありますが、これらはみなヤナギで作られています。

日本ではやなぎの花を「ねこ」と呼びますが、コタンの子どもたちはニ・ボシタ「木の子犬」といって遊びました。古く猫のいなかったコタンの子どもは銀色の猫柳の子犬にみたくて。それをニ・ボシタ(木の子犬)と呼んで、追いかけてこします。ニ・ボシタをたくさんとったもの後、ボシタ・エンコレ(子犬おくれ)と追いかけます。または子犬ではなく、うさぎに見立て、これをたくさんとったものが偉いとするものもあります。

その他

・北海道の河川における最重要な樹種。生態系の中では、根の部分は魚類の住みかとなり、樹上で生産される昆虫類は食料となります。葉は夏の日差しを遮り、水温の上昇を防ぎ穏やかな温度変化をもたらします。多くの魚類ばかりではなく、ガンカモ類など水鳥たちの隠れ場所を

提供し、よく張った根は土壌を押さえ、土壌の流失や水質の汚濁も防ぎます。ヤナギの葉が、枯葉となって海を下り、シシヤモになったお話はだれでも知っています。河川の生態系の中では、これらの葉は、多くのカゲロウやトビケラなどの水生生物を育みます。育まれた水生生物は、多くの魚類を育むとともに、植物や動物などの有機物となって海までも豊かにしているのです。

アイヌ語名/ラルマニ rarumani 日本語名/イチイ

アイヌ文化

食用として、子どもたちのおやつになりました。弾力のある木なので、かつてはこの枝で弓を作りました。このため、この木をクネニ(弓になる木)という名称で呼ぶ地方もあります。

イクバスイ(酒樽筒しぼほうば)を作るための材料になりました。

・イチイは一位のことで、聖徳太子の自画像に描かれている笏(シヤク)はこの木で作られたことから、位が高い木ということ一位と名づけられたといわれています。

・イチイは、アララギともよばれ旧北見市の木に指定されています。伊藤左千夫が中心となり編集した歌集「アララギ」にも使用され、後の中心人物の新藤茂吉の兄の守谷富太郎が北見市に居を構えたことから何かの縁なのかもしれません。

・イチイは、雄と雌に分かれていて、雌の木は赤い実をつけ、様々な動物たちの食料となっています。

・道内には1千年以上の寿命を持ったイチイがあります。芦別市の「黄金水松(こがねみすまつ)」は、1,700年の年輪を重ね、北海道の天然記念物に指定されています。

アイヌ語名/クワの木 turep-ni(トゥレパニ) 日本語名/クワ

「テシマの木」は、知里辞典(1953)によるとクワの木を、美幌、屈斜路、近文、真岡では tesmanai ということある。テシマはかんじきのことで、かんじきにする木を指している。弓もこの木で作っていたようである。

森 nitay(ニタイ) 林 tay(タイ) 木原、林 kenas(ケナシ) 木 ni(ニ)

立木 aschiku-ni(アシチクニ) 折れ木 ekay-ni(エカイニ) 茂る ironne(イロンネ)

幹 shup、nitumam(ニトゥマム) 枝 nitek(ニテク) の木の枝 nitekehe(ニテケヘ)

梢 hap(ハブ) 根 shinrit ni-shinrit(シンリッ ニシンリッ) 切り株 nisuppa(ニスッパ) の根

shinrichi hi(シンリチ ヒ) 根もと osut(オスツ) 野原 nup(ヌブ) 広い para(パラ)sep(セブ)平らな

upakshinne(ウパクシンネ) タラの木 aus-ni(アウシニ) ミズキ utuka-ni(ウトウカニ) ナナカマド kikin-ni(キキンニ)、makun-ni(マクンニ) エゾマツ・マツ類 sunku(スंक) トド

マツ totonup(トトヌブ)・hup(フッ) エンジュ chikupe-ni(チクペニ) クワの木 turep-ni(トゥレパニ)

ニワトコ sokon-ni(ソコンニ) ハイマツ totorop(トトロフ) ホオノキ pus-ni(プシニ)

主な参考・引用文献：アイヌ語で自然かんさつ図鑑 平成15年3月29日 帯広百年記念館発行

アイヌ語イラスト辞典 1987年1月20日 知里高央・横山孝雄

「森ニイマス」写真によるドキュメント
写真撮影：川添龍一

















II. もうひとつの「森ニイマス」

北海道の美術教育が、専任教師や科目時間の減少という地方が皺寄せられる教育行政による困難に直面する状況のなかで、美術家として交流と実践的な美術の体験を通し、地域の歴史と文化を見つめるという趣旨のなかに、美術教育の今日の問題点も浮上指摘された。このような教育をとりまく背景と教師像、全てではないにしても表現者としての教師のアテチュード、取りまく北海道美術のフィールドの状況など複雑にかみあい横たわる。長く美術教育に携わってきたことから、自身もまたそれを反芻しながら問いつづけることだ。「森ニイマス」以後、ふたつの教育の現場に関わり、自然を対象とするワークショップに招請され、つなげて考える機会をえた。ひとつは美術教育者を養成する大阪教育大学の教育研究の挑戦、そして教育の実践現場の先生たちの研究組織、北海道造形教育研究大会。いずれも森の中での美術の体験を主題とする。

「金剛・生駒・紀泉の森」大阪教育大学美術教育研究・創造力アッププロジェクト(2011)

大阪教育大学教育学部教員養成課程美術教育課程渡邊美香講師と院生ふくむ学生が主体となって企画した「生でふれようアーティスト in 大教大」は、「美術教育講座教育研究創造力アップ・プロジェクト アーティストをお招きしよう！プロジェクト」。アーティストと実際に接する機会をもつことで、今後、教員をめざす学生に対し、美術教育に対する視野を広げることをねらいとすることから、実践的な講座が特別講義として開設された。

フロッターージュという美術の手法で地域の場の痕跡や記憶を多くとりだす作業を経験して、教育現場での実践を積み上げてきた実施例とベネチア・ビエンナーレのプロボザールとしての「MASAO OKABE ARCHIVE 1979-2006」を交えた講演をガイダンスとして、美術家としてのスタンス、学生とのトークのなかから主題を探りだし、実践的な教育現場を創出した。前日の京都精華大学情報館メディアセンターでの“宮岡秀行による岡部昌生を追ったテレビ番組「徴(しるし)はいたる所に」”の特別上映会を提示、これもガイダンスのひとつとして学生は参加した。

ガイダンス、講演で紹介した近年の教育プログラムの例

①日野市立仲田小学校(日野 2009)

隣接する「旧蚕糸試験場」の廃墟で懐中電灯をつかって擦りとり場を探す。地域と近代日本産業史を学ぶ。制作されたフロッターージュと作家の「絹の道ヨコハマ」(1993)とともに蚕糸試験場で展示。

②高文連釧路根室支部美術展研究大会(釧路 2009)

「雄別炭砦を掘る」200名の生徒による2,500点が作家の個展(釧路市立美術館)に展示。

③茅野市立永明小学校(茅野 2010)

敷地内から掘出し採取した縄文中期の土によるドローイング「土の記憶—縄文にふれる」は茅野市美術館の岡部昌生「諏訪をめぐる、縄文に触れる」に展示。

④高文連網走支部美術展研究大会(北見 2011)

美術館に近接する野付牛公園の原生の森で擦りとった樹膚の1,000点を美術館に展示。

美術教師をめざす教員養成課程美術教育専攻生をはじめ、他教科と大学院生など幅広い参加で、院生がプログラムをまとめ推進した。大阪府柏原市に位置する大学は金剛・生駒・紀泉国定公園内に67万m²のキャンパスが配置され、その後背地の森のなかで樹膚を擦りとり、自然や歴史とつながる視野を広げる美術の作業を体験。作品は校舎の大開口部のガラス面に展示された。金剛生駒紀泉の山系をかかえた自然がまたとない教材となり、ここからたくさん学べる教室になる発見があった。「フロッターージュして触ることからの発見、そのシンプルさの深遠、美術する人が歴史や哲学や自然、考古学や文化人類学など多くの領域に興味もつのは、人間のことに惹かれるからであり、教育もまた、そうなのだと思う。幅広く人間のすること、人間がしてきた美術をとらえてほしい」と伝えた。

この特別講義が学生にどのようにとらえられたのか、後日集計されたアンケートによっていくつかの発見として応えてくれた。

11月16日講演会 アンケート集計

Q1 あなたの専攻と回生を教えてください

専攻		回生	
小学校美術	8	4	7
中学校美術	1	3	3
芸術美術	2	2	1
その他	1	無回答	1

Q2 レクチャー & ワークショップを楽しむことができましたか？

非常に楽しかった	8
楽しかった	4
あまり楽しめなかった	0

Q3 どういう点が特に楽しかったか具体的に記述してください

- ・ワークショップでの作業がとても楽しかった。
- ・途中用事で抜けなければならなかったのが残念です。もっと時間が欲しかったです！
- ・みんなで作品を作って展示をしたところが楽しかった。
- ・実際に表面をうつしとる作業が思っていた以上に楽しかった。
- ・今までにしたことのない体験だったので、新しい発見がたくさんあって良かった。
- ・山の中に分け入って、フロタージュしたところ。
- ・実際にうつしとったこと。
- ・先生の過去の作品やプロジェクトを見れた点が楽しかった。実際に活動できたのも楽しかった。
- ・フロタージュの作品を最後に集め一つの壁面にしたこと。
- ・肉眼では捉えられない、木の肌の模様が浮かび上がったこと。
- ・皆と一緒に素直に「写す」ということに集中して取り組めたことが楽しかったです。
- ・散歩がてらいろんな場所に行けた。どんなものがこんなふううつるといっても改めてわかった。

Q4 実際に生でアーティストと触れ合っただけでいかがでしたか？

アーティストの思いや考えについて新たな発見があった	10
物を作るプロセスに対して新たな発見があった	4
物を作る技術・技法に対して新たな発見があった	5
作品に対する見方や考え方について新たな発見があった	7
その他	0
特に発見はなかった	0

Q5 Q4 で具体的にどんな場面でどのような発見があったか記述してください

- ・フロタージュという一つの技法で、とてもシンプルな方法だからこそ、多くのことを伝えられるという考えや思いが新しい発見でした。
- ・伝えるということ、歴史や生物、哲学などと融合することで美術が意味をもつというお話。フロタージュのデモンストレーションでコツを学んだ。
- ・ものづくりをする側の人は、歴史や哲学、文化人類学などにも視野を広げるというお話は、自分にも必要だと感じた。
- ・フロタージュというのは、とり出すのは形だけではなく、そこにある歴史やいとなみ、記憶などもとりだせること。
- ・講演会の中で見たDVDや、お話、また実際に体験をする場面の中で感じた。視野が広がったように思う。
- ・「土は生きている」という言葉がとても印象的でした。地層とか年輪も生きてきたあかしのようなものかな、と思いました。
- ・レクチャーのフロタージュとは何かと語っておられた時に、フロタージュとは自然を写すだけでなく、自分も写しとられているとおっしゃったこと。実際に木と対面した時に、お金などのフロタージュとは違う感覚を受けました。
- ・フロタージュという技法を使って、その写し取る物の歴史や人の営みを伝えるんだという言葉がとても印象に残っています。写し取った作品そのものだけでなく、写し取る活動にも意味があるのだと感じ、とても興味を持ちました。

- ・フロッタージュから展開することの美術について考えさせられた。うつしとるが写すであり、移すであり、映すであることは趣深いとレクチャーを聴いていて思いました。
- ・ただ写し取るだけではなくて、写し取る物の歴史や、写し取る行為について目的があるのだなと思いました。
- ・フロッタージュが触覚を刺激する視覚として作品を受け取る人も触覚を共有できる…という点

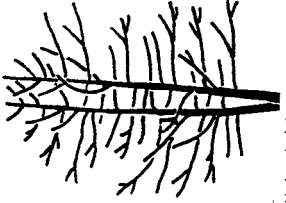
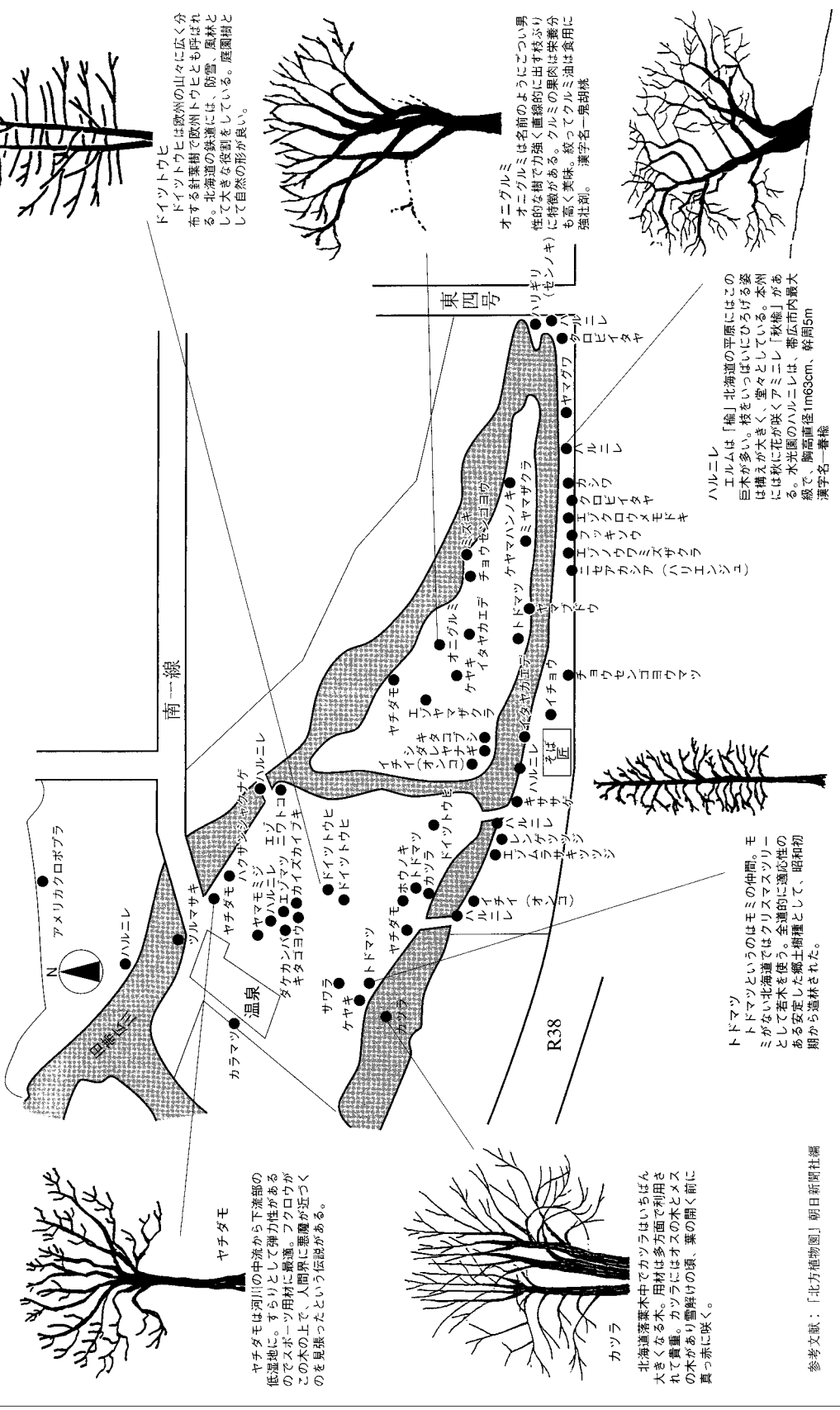
Q6 講演会の中で印象に残っていること、ご感想などをお聞かせください

- ・目で見るだけでなく、森の中にひびく音が心地よかったです。
- ・“うつす”という言葉に様々な意味が宿っているというお話が印象に残っています。
- ・フロッタージュの制作の様子がとても力強かった。
- ・複雑なことよりシンプルな方がいろんなことができるとおっしゃっていたこと
- ・参加してよかったです。
- ・岡部先生のように木の触覚が分かるようにフロッタージュするのは難しいように感じました。フロッタージュは自分の心を写すということなので奥が深いと思いました。
- ・今は、卒制に必死で取り組んでいて「美しいものとは?」「美しい構図とは?」等ぐるぐる考え込んでしまいがちでしたが、今日のレクチャーやワークショップを体験して、偶然生まれた表現の面白さ、楽しさを追求していくことも大事なんだなと改めて感じました。ありがとうございます。
- ・山に行ったことは、初めてでした。準備物の良さに感心しました。
- ・展示して外から見るときとてもきれいでした。
- ・美術のことだけ考えていても「美術教育」はできない…ということがその通りだと思いました。
- ・フロッタージュの今までの見方、イメージがとても変わった。

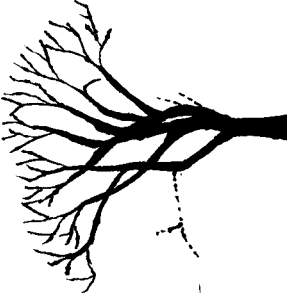


水光園「帯広市東10条南5丁目」主なる樹木の名板位置

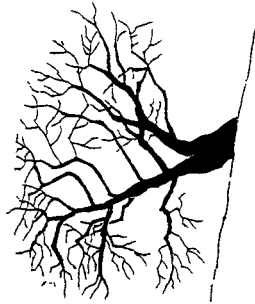
環境緑地保護区 (S.49.3.30:北海道指定)



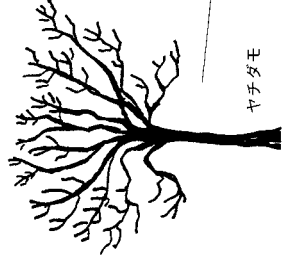
ドイツトウヒ
ドイツトウヒは欧州の山々に広く分布する針葉樹で欧州トウヒとも呼ばれる。北海道の鉄道には、防雪、風林として大きな役割をしている。庭園樹として自然の形が良い。



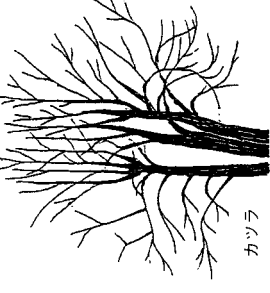
オニグルミ
オニグルミは名前のようにこつこつり性の木で力強く重層的に出す枝ぶりも美しく、絞ってクルミ油は食用に強壯剤。漢字名一黒胡桃



ハルニレ
ハルニレは「輪」北海道の平原にはこの巨木が多い。枝をいっばいにひろげる姿には構えが大きく、堂々としている。本州には秋に花が咲くアハルニレ「秋輪」がある。水光園のハルニレは、帯広市内最大で、胸高直径1m63cm、幹周5m
漢字名一春樺



ヤチダモ
ヤチダモは河川の中流から下流部の低湿地に。すわりとして弾力性があるのでスポーツ用材に最適。フクロウがこの木の上で、人間界に悪魔が近づくと見張ったという伝説がある。



カツラ
北海道落葉木中でカツラはいちばん大きくなる木。用材は多方面で利用されて豊産。カツラにはオスの木とメスの木があり雪解けの頃、葉の開く前に真っ赤に咲く。

トドマツ
トドマツというのはモミの仲間。モミがない北海道ではクリスマスマツリーとして若木を使う。全道的に適応性のある安定した郷土樹種として、昭和初期から造林された。

参考文献：「北方植物園」朝日新聞社編



オ・ペレペレケ・ブ

北海道造形教育研究大会帯広十勝大会プレ研修

水光園

2011年11月17日

写真：村中铁也



「オ・ペレペレケ・プ」—北海道造形教育研究大会帯広十勝大会(2011-12)

2012年7月26日-28日に実施される第62回北海道造形教育研究大会帯広十勝大会(北海道造形教育連盟)が開催され、ワークショップとシンポジウムの講師を依頼されている。同連盟に加入している全道の美術・造形教育者が参加し、「つくるとき」「つながるとき」のテーマと8つの柱をつなぐ分科会で構成され、関連事業として全体のワークショップが計画しされている。

1991年、北海道立帯広美術館開館記念の個展と企画、「美の現場—都市・市民・フロッタージュ」は、市民300人の手の力によって巨大な都市の版画がとりだされた。手に赤いチョークをもつ集団が三日間、街を移動しながら、川のながれのような印象的な光景をつくりだした。225mの赤い帯。美術館開館の祝祭空間が街に現れ、つくる人も、見る人も、人の手の力の凄さと素晴らしさに感動した。帯広の歴史が市民の手によって記録され記憶される壮大な作品。「美術館を帯広に！」という市民の熱い気持ちも映した。フロッタージュというシンプルな版の手法で都市の形と記憶に触れ、これに参加し目撃しつながった実に多くの人たちの身体と気持ちにプリントされ記憶されること、これこそわたしたちのなした「オビヒロ・マトリクス」だった。20年前の熱い気持ちにつながるとしたら、その源をさらに掘ること、都市の原像にふれること、もうひとつの歴史につながることの発想だった。大河十勝川に注ぐ無数の水脈の河口が集まるその大地から、帯広の歴史が拓けたからである。

「オ・ペレペレケ・プ」は帯広の名のもとになった帯広川を表すアイヌ名。[O-perperke-p]陰部・いくつにもさけている「もの」、すなわち河口がいく条にもわかれている意で、帯広の大地をつくる帯広川にはいくつもの川が注ぐ土地の様を表す。アイヌの人にとって「川は古く女性に考えられていた」(知里真志保)ようで、その合流点は大地の割れ目にたとえられる。日本語の「娘さん」はオペレ[O-pere]と親愛感をもっていうという。先住民の人たちの自然や世界の感じ方に驚くとともに、想像力と創造にすぐれた人々であったことがわかる。そういうことを学びながらの作業である。

フロッタージュのトライアルは水光園。札内川に注ぐ旧帯広川の水脈の痕跡が園内に残り、ハルニレやヤチダモ、カツラなどの巨樹がかつて原生の森をつくっていたことを思い起させる。その日帯広は快晴、氷点下14°C。鉛筆握る指先が鉛筆のようにかじかんで硬直してしまうが、樹と対話するような晴れやかな時間だった。

帯広の森をめぐる。帯広農業高校敷地内の原生の森、水光園、帯広の森とロケハンを重ねたが、緑ヶ丘の美術館周縁の森がよさそうだ。地形に高低があり、原生の姿やきり拓られた林相があり、場所ごとに表情をかえた姿をみせる。なにより「オビヒロ・マトリクス」の最終地点を掘り起こすという繋がりもみえた。夏には森の生命が謳歌するなかで、これにふれる人々の気持ちが、生命のリズムにもつながって高揚した気分の作業となるだろう。

北見の森で展開した2,500点の「森ニイマス」、「大阪・柏原の金剛・生駒・紀泉の森」、遡れば「蚕糸試験場の木々」(2010)、「雄別炭砒を掘る」(2009)、「被爆樹に触れて」(2007-)、「風に触れる」(2001)、「森のなかで、野付牛にふれる」(1999)、「絹の道ヨコハマ」(1993)、「チキサニプロジェクト」(1992)、「島から島へ」(1991)、「ビッキにふれて」(1989-)などの経験が活かされることだろう。

III. 自然を対象にした北見のプロジェクトは、

きっと文明史的な遠近法のなかでの意味をもつでしょう。

(E-mail: 6/11 12:13 港千尋)

1cmの土になるには100年かかるという。「諏訪をめぐる、縄文にふれる」作業で何度も聞かされて何度も話をした。縄文期の人々の生活層にとどくにはわずかに50cm掘り起こすことだった。時間に触れることの実感、足元にある時間のカプセルだった。ここからたくさんの積層した時間を引き出すことができる「土の記憶」だった。

初めて広島に向かったのは1986年秋。広島市現代美術館の「ヒロシマ」が主題の制作委託だった。平和記念公園の国際会議場の建築現場の印象が強烈だった。被覆した盛土の層、生活層の黒い土、明るい砂の堆積した土壌の三層。譲り受け、手元に置くことでヒロシマを構想できるリアリティを感じた。その土を初めて美術にしたのは陶芸家鯉江良二さんとの「ヒロシマその後—岡部昌生+鯉江良二」(1995)。路上のフロッタージュと共に三つの標本瓶に詰めて展示した。その後、土は常滑まで旅をして鯉江さん手によって非人間的な火に焼かれた土を窯の火で再焼成した「土の記憶 1945/2008 時の断層」(2008)という作品になった。

友人のひとり、アイヌ民族の彫刻家、砂澤ビッキのノミ痕に触れたのは、札幌の小さな画廊で互いに個展を開

いていた1967年のことだ。自然と対峙して自己を厳しくみつめ彫刻する覚悟をもって北へ、音威子府に向かい森にはいるのは1978年。何度も訪ね、樹の生命を彫りだす傍らに寄せてもらった。ビッキが骨髄癌で逝ってしまった翌年の1990年春、主人のいないアトリエに残された彫刻のノミ痕をひたすら擦った。触れるとビッキと話しをしているような親しさを感じた。樹の時間と人の生の時間を重ねた。ビッキの生と自然の中に宿る神聖な力が引き出された「ビッキにふれて」だった。

宮岡秀行さんの「ēbionim エビオニーム」で、声を発しない生命の存在の重さを思った。2010年夏、広島平和大通り西観音町、戦後道路拡幅改修で向きが逆に移植されたナツメをすりとった。裏側に深いタテの傷を持ちながら生きつづけてきた時間の長さを根元から梢へと擦りあげた。10連画となる下部の二枚に根元の土を手でのばしてすり込んだ。それに重ねるようにユジェン・バフチャルさんのテキスト「Pour l'Art apres Hiroshima ヒロシマの後の芸術のために」をセリグラフで載せた。

宮岡さんとは「徴はいたる所に」の映像取材で、初夏、札幌芸術の森美術館の野外展示のアカエゾマツから彫りだされたビッキの「四つの風」の前にたった。突然吹きつけた一陣の烈風が彫刻を撫でていった。風雪という自然のノミに委ねていたとはいえ、すでに一体は自然倒壊(2010.8/6)し、内部の木質は腐食し倒壊で緑の牧草に赤く散って凄惨さが溢れていた。ここに立った彫刻の24年と間寒別の原生林の250-300年ともいわれる時間が躯体とともに地に還っていった。

地に還る木霊—巨樹と森。地上の万物は土に還っていく。樹と土、これに触れてきた。

都市と森、遠近をかかえて

被爆樹にふれて

2007年6月8日、陽の沈んだヴェネチア、ジャルディーニ(公園)。第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館は、広島旧国鉄宇品駅遺構から擦りとり採取した1,500点のフロッターージュによる「ヒロシマの皮膚」のような空間に抱かれた被爆石が、列をなして配置され、テンポラリーな歴史の現場となった。

漆黒の、闇のような静寂な空間に、鉛筆が石にたたきつけられるような擦過音が響く。ストロボが閃光のように瞬時、激しく左右に振れる右手を射す。

「ことばに表せない感動を得た。戦争は人を盲目にしたが、ヒロシマ以後あなたが制作することで、いったん盲目になった人に光を与える仕事が可能であることを示してくれた。ここまで来たかいたがかった」。

スロヴェニア出身でパリに住む盲目の写真家ユジェン・バフチャルさんは、広島・宇品のプラットホームの被爆石に触れ、私との「擦り+撮る」共同作業を終えそう語り、「被爆イチョウのフロッターージュに手を添え撮りたい」と、私に強く促した。「声を発しない」生命。それに触れ、バフチャルさんに応えたいと思った。

07年10月、11月、そして08年2月と8月、傷をかかえる樹木に向きあう。手で視るというフロッターージュの原初的でエレメンタルな手法で「ヒロシマ以後」の時間に触れると同時に、視ること、触れることの根源をもつよく照射させられた。(「岡部昌生 被爆樹に触れて」2008)

宮岡秀行「声を発しない生命」

根室からのイメージとことば、ありがとうございます。

返信に広島からイメージとことば(詩)を送ります。

野木京子さんは友人であり、好きな詩人です。

この詩は特にくり返し読んでいて、

岡部さんと共に触った、被爆樹の映像にふさわしいことばかと思われます。

(声を発しないものを愛する習性が私にはあって)

声を発しないものを愛する習性が私にはあって

誰の記憶にも残らない一本の中ぐらいの

裏側に傷のある樹木のように

彼らがこちらを見もせずにとだ歩いて横切っていくさまを

立ったまま見ているだけの日もあって

そのことが幸福だった
おそらく惑星が傾いだけ
ひとつのなにかの世界が消え去ってしまうときにまでも続くくらいに幸福が
裏側に傷のある中くらいのおかしな形に崩れそうな樹木を
支えていたのかもしれない
(野木京子『ヒルム、割れた野原』より)

詩のことばは社会的コードと舐触せず、
それをすり抜けて神話的な時間を映しだします。
それは、歴史的な時間を映すと同時に、それに矛盾する、
計測される以前の時間をも語るかのようです。
それはたぶん、理性より無意識に向って語りかける領域で、
岡部さんのお仕事にも近いように思います。
八月二日に石丸さんたちがぼくの作品を京橋川沿いで野外上映するようです。
ぼくはバイトで行けませんが、タイミングが合えばぜひ北海道から駆けつけてください。
2008.7.01 上七軒にて 宮岡秀行
(『被燻樹に触れて』2008)

港千尋「木の教え」

木は人間よりも前から地球を知っている。だから植物や plant という言い方は、すこし間違っている。ほんとうは、木が人間を植えたのだ。植物界のうえに動物界が乗り、その頂点に人間がいるピラミッド図も同じように、錯覚を起こしやすい。わたしたちの足の下に植物がいるわけではない。人間のほうが木々の下に集い、葉から根まであらゆる部分を借りて住んでいる。

木の生活は、そのほとんどが人間には見えないところで営まれている。それはひとつの世界である。その体内には幾千幾万の小さな川が流れ、隆起する樹皮は目に見えない生命が住まう土地となり、空にむかって大気をつくりだす。木々の根が、暗い地中でどのようなコミュニケーションを行っているのか、わたしたちは知らないだろう。目には見えない水脈を地上に描き出すとき、季節の変化を色彩や輝きによって知らせるとき、感性や知性もまた、文明とよばれる永い時間のどこかで植えられたのではないかと思えてくる。

とがった先端で書くことを教え、粘土板を焼く炎をつくり、紙を与え、そして本を授けたのは、木である。書物を意味する単語の底に樹皮の意味が隠れ、言葉のなかに葉っぱが揺れている。そのようにして木の技術が支えてきた文明の長い長い時間が、たったひとつの爆弾によって断ち切られるとは、誰が予想しただろうか。文明の先端から落下した極小の火が、すべてを灰に帰するとは。

だが木は蘇り、鳥たちは戻ってきた。その下で岡部昌生が樹木を擦る。紙をあて、鉛筆の先端を滑らせながら木を擦るとき、芸術家は感性と知性の永い時間を遡行している。ゆるやかに曲線を描く腕のストロークによって、大地から吸い上げられ、すばらしい高みへと上昇してゆく幾千の川を遡ってゆくための、糧が漕がれる。

それは木の内部に保たれている秘密を聴くための、はるかな旅である。(『被燻樹に触れて』2008)

ユジェン・バフチャル「ヒロシマの後の芸術のために」

わたしたちは、世界についての思考にとって、「ヒロシマ以前」と「ヒロシマ以後」があるということを、繰り返し確認せざるをえない。この点で岡部昌生の作品は、避けられぬことを乗り越えようと望む人間の弱さを思い出させるとともに、自己超越としての芸術を問いつ直すように、わたしたちを招いているのである。

岡部の作品は、子供の遊びに見えるかもしれない。もちろん、それは子供じみたという意味ではない。ヒロシマの後では、幼年としての芸術も、芸術としての幼年も不可能なのだから。どう望もうとも、芸術家は死と灰の叡智を受け入れざるを得ないのだ。そしてこの点にこそ、宣告された死、あるいは現実の死を超えたところで、現代の芸術が発見する、超越性の新しいかたちがあるだろう。

わたしはあるとき岡部昌生の制作の現場に立ち会うという幸運を得た。彼はヒロシマの石にどのようにして鉛筆を走らせるかをわたしに見せようとした。彼は書くのでもなく、まして描くでもない。彼の鉛筆は疲れを知ることなく、傷ついた石の瘤や窪みに沿って走り、時間の刺し傷を記録していたのだ。そうすることで彼は、表象不可能なイメージに出会うことなく、限りない喪の仕事を行っているのだ。

新しい紙に触れようと手をのぼしたとき、港千尋がわたしに囁いた。

「今度は君のために、黒い紙を使うようだ」。

わたしの“近接しすぎた眼差し”のための気遣いに感動して、わたしは鉛筆の動きに耳を澄まし、あたかもそのなかにイメージを、さらにはけっして記録されたことはない原子爆弾の爆発の音までも見いだし、記憶しようとしたのだった。（『被爆樹に触れて』2008）

港千尋「痕跡と時間」

しるしについて、独自の研究を行ったのは現代記号論を基礎づけた哲学者のひとり、チャールズ・S・パースだった。文字、象徴、イメージとしるし=記号を非常に広い幅で考察したパースは、これを分類するひとつの例として、対象と物理的な関係をもつというものに、「インデクス」という概念をあてている。たとえば足跡やタバコの灰のような痕跡は、インデクスに含めることができる。ここでインデクスという語が「指」の意味でもあることを考えると、イメージと記号の関係を考える上でも興味深い。日本語で「指標」と書けば、これもやはり「しるし」のひとつである。

手型にはじまり、対象を痕跡として直接残す方法は、現代にいたるまで多くの表現を生んできた。痕跡は現代美術にとっても重要な表現である。そのなかでフロッタージュは対象を「版」として扱うという点で、印刷の歴史とも深く関係している。

フロッタージュの技法により、多くのプロジェクトを手がけてきた岡部昌生にとって、広島はライフワークを生み出した場所として特別な重要性をもっている。被爆した後に生き残った木の表面を擦り取ったこのシリーズは、ベネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館展示を訪れたユジェン・バフチャルの要請によって制作されたものである。ビエンナーレにはフロッタージュとともに、それが生まれた宇品駅の縁石が展示されたが、被爆した石に触れたバフチャルは生命についての問いを発したのだった。ベネチアという都市が無数の木の杭のうえに建てられている石の都であることを想起しつつ、彼は「木が支える石」というイメージを召喚したのである。被爆樹の種類や残っている地点の調査などを含む調査と制作は、ひとつのフィールドワークとしても捉えることができる。この制作を記録したドキュメンタリー作品は、イメージをつくりだすプロセスについて多くのヒントを含んでいる。こうして手によって残されるさまざまな痕跡は、記憶の未来をめぐる創造的な営みへ参画するのである。

（『愛の小さな徴』2010）



岡部昌生「被爆樹に触れて」フロッタージュ+オイルチョーク+鉛筆+紙 55×75 cm イチョウ 牛田本町浄土真宗本願寺派安楽寺 2008年2月20日 同行：宮岡秀行 爆心地から2160 m

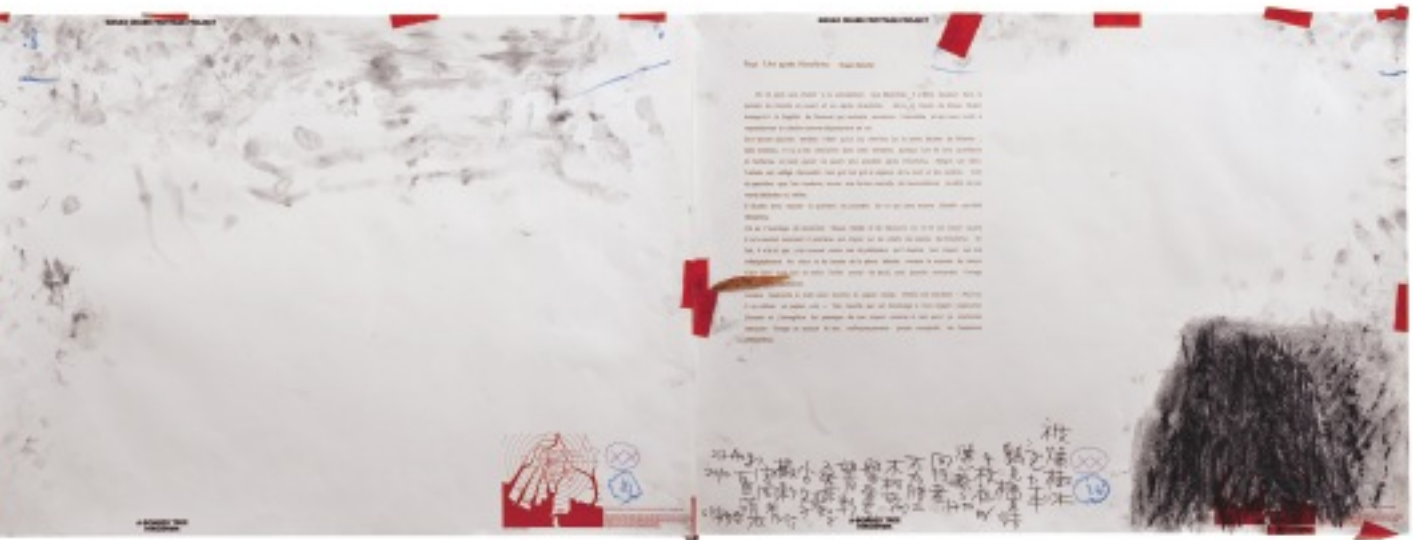


レクトゥル写真フェスティバル(フランス)2010 撮影:港千尋





被爆樹にふれてーシダレヤナギ(4連画)
鶴見橋東話 2007年7月樹木医堀口カさんにより枯死と診断 爆心地から1,700m
フロッタージュ+セリグラフ 鉛筆+紙+テープ+葉 各55×75cm 2010



土の記憶—事後のイメージ 広島／茅野／ペイルート／フクシマ

諏訪の土の五千年

藤森照信(建築史家・建築家・東京大学名誉教授・工学院大学教授)

岡部昌生さんの仕事についてはだいぶ前から知っていて、“フロッタージュの人”というのが私の認識だった。各地のしかるべき場に出かけて、コンクリートの壁や路面の舗装に紙を当てがい、上から鉛筆でこすって形を写し、形を浮かび上がらせる。人の営みの痕跡。

岡部さんが“諏訪の土”をテーマに展覧会をやると聞き、すぐ浮かんだのは尖石の考古館の縄文土器だった。縄文のヴィーナスも浮んだ。

でも、土器はともかくヴィーナスは、いくらフロッタージュで世界に知られた岡部さんでも許してはもらえないだろう。とすれば、土の上に紙を敷いてフロッタージュする方法を編み出したんだろうか。

実際に岡部さんが“諏訪の土”の制作に取り組んでいるのを覗き、全ては私の誤解だったと知った。

諏訪のいろんな土を集めてきて、水で溶き、大きな紙の上に流す。その流紋が表現の主役だった。

イギリスの名高い自然派作家のゴールズワージーが、泥のついた水を紙の上に置き、溶けて流れた後の姿を展示する人を見たことがあるが、それよりずっと良かった。ゴールズワージーのはただの汚れに過ぎなかったが、岡部さんのは、確かにそこには土と水の流れが現されている。そしてさらに、その水と土と一緒に作った痕跡は、縄文土器の文様と通じていた。

諏訪の土は、5000年前、八ヶ岳のふもとで縄文土器となり、5000年後、市民館の床の上で展示作品となった。

(「岡部昌生〈諏訪をめぐる〉、縄文にふれる」茅野市美術館 2011)

〈縄文土器にふれる〉報告—土器に触れる意味

功刀 司(茅野市尖石縄文考古館学芸員)

10月31日、茅野市尖石縄文考古館で、岡部昌生フロッタージュプロジェクト2010〈諏訪をめぐる、縄文にふれる〉を構成する連携プログラム—1として縄文土器を素材としたフロッタージュが行われた。岡部昌生先生からこの日のフロッタージュ制作の題材となる縄文土器は、貴重な歴史資料・文化財であること、また資料を傷めないための制作上の具体的な注意をいただき作品制作が開始された。制作当初、参加者の方々は土器の文様をはっきりと忠実にすり取ろうとされているように見えた。制作した作品の名前も、「〇千年前の土器」であるとか、考古学の学問上の言葉である「〇〇式土器」としていた。ところが、作品制作を進めるにつれ、考古学用語を離れ、すり取った文様の印象や作品制作の体験から題名をつける方も現れた。作品にも参加者個々の特徴や意図が表れ始めた。この変化は、考古学博物館の学芸員としては非常に興味深く、制作者が数千年前の遺物と直接対話を始めたのかと思われた。

思い起こしてみれば、私が考古学に興味をもったのも近所の畑で土器片を拾ったのがきっかけだった。土にまみれた土器片に描かれた文様の不思議さ、畑の土の中から顔をだした土器の姿に隠された宝物のような魅力を感じた。拾った土器を洗いながら、今は断片となった模様全体の像や、縄文人が文様にこめた思いを想像した。すべては実物である縄文土器を手にすることからはじまった。今回参加された方々が土器に触れたときの気持ちはどうであったか。当日は時間もなく参加者の感想はあまりお聞きできなかったが、今回展示される作品から、制作された方々の思いを読み取ることができればと思っている。

(「岡部昌生〈諏訪をめぐる〉、縄文にふれる」茅野市美術館 2011)

「諏訪の首飾り 七つの断章」

岡部昌生

暑い日でしたネ。日本列島が焦げるほどの猛暑でしたが、そんな記憶が遠ざかるように札幌は寒いです。先日は雪が降りました。

皆さんと永明の土を使った作業は、とくに印象深い夏のできごとでした。縄文の時代に届く所までみんなで掘り進めましたが届きませんでした。引き継いだ大人の人たちも身体が埋まるほど掘って、掘って、掘りましたが、届きませんでした。大きな玉石が沢山出てきましたから、かつての大きな氾濫した河川には届いていたのでしょうか。

地表の水平に、垂直に穴を掘る体験は、きっと「世界を知る」ことになったすばらしい経験だったと思います。その土をつかったドローイングも皆さんは喜んでくれました。紙に手の動きを水平に広げて、皆さんの身体の動き、痕跡を残しました。「水平と垂直の世界」に触れた、そんなうれしい反応をよせてくれたことがとてもうれしい。

皆さんとの作業のあと広島に行きました。もう20年以上も通っていますが、いつもなにかを考えさせられます。子どもの頃の、根室空襲の記憶が忘れず刻まれていたことが重なったのかもしれない。広島でも水平と垂直の、街に突然射し込んだ強い光のことを思い出します。傷をかかえる樹木に向きあう「被爆樹に触れて」の作業を、炎暑の広島でやってきました。

皆さんと被爆樹のことを話しましょうか。深い傷を刻みながら、たくさんの水を吸い上げて、たくさんの光を取り込んで、たくさんの時間をくぐり抜けて生きてきたのですから、たくさんのことを話してくれるでしょう。(2010年秋の終り 札幌)

(「岡部昌生〈諏訪をめぐる〉、縄文にふれる」茅野市美術館 2011)

ひとの手の痕跡

九富美香(茅野市美術館 学芸員)

岡部昌生が初めて諏訪の地を訪れたのは、2009年12月。それから約1年の歳月を経て、目には見えない毛細血管のようなつながりと、膨大な量の作品が生まれた。

この企画を始めるにあたり、岡部は御柱祭(1)の会期中を含めて幾度も茅野を訪れ、リサーチを重ねた。時間を重ねるうちに、作家の視点はこの地域の奥深くに眠る「縄文」、太古から何層にも積み重なる「土」に向けられ、諏訪湖周辺に点在する博物館・美術館をつなぐ『縄文の首飾り』の構想を膨らませていった。

岡部のこれまでの作家活動は、日本の近代という時代を捉え、制作をおこなうことが主であった。しかしこのプロジェクトでは、近代から一気に時代を遡り、5000年以上前の歴史にふれることを試みたのである。

諏訪の遺蹟分布図(茅野市尖石縄文考古館蔵)を見ると、諏訪地域には諏訪湖のほとりを取り囲むように旧石器から縄文、弥生時代にかけての遺蹟が数多く点在し、とくに八ヶ岳南麓にあたる茅野市内から原村、富士見町にかけて縄文時代の遺蹟が無数に散らばっている。以前「田畑を耕せば土器片や矢じりがゴロゴロと出てくる」という言葉を市内在住者から聞いた事があるが、それは本当の話なのであろう。縄文文化は5000年以上前からこの土地の下に眠っている。そして人の手が土にふれ、掘り下げることによってふと目を覚ます。

岡部は8月から11月にかけて、茅野市内と原村を含む10カ所で採取した土を用いて、大小含めて44枚のドローイング作品を制作した。巨大な紙の上を流れていく土と、岡部の力強い手のストロークが複雑な文様を描いていく。数枚のドローイングを仕上げた後、岡部は思い立ったように紙に1カ所穴を開け始める。穴から土が流れ出るような工夫を施しつくられた作品には、まるで逆三角形を意識したかのような盛土が残っていた。

この形を見たとき、太古の諏訪湖を記した図を思い出した。諏訪湖の1000年以上前の水位を描く線を辿ると、逆三角形になる。まさに土のドローイングで表現された土の形状と重なったのである。そして岡部が意図的に開けた穴の位置を照合すると、現在の茅野駅にあたる場所が示されていた。諏訪湖底を廻った土が、茅野へと集約されるようなイメージ。それは10月から11月にかけておこなった〈諏訪をめぐる〉連携プログラムの序章であった。

茅野市内と諏訪湖周辺の博物館5館をめぐる連携プログラムでは、諏訪地域の様々な歴史的背景を学び、博物館の収蔵品や産業遺産に直接ふれる機会を設けた。このプログラムの要点は、制作に入る前に、作家・ワークショップ参加者ともに『知識の共有』というプロセスを踏むことにある。フロタージュ制作では目の前の対象に直接手でふれ、紙をあてて擦り取る。『知識の共有』をおこなうことによって、擦り取る対象の見方を変化させ、遠い存在のように思えた物事をより自身の身近なものとして捉えることができるようになるのである。

何度も交差する現代人の手のストロークは、徐々に遠い過去との距離を縮めていく。遙か昔、人の手によって創られた痕跡がゆるやかに浮かび上がる度に、参加者の顔には笑みが溢れていた。

太古の人々は土を採取し、数多くの土器や土偶を創り上げた。どれを見てもひとつとして同じ形のもの無く、時には複雑に、時には簡素に、後世に何かのメッセージを伝えたいかの如く刻まれた文様は、5000年以上の時を経ても、全く色褪せないほど斬新な曲線で構成されている。

〈土にふれる〉共同制作の作品には、土器や土偶の文様と似た線が数多く描かれている。子どもたちが思い思いに描く線は、ぐるぐると弧を描くものもあれば、具体的な形をイメージ出来るものもある。土という表現材料を用いて様々なパターンを重ねる行為は、時を経ても変わりようのない普遍的なものなのだろうか。この地で生まれた先人たちの表現と、子どもたちが描く曲線。時を超えた表現方法のつながりに気づき、それぞれの手と手の痕跡が重なり合う。

「縄文がいいのではない。諏訪は縄文の文化が今も生きているからいいのだ」

2011年に生誕100年を迎える美術家・岡本太郎の言葉である。岡本太郎は縄文文化や御柱祭に魅了され、諏訪地域に何度も足を運んだ。そして何千年ものあいだ脈々と受け継がれてきた諏訪地域の文化に光を当てた。

岡部昌生は、日本の近代の痕跡を擦りとってきたその手で、諏訪の地を掘り下げ、“発掘”した。そして多くの市民とともに手を取り合い、太古から現在までの痕跡をこの地で記したのである。

(1)正式名称は「諏訪大社式年造営御柱大祭」。諏訪大社において寅と申の年におこなわれる。

(『岡部昌生〈諏訪をめぐる〉、縄文にふれる』茅野市美術館 2011)

港千尋「禍渦の瓦礫 埋立地の土」

ペイルートアートセンターに展示される200点のフロッターージュ作品には三つの日付が入っている。1894年：旧宇品駅の建設の年、1945年：原爆投下による破壊の年、2002年：旧宇品駅遺構の撤去破壊の年。ペイルート版のニューバージョンに入る2011年の日付は東北地方を襲った大震災と原発事故の年を表している。福島第一原子力発電所から漏れた膨大な量の放射能はいまでも汚染をつづけており、日本人にとっては1945年の最初の被爆体験を想起させることになった。広島の影響は過去を映す鏡であるだけでなく、未来を映す鏡となるのである。

(映像「Is There a Future for Our Past?」DVD テロップ 港千尋)

佐藤友哉さん

Nakba(大惨事・大破局)のデモが5.15、国境でイスラエル軍と衝突。死者10人、負傷者112人の惨事となったことを各紙が大きく報道しました。この地の火種がいつ発火するかという兆しが現実となりました。この展覧会「Image in the Aftermath」は、主題のようにまさに〈事後〉の〈いま〉を内包した今日性のただ中で開催されます。

ペイルートの中心部は内戦と空爆で破壊され、弾痕跡が生々しく、民族、宗教の対立のあとがいまだに残ります。

その廃墟の瓦礫が埋め立てられた広大な敷地「Majidiye」が地中海に突き出しています。その土の作品「土の記憶—Beirut 戦禍の瓦礫、埋立地の土」が大きな二点となりました。

それに寄せた港さんのテキスト。

「戦争により生じた瓦礫が、Majidiyeの埋立地をかたちづくる。紙のうえを流れる土が、消滅した中心街にあったすべての痕跡となる。」

作品は、「震災・原発事故」の〈事後〉の〈いま〉に重なります。(5/19 13:07@Beirutokabe)



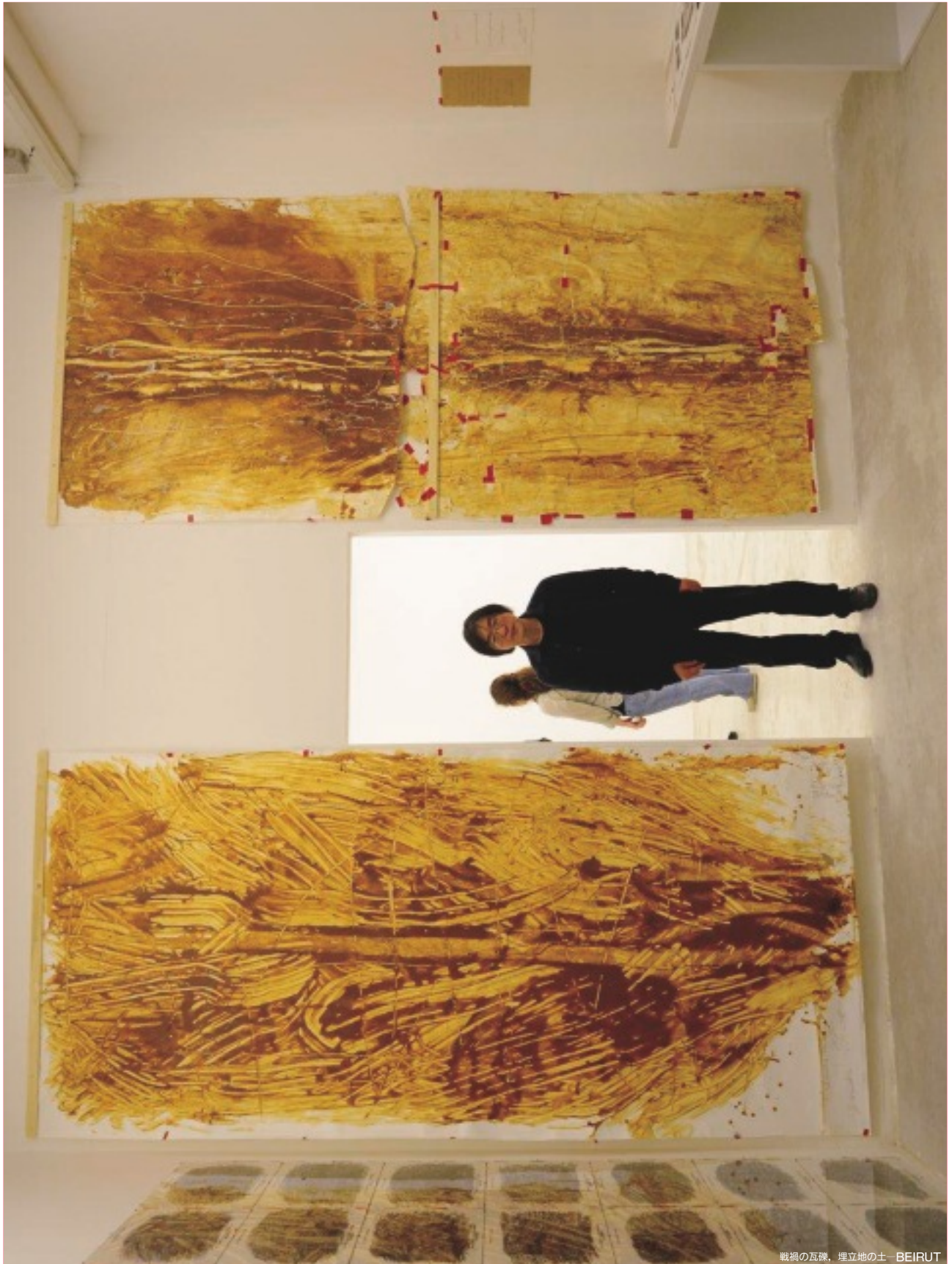
土の記憶—HIROSHIMA art space HAP ©大前洋和











戦禍の瓦礫、埋立地の土 BEIRUT

港 千尋

レバノンには国旗に樹が描かれている数少ない国のひとつである。紺碧の地中海の東の端、銀雪を頂く山に抱かれ、レバノン杉を育む水と緑に恵まれたと書けば、美しい国を想像する。だが、1970年代以降この国が陥った内戦が、いかにその国土を荒廃させ、今世紀に入ってからも度重なる紛争に見舞われていることを思うと、ひとつの名とそのイメージの関係が問われてくる。美術家の岡部昌年さん(北海道札幌市在住)と共同で参加した首都ベイルートでの展覧会は、イメージと現在についても深く考えさせるものになった。

家具工場の施設を改装してつくられたベイルート・アート・センターは、2年前にオープンした民間の施設である。中心街からはやや遠く立地はよくないが、すでに映像や現代美術を中心に意欲的なプログラムを展開し、すでにベイルートのみならず、中東のアートシーンでも強い注目を集めている。美術館のスタッフはみな30歳前後と若く、彼らのほどばしるようなエネルギーは、九つのユニットが参加した今回の展覧会にも十分に反映されていた。タイトルは「Image in the Aftermath」＝「事後のイメージ」である。たとえばフランスの写真家ソフィー・リスステルユーベルの作品は画像合成でつくられた道路の穴。爆弾

みなと・ちひろ 写真家、多摩美大教授。1960年、神奈川県藤沢市生まれ。2007年のベネチア・ビエンナーレで日本館コミッションを務めた。

ペイルートの「事後のイメージ」展に寄せて

テロを想起させるが、作家はイメージを与えるインパクトに関心がある。サダム・フセインの演説を分析したレバノンの作家ジャラル・トゥフイックの映像作品も同様に、マスメディアのイメージ操作を問いただしている。「アフガニスタン」や「イラク」といった固有名が、どんなプロセスで特定のイメージを与えてきたかが問われているのである。

このプログラムのディレクターは、2007年のベネチア・ビエンナーレで日本館の作品展示を見て強い衝撃を受けた、上海でアートディレクターとして活動する島本健太さん(十勝管内新得町出身)を通じて、私たちに参加を要請してきた。内容は広島島の旧宇品駅遺構を擦り取ったフロックの映像作品200点と映像である。石の痕跡を表した作品が壁を覆い尽くす中、あえて1作品だけを黒い紙で覆った。ヒロシマ、ナカサキの後、

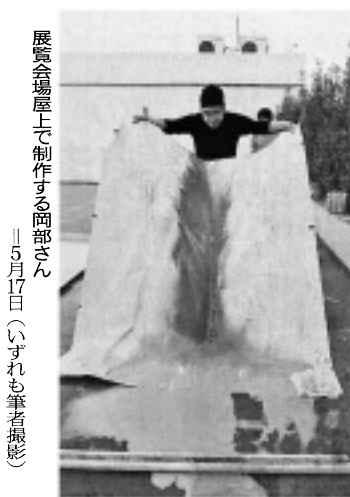
こんどは原発事故による被ばくのたまたなかにある2011年を記す意味を込めたベイルートバージョンとしたのである。

展覧会のテーマに共感した私たちは、忙しい設置作業の合間をぬって現地制作を試みた。岡部さんは今年、長野県で縄文時代の土を使った作品を発表していたが、それをレバノンで作ろうというのであ。現地スタッフと相談した結果、埋め立て地の土が候補になった。水と混ぜられ、白紙に流れたのは、内戦で崩壊したベイルート中心街の瓦

熱気の裏 戦禍の現実



岡部さん(左端)のフロッターシュが展示されているスペース。奥の2作品が「土の記憶—Beirut 戦禍の瓦礫、埋立地の土」=5月17日



展覧会場屋上で制作する岡部さん
=5月17日(いずれも筆者撮影)

礫の土であった。その土で制作した縦3段に上る作品にも暗示する展覧会だった。

◇

「土の記憶—Beirut 戦禍の瓦礫、埋立地の土」とタイトルを付け、会場に展示した。展覧会の初日となった5月17日には400人を超す人が訪れて私たちが驚かせたが、その熱気は緊迫した現実と表裏一体のものであった。直前の問い合わせは同短大011・742・2020へ。

被爆石展示空間と共鳴

山下寿水



やました・ひさな 広島県立美術館学芸員。1981年北海道生まれ。早稲田大第一文学部卒。首都大学東京大学院人文科学研究科修士課程修了。2010年4月から現職。

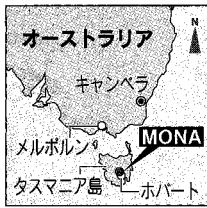
紹介したい。

二つの時代併置

MONAが収蔵している作品は、その美術館の名称が示す通り、古代エジプトのミイラや壺といった古美術(オールド・アート)と、

前衛的な現代美術(ニュー・アート)という真逆ともいえる二つのジャンルから構成されている。古美術と現代美術が同じ展示室に併置されることによって、作品は単体で鑑賞するときとは別の装いを見せていた。

岡部昌生作品 豪タスマニアの美術館に



オーストラリア大陸南東に浮かぶタスマニア島。その名前を聞いて、大自然の情景を想起する人はいいても、「アート」を連想する人はいないだろう。しかし、1月21日に開館したオーストラリア最大の私設美術館「MONA」(Museum of Old and New Art)は、タスマニアへのイメージを一変させる魅力を持つていた。



旧国鉄宇品駅のプラットホームの石をフロッタージュするウォルシュ④。壁には、中国新聞の紙面も取り込んだ岡部の作品が並ぶ



ワイナリーや宿泊施設も併設するMONA (いずれも撮影・吉岡早百合)

例えば、過去の作品は現代に通じる造形美を感じさせ、現代の作品は過去からつながる連綿とした歴史の厚みを感じさせる。展示室には作家名や作品名が記されたキャプションもなかったが、そうした配慮も過去と現在のリミックスに拍車をかけていた。

MONAは大地を削るようにして建てられているが、その履歴を示すかのようには、館外にも館内にも岩肌がときに露出し、美術館そのものが大地と結びついていることを感じさせた。

多摩美術大学教授の港千尋との共同作品となる岡部の

「タスマニアのヒロシマ」は、そうした美術館の出口付近に置かれていた。彼の展示スペースには、旧国鉄宇品駅のプラットホームの列石として用いられていた被爆石と、鉛筆でその表面の凹凸を写し取った紙とが整然と並べられていた。岡部が用いるフロッタージュ(擦り取り)という技法は、被爆石の表面をなぞり写すことにより、被爆石が持つ記憶そのものをなぞっている感覚を与える。

擦り取りも体験

本作品は、2007年に美術のオリンピックともいわれるヴェネチア・ビエンナーレで日本代表として展示された作品を再構成したものである。ヴェネチアでは岡部のサポーターとして広島から多彩なメンバーが集まったのだが、今回も広島から旅立った十数人の参加者が、宇品の被爆石をフロッタージュすることの意義について来場者に説明し、一緒に被爆石の表面をこすり、ときに日本酒を振る舞い喜ばれた。

岡部の作品は、ヴェネチアでの展示とは違った印象を与えたように思える。というのも、岡部の作品は「石」という大地の産物か

クリック

MONA オーストラリアのタスマニア州都ホバートの中心部から北へ約12キロ。展示面積約6千平方メートル。タスマニア島出身の資産家デビッド・ウォルシュが建設、作品購入した。現代美術の大家アンゼラム・キーファーやクリスチャン・ボルタンスキーの作品を恒久展示している。約400点を展示する開館記念展「MONANISM」は7月19日まで。

さらに言えば、古美術に現代的な姿をまよせようとするMONAの展示空間と、過去のヒロシマの歴史を現在に感じ取らせようとする被爆石が共鳴しあい、作品の力強さを増していたように思える。

ちなみにMONAの来館者は、誰もがこの被爆石をフロッタージュすることができる。そうしてヒロシマの歴史というものが、タスマニアにおいて今後、多くの人に触れられ続けることとはとても意義深いことだと感じた。

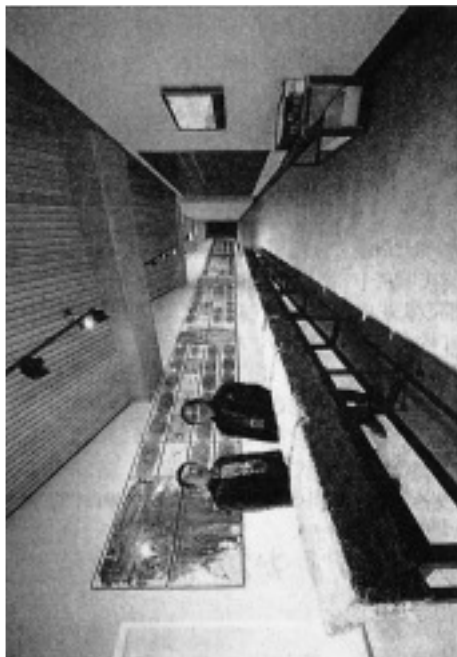
文

化

岡部昌生さん

建物や樹木の表面を鉛筆などでこすり取るフロッターシエに取り組み、美術家岡部昌生さん(北広島市在住)の作品が、オーストラリア南東のタスマニア島に開設したMONA美術館に常設展示された。被爆地広島で制作したフロッターシエ作品や実際に被爆した石も並び、展示作業と1月21日の開館セレモニーのため現地を訪れた岡部さんは「ヒロシマの記憶がタスマニアに転写される思いがした」と話している。(久才素樹)

MONA (Museum of Old and New Art) は、同国の大富豪アリスト・ウォルシュさんが自身のコレクションなどを展示する私設美術館として、タスマニアの州都ホバートに設けた。地下3階まである地中美術館で、展示スペースは6千平方メートル上



豪のMONA美術館に常設展示

ヒロシマの記憶転写

る。館内外で吹き出しになった土の壁が原られるという。

展示品は、近代エジプトのミイラや古代ギリシャの装飾から、アンセルム・キーファーやクリスチャン・ボルタンスキーら著名現代美術家の作品まで約400点に上り、昔と今、生と死といったテーマの作品が並んでいる。

ウォルシュさんが2007年のベネチア・ビエンナーレで岡部さんの作品を見たことから、同美術館への常設展示の音が掛かった。

展示された作品は、ベネチアでも一緒に制作した写真家瀬下壽さんとの共作「タスマニアのヒロシマ―未来のアーカイブ」。ベネチアにも出品した広島の旧国鉄貨品駅のプラットフォーム縁石のフロッターシエや字品の土を痕跡にして描いたトローイングなどを計1106点を、長さ約19分にわたって壁に張り語めた。被爆



④ MONA美術館に展示された作品の前に立つ岡部さん(右)と寿さん。手前が被爆石(吉岡昌巨会撮影) ⑤被爆石をフロッターシエする来場者たち(瀬下壽撮影)

フロッターシエなど106点

タスマニアに開設したMONA美術館。建物の地下に展示室がある(吉岡昌巨会撮影)



石10個も展示。寿さんの映像作品も飾られている。

さらに新たな試みとして、展示している被爆石を使って来場者にフロッターシエしてもらい、その作品を特設の書棚にアーカイブ(保存記録)していく。

ベネチアでは「わたしたちの過去に未来はあるのか」という問いを投げかけたという岡部さんは「今回は、恒久的なコレクションとなった被爆石から来場者が作品を作ることだ、新たな記憶が生まれ続ける。この美術館で、未来はつくられるという考えが提示されたのではないかと話す。

岡部さんはこのほか、昨年からは長野県諏訪地方で、地元の人たちと一緒に縄文時代の土を使ったトローイングや土器・土偶のフロッターシエの制作に取り組んでおり、それらの作品の展覧会が3月19日田から同県茅野市で開かれる。その後、中東バシンのベイルートで開かれる展覧会への出品も予定され、「ヒロシマ」を軸として、その土地の記憶を組み上げる活動が続く。

未来映すヒロシマの記憶

土の記憶―何億年もの時間を旅して抱えた記憶の層が、激しく揺られ、まくれ上がり、大地を覆う。記憶の時間が足元の眼前にあることを強烈に想起させ刻みつけた大津波。自然のというより時間の逆流、逆襲のようなすこみを見せつけられ茫然とする。

こびりつく津波の映像と傍らのラジオが伝える原発事故のへいまVを聞きながら、字品の土を紙に流して制作した「土の記憶―Hiroshima」の手に残る感触。その感覚の消えないまま、ベイルート・アート・センターの「Image in the Aftermath」展(5月18日〜7月16日)に、多摩美術大学教授の港千尋さんとユニットで参加した。

「事後のイメージ」展 ベイルート

おかべ・まさお 美術家、札幌大谷大教授。1942年北海道生まれ。北海道教育大卒。77年からフロッターージュによる制作を始める。80年代後半から広島に通い、原爆の痕跡を作品化。2007年、ベネチア・ビエンナーレ日本館に出展した。

岡部昌生

チア・ピエンナーレ日本館の「ヒロシマ」を主題とした展示に強い関心を示し、参加を要請してきた。「わたしたちの過去に、未来はあるのか」は、旧作品状況の、緊迫と熱気をはらむただ中での開催だった。

フクシマの「いま」重ねて

ベネチア・ピエンナーレと同じタイトルの出品作品「わたしたちの過去に、未来はあるのか」は、旧作品「フロッターージュ」の制作も行った。

ベイルートの中心部には長い内戦と空爆による被弾痕が生々しく刻まれ崩壊した廃虚がいまだに残り、瓦礫が埋め立てられた広大な敷地が地中海に突き出ている。その埋め立て地の赤みを抱える黄褐色の土をすくい、流す感触と高揚し切迫した気持ち、潜む危機を顕在させるアートの



「Image in the Aftermath」展の会場。左が筆者制作のフロッターージュ作品。奥が、作品「土の記憶」(5月17日、ベイルート) (撮影・港千尋)



4月に広島市内であった作品展のため、制作を行う筆者＝3月下旬、東広島市志和町(撮影・大前洋和)

力、分かちがたい行為だった。二つの3層を超える大きな作品「土の記憶―Beirut」戦禍の瓦礫、埋立地の土には、この都市の履歴が移され、大地とつながった都市の記憶が映され、時が堆積している。これに寄せた港さんの短いテキスト「戦争により生じた瓦礫が埋立地をかたちづくる。紙のうえを流れる土が、消滅した中心街にあったすべての痕跡となる」というイメージが、津波で累々と瓦礫が連なる荒涼とした光景の映像や、被爆後の広島街や私の記憶の底に焼きついた北海道・根室空襲の光景、そして「土の記憶―Hiroshima」の流れた土の表情にも重なった。

この「土の記憶」への視点を、「大震災・大津波・原発事故」の「事後」のへいまVに重ねた。わたし

たちの作品に通底するヒロシマが1945Vへ2011Vを抱えたのだ。映像のテロップには英語とアラビア語で短いテキストが添えられる。

「ベイルート・アート・センター」に展示される2000点のフロッターージュ作品には三つの日付が入っている。1894年：旧宇品駅の建設の年、1945年：原爆投下による破壊の年、2002年：旧宇品駅遺構の撤去と制作の年。ベイルート版のニューバージョンに入る2011年の日付は、東北地方を襲った大震災と原発事故の年を表している。福島第一原子力発電所から漏れた膨大な量の放射能はいまも汚染しつづけており、日本人にとっては1945年の最初の被爆体験を想起させることになった。広島は過去を映す鏡であるだけでなく、未来を映す鏡となるのである。

文 化

IV. 後書きにかえて

トペニ(tp-pe-ni)の樹下で

2011年初夏のある日、港千尋さんと「STUDIO 1942」のベネチアデッキ(ベネチア・ピエンナーレ出展の被爆石を梱包輸送した木箱の材を利用再生した)のイタヤカエデ(トペニ to-pe-ni)(5)の緑陰で、これまで「ヒロシマ」を携え旅した、記憶／痕跡、樹／土、版としての都市、近代の考古学、ヒロシマ／フクシマ、パリ／ベネチア／タスマニア／ペイルート紀行など、終わりのない対話／応答(6)するという「これまでを反芻し、現在を考える」ことができた印象深い豊かな時間をもつことができた。

土の記憶—終わりのない応答のダイナミズム

O：土の仕事のはじまりは、宇品駅のプラットホームの消滅によって、問いの喪失となってしまったことでした。喪失のショックは大きく、そこを埋めるものをそこに立ちながら考えつづけていました。その時、プラットホームの時間と同じく100年くらいの時間を保持できるもの、それがなにかを探っていました。ひとつは、植物。それを育む土でした。土の存在はとても大きかった。「土の記憶」が土の力によって生まれました。

M：土は生きてるんです。比喻でもなく、土は生きており、植物もその一部で、これから芽をだす可能性があるんですね。タスマニアに作品を持っていく時、苦労したことですが、検疫の厳しい国だったので、石と違う扱いを求められました。検疫に安全を証明する何重ものガードが必要でした。土の生命力といってよいと思うのですが、茅野市美術館で縄文の土をガラスケースに入れて展示した、最終日だったと思いますが、そこから芽がでてきました。美術家にとってびっくりするようなことでしたが、土には未来に向けての潜在力をもっている。潜勢力といったほうがいいかもしれません。土は潜勢力そのもので、それが地形を載せたようなかたちで表れたことが今回の新しいところじゃないでしょうか。「アフターウジナ」のときは、まだ手の痕跡がつよく残っていました。今回は紙を揺すって土の勢いに任せた。

O：画面のなかに入り込んでいた自分が、外にいて自分の痕跡を残すことができた。

●：土こそ見間違えるような要素でもあります。「宇品の」「福島の」「ペイルートの」と名づけられないと区別がつかない、と思いますが。

M：どこの土かということは科学的に調べれば、痕跡がでてくる。それがどれほどの意味を持つのか。いずれにしても大地から取りだされたものです。「どうして宇品の土なのか」と問われたとき、その問いの答えが場所の名ではないでしょうか。

M：知っている人が見たらわかる。その知っている人がどうやって知ったのか。知識がどのように構築されたかもふくめたいうでの場所の名前ではないでしょうか。消えた地名はこうして消えていくんです。ところで北海道の地名は。

O：多くはアイヌ語からきています。

M：アイヌ語であれば、同じ問題があるんじゃないでしょうか。その場所であったかどうかは、その場所を知っている人がいなくなってしまっただけでは確かめようがない。場所と名前の関係を問う意味で「土」ほどいい材料はないでしょう。

●：広島、根室、福島という特別な固有名をもつ場所で作業する場合、そこに悲劇があったときそうしたものを取り込むことによって偽善性みたいなものを周りから見られてしまう可能性があるんじゃないですか。

O：多分、あると思います。それに対してどう答えるかよりも、どう自分がそこでやりつづけるか、そのことによって自分の中に少しずつ構築していくようなことだと思います。

M：広島や長崎の惨状。単なる事故や事件ではなく、事件に遭遇した人だけでなく、遠くのヨーロッパ、オーストラリア、太平洋にまで関係するような大災害、大惨事です。それを表象するときに、常に問われるのは、表象することの責任だと思います。そこでレスポンス、応答できるのかどうかですね。

例えば、広島や長崎のイメージを使うことによって、どうそれに応答するかということがひとつ。もうひとつ、そこでつくられたイメージに対して見た人が応答する。その応答のなかには批判も含まれると思いますし、そうでなければいけない。それに対して作家やコレクターが応答する。アートはひとつの答えを見つけるのではなく、応答を繰り返していく、ダイナミズムをつくることだと思っています。ベネチア・ピエンナーレのタイトル

にも「？」(クエスチョンマーク)がタイトルにはいってましたね。

O:そうです。

M:たしかにそのことに対する疑問や批判もありました。「タイトルに疑問符が入っているのはどういうことか」とね。もっともな批判だと思うのですが、それに対しての我々の答えのひとつが、タスマニアの展示です。もちろんそれで終わりではなく、それを見た人、あるいはタスマニアでフロッタージュした人がまた、それに対する疑問を投げかけていく。その終わりのない応答のダイナミズムこそが作品のレスポンスシビリティではないかと思っています。

O:それを見た人もまたこちらに投げかけてくる。まさに応答しつづける。その時間の長さがものをつくりだすエネルギーにもなったし、作品を裏打ちする力にもなったんだと思います。そうした点で、向き合う態度が問われる。持続しないといけない。保持しないといけない。ひとつの解を出しながら、もうひとつの問いを抱える。そして解を提示する。自分のなかに同じような応答を内側に持つことの大切さを、ひとつの都市にかかわりながらやってきた仕事です。

いま、イタヤカエデの樹下での対話を思い起しながら、記憶の断片が「森ニイマス」に通底させることができると思う。この対話も含めたアートドキュメンタリー映像「微(しるし)はいたる所で」(制作/スタジオ・マラパルテ、提供/Art Square、撮影/宮岡秀行)TV番組(スカパー!216ch)(7)として放映される。

■補遺と註

(1)

フロッタージュ・プロジェクトの教育プログラム

- チキサニ(ハルニレ)プロジェクト(札幌市立北栄中学校 札幌 1992)
- ヒロシマ・メモワール(広島市現代美術館 広島 1996)
- 時ニ学ンデコレラ習フ(札幌市生涯学習センター 札幌 2000)
- なぜここに、滑走路が(根室市立歯舞中学校 根室 2003)
- オーイ!円山(山口県立徳山高校 周南 2006)
- かつて川口を舞台とした『キューボラのある町』という映画があった(川口市立元郷中学校 川口 2006)
- サン・フランチェスコ・デッラ・ヴィーニャ教会(サン・ジュゼッペ小学校 ベネチア 2007)
- アルセナーレ(ベネチア建築大学 ベネチア 2007)
- 雄別炭砒を掘る(高文連釧路根室支部美術展研究大会、北海道教育大学釧路校、同付属中学校 釧路 2009)
- ひののんフィクション旧蚕糸試験場(首都大学東京、日野市立仲田小学校 日野 2010)
- 諏訪をめぐり、縄文にふれる(茅野市立永明小学校 茅野 2010)
- 森ニイマス(高文連網走支部第56回美術展研究大会 北見 2011)
- 金剛・生駒・紀泉の森(大阪教育大学 柏原 2011)
- オ・ベレベレケ・ブ(北海道造形教育研究大会 帯広 2011-12)

(2)

ワークショップのフロッタージュ・プロジェクト

- ハイスティング街150mのフロッタージュ(NOOSA 美術館 ヌーサ、オーストラリア 1988)
- 川に還る 界川遊行(Art Event in Sapporo'89 札幌 1989)
- ミュージアムシティ天神(福岡天神地区 福岡 1990)
- オビヒロ・マトリックス(北海道立帯広美術館 帯広 1991)
- 海へ 海から内へー記憶の記録(横浜美術館 横浜 1995)
- 島から島へフロッタージュ・ファクスレター(北海道各地一韓国济州島 1991)
- ヒロシマ・メモワール(広島市現代美術館 広島 1996)
- N'OUBLIEZ PAS(忘れない)FROTTAGE FAX LETTER(パリー広島 1996)
- 風のサブロウサマに会えるか(越後妻有アートトリエンナーレ 新潟 2000)
- 時ニ学ンデコレラ習フ(札幌市生涯学習センター 札幌 2000)
- “戦争とメディア”によせる100の手紙(日仏会館 東京 2002)
- ヒロシマを越えて一平和の造形(第52回美学会全国大会 広島 2002)
- 旧日銀を擦りとり1万人のワークショップ(「ヒロシマを擦りとり1万人のワークショップ」 広島 2004)
- 岡部昌生シンクロ+シテイ2005プロジェクト(北海道内10都市 2005)
- @つちざわマトリックス(萬鉄五郎記念美術館 土澤 2006)
- 岡部昌生楽生拓繪計畫(ハンセン病療養所楽生院 国立台湾大学 日星鑄字行 台湾商務院書館 台北 2009)
- HIROSHIMA in TASMANIA(MONA ホバート、オーストラリア 2011-)

(3)

森／樹木／土を主題としたフロッタージュ・プロジェクト、

- ピッキにふれて(音威子府 1990-)
- チキサニ(ハルニレ)プロジェクト(日本文教出版 札幌 1992)
- 森のなかで、野付牛にふれる(北網圏北見文化センター美術館 北見 1999)
- 風に触れて(札幌ドーム 札幌 2001)
- 土の記憶—ヒロシマ(広島 2007-)
- 被爆樹に触れて(広島 2007-)
- ebionim(制作:宮岡秀行 2008)
- 雄別炭砦を掘る釧路(高文連釧路根室支部美術展研究大会 釧路市立美術館 釧路 2009)
- 諏訪をめぐり、縄文にふれる(茅野市美術館 茅野 2010)
- 森ニイマス(高文連網走支部美術展研究大会 北見 2011)
- 土の記憶—Beirut 戦禍の瓦礫、埋立地の土(Beirut Art Center ベイルート 2011)
- 徴(しるし)はいたる所に(制作:スタジオ・マラルパルテ 提供:Art Square 撮影:宮岡秀行 2011)
- 土の記憶—事後のイメージ(FUKUSHIMA)(京都精華大学 京都 2011)
- 金剛生駒紀泉の森(大阪教育大学 柏原 2011)
- オ・ペレベレケ・ブ(北海道造形教育研究大会 帯広 2011-12)

(4)

2001年冬、友人の中川潤さんの協力で、札幌ドームのモニュメント制作のために羊ヶ丘の樹々をフロッタージュする作業「風に触れる」を行なった。そこから16点組のセリグラフ作品集が生まれた。開拓、開墾、伐採、野火から難を逃れた巨樹は、羊ヶ丘をめぐる風と陽光によってその樹皮には場と時の痕跡が刻まれ、ひとつのモニュメントとになっていた。作品集に添えられた冊子のハルニレの項には、このように中川潤さんが記述している。

《ハルニレ cikisani (ci-kisa-ni) [我ら・こする・木]キサは“木をこすって火をだす”の意で、ユーカラでは一番目(地方によっては二番目)に地上に生えた木である。人祖アイヌラツクルの父は寝と地によっていろいろの神に伝えられるが、母は常にハルニレ姫である。そしてこの木は、火を起こすのみではなく、火持ちのよい焚木であり、一本でも燃えつづけて人々を暖めてくれる木である。古くは布をつくる繊維にも利用されていた。》(岡部昌生『風に触れる』sakiyama works 2001)

(5)

《トベニ(イタヤカエダ) to-pe-ni (乳房・水・木 乳汁の木)早春、樹幹に傷をつけ、そこから流れる樹液(ニ・トベ<木・乳汁>)はそのまま飲んだり煮詰めて飴にしたり、料理に使った。木具器材をつくる良質な材料。トベはトペン(甘い)の語源となった。アイヌ語の樹木名の意味に徴されている。(『風に触れる』から「木の名前」中川潤)

(6)

港千尋さんとの対話

日仏会館(2002) 日本国際交流基金(2006) 広島市民交流プラザ(2007) ヴェネチア建築大学(2007) 多摩美術大学(2007) 東京藝術大学(2007) ローマ日本文化会館(2007) ローマ大学現代美術ラボラトリー美術館(2007) トキアートスペース(2007) 北海道芸術学会(2007) 武蔵大学(2007) 北海道立近代美術館(2008) CAIO 2(2008) 福島県立博物館(2009) CAIO 2(2009) ハンセン病療養所 楽生院(2009) 国立台湾大学(2009) 多摩美術大学(2009) JR プラニスホール(2010) 茅野市美術館(2011) MONA(2011) BEIRUT ART CENTER(2011) 札幌大谷大学(2011) 東京大学(2011)

(7)

岡部昌生を追った TV 番組

Edge スペシャル「徴(しるし)はいたる所に」

LES SIGNES PARMI NOUS

ハイビジョン作品カラー 60分

美術界のオリンピック、ネヴェネチア・ピエンナーレ日本代表の岡部昌生が、3.11を挟んで、根室、札幌、広島で制作を続け、津波の被害を受けた全長600kmに及ぶ三陸海岸の土をつかった新作ドローイングをつくる。福島原発事故の渦中に、ヒロシマの、日本の戦後処理の真実が蘇る、60分間の珠玉のドキュメント。

出演:岡部昌生、港千尋、石丸勝三、桑原真知子、松田マサヨ、Victor Erice(友情出演)スタッフ/撮影・録音:宮岡秀行 編集:佐藤英和 整音:黒川博光 録音助手:小川芳正(広島) 波多野ゆかり(札幌) 田中甚兵衛(京都) 東峯夏樹(根室)

音楽:鈴木明男 LUIGI NONO GIACINTO SCELISI ROBERT SCHUMANN 宮岡秀行・佐藤英和共同制作 製作/スタジオ・マラルパルテ 提供/Art Square 放送/スカパー!(216ch)

2010年炎暑の「被爆樹」震災と原発事故以後の広島での「土の記憶」『AFTER UJINA』

寒空の根室・旧海軍牧ノ内飛行場滑走路で見つけた足跡痕 北海道の春・新緑のイタヤカエダの樹下での港千尋さんと岡部昌生さんの対話 京都のフクシマ「事後のイメージ」公開制作 根室、札幌、三陸、京都、広島とロケをして2011年に撮られた記録性が全カットに通じた宮岡秀行制作によるアートドキュメンタリーです。

■活動記録

活動の記録一紙鏡

フロッターージュによる表現を1977年よりはじめる。

パリ、イヴリ・シュルセヌに滞在(1979)169点の「都市の皮膚」を制作。「都市は巨大な版である」という感慨をえる。

1980年代後半より広島原爆の痕跡を作品化する作業をはじめ。

オーストラリア、ヌーサにおけるフロッターージュ・コラボレーション(1988)以来、市民とのコラボレーション(協同制作)やワークショップを積極的に実施するほか、国内外の各都市で制作・展覧会活動を展開している。

2000年以降の主な活動

光州ビエンナーレ 2000(光州 韓国 2000)

大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ(新潟 2000)

労働と崇高(板橋区立美術館 東京 2000)

ART for the SPIRIT 永遠へのまなざし(北海道立近代美術館 札幌 2001)

現代美術の冒険(広島市現代美術館 広島 2001)

風に触れる(札幌ドーム 札幌 2001)

N'OUBLIEZ PAS 忘れない(日仏会館 東京 2002)

韓国現代版画展(SEJONG ART CENTER ソウル 2003)

美術表現のなかの夕張(夕張市美術館 夕張 2004)

SYNCHRONICITY プロジェクト(広島 2005)

SYNCHRO+CITY プロジェクト(北海道の10都市 2005)

SYNCHRO+CITY(コンチネンタルギャラリー 札幌 2005)

シンクロシティ同時生起(広島市現代美術館 広島 2005)

AFTER UJINA(Gallery G 広島 2005)

N'OUBLIEZ PAS(TOKI ART SPZACE 東京 2002-08)

北海道文化奨励賞(2006)

Between ECO+EGO(川口 2006)

街かど美術館(土澤 2006)

第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館(ヴェネチア 2007)

「わたしたちの過去に、未来はあるのか?」(港千尋編 東京大学出版会 2007)

ATTINGENDO MEMORIE 記憶を汲みあげる(ローマ日本文化会館 ローマ 2007)

STUDIO MONTPARNASS(item edition パリ 2007)

岡部昌生×港千尋 記憶を汲みあげる(Gallery Q 東京 2007)

広島文化賞(2007)

国際シンポジウム PERSONAL STRUCTURE(東京 2008)

JR タワーART BOX(札幌 2008)

HIROSHIMA MON AMOUR(広島市現代美術館 広島 2008)

ebionim(制作・監督・撮影:宮岡秀行 2008-09)

「都市の/皮膚」のインデックス(CAIO 2 札幌 2008)

FIX MIX MAX! 2(札幌宮の森美術館 札幌 2008)

岡部昌生拓繪計畫ハンセン病療養所楽生プロジェクト(台北 2009)

雄別炭砒を掘る(釧路市立美術館 釧路 2009)

岡本太郎の博物館 始める視点(福島県立博物館 会津若松 2009)

タイボロジック(日本経済新聞社 SPACE NIO 東京 2009)

“文化”資源としての〈炭砒〉展(目黒区美術館 東京 2009)

ひののんフィクション(旧蚕糸試験場 日野 2010)

レクトゥル写真フェスティバル(レクトゥル 2010)

被爆樹に触れて(art space HAP 広島 2010)

愛の小さな徴(JR タワープラニスホール 札幌 2010)

諏訪をめぐり、縄文にふれる(茅野市美術館 茅野 2010-11)

MONA 美術館パーマネントコレクション(MONA タスマニア 2011)

Image in the Aftermath(Beirut ArtCenter ベイルート 2011)

徴はいたる所に(制作:スタジオ・マラパルテ 提供:Art Square 撮影:宮岡秀行 2011)Hiroshima EXsite 表現者がらみた 3.11

(旧日本銀行広島支店 広島 2012)

主なパブリックコレクション

MONA 美術館 フランス国立図書館 韓国国立現代美術館 ヌーサ美術館 東京都現代美術館 神奈川県民ホール 栃木県立美術館

広島市現代美術館 北海道立近代美術館

北海道立帯広美術館 北海道立釧路芸術館 北網圏北見文化センター美術館 札幌ドーム札幌市生涯学習センターちえりあ

■活動記録(2011-2012)

「さっぽろ昭和30年代—美術評論家なかがわ・つかさが見た熱き時代」
2010年10月30日-2011年1月30日
「人形五つ」(1964)
札幌芸術の森美術館(札幌)

「MONANISMS」
2011年1月21日-7月19日
「Hiroshima in Tasmania-Archive of the Future」(2010)
Permanent Collection
MONA(Museum of New and Old Art)
(ホバート, タスマニア, オーストラリア)

岡部昌生「諏訪をめぐる, 縄文にふれる」
2011年3月19日-4月3日
茅野市美術館(茅野)
シンポジウム「諏訪の首飾り—縄文にふれる」岡部昌生×港千尋×功力司 茅野市民館
ワークショップと展覧会を総合的に展開

岡部昌生アーカイブ展
「小さな愛, それは新たな記憶」
同時開催
「タスマニアのヒロシマ, 未来のアーカイブ—報告展示」
4月12日-17日
art space HAP(広島)

「出会いと創造」
4月16日-5月22日
「The Dark Face of the Light」(2001)
北海道立近代美術館(札幌)

「koi 鯉アートのほり」
4月-5月
福島大学・各都市巡回(福島)

開学50周年記念特別公開講座
復活《人生と芸術》
宮岡秀行×佐藤友哉×港千尋×杉山留美子×巖城孝憲×中嶋義明×木村雅信×福島栄寿
5月7日-8月6日
札幌大谷大学短期大学部(札幌)

「Image in the Aftermath」
「わたしたちの過去に, 未来はあるのか」200点
「戦禍の瓦礫, 埋立地の土」2点
5月17日-7月16日
Beirut Art Center(ベイルート, レバノン)

シンポジウム「ふくしまで語る FUKUSHIMA」
3港千尋×やなぎみわ×三瀬夏之介 ゲスト出演
7月3日
福島県立博物館(福島)

「岡部昌生 自らの作品を語る—わたしたちの過去に, 未来はあるのか」
西雅秋×山田創平×岡部昌生
「事後のイメージ—土の記憶」
東北震災地区6カ所(三陸海岸600km)の土によるドローイング公開制作
7月3日-6日
京都精華大学(京都)

「港千尋の集中講義・イメージ論」ゲスト講義
7月7日
東京大学法文二館(東京)

高文連網走支部第56回美術展研究大会
ワークショップの指導と講評
「森ニイマス」
8月24日-26日
北網圏北見文化センター美術館・野付牛公園(北見)

岡部昌生のトークと映像
「大人になったら芸術家になりたい。16歳の少年は答えた」
札幌大谷大学短期大学部美術科オープンキャンパス特別講座
9月17日
札幌大谷大学短期大学部(札幌)

「おぼけのマルと絵のふしぎ」
10月29日-2012年1月15日
「Le 26 septembre 1979 a rue Pasture. Ivery Sur Seine.」(1979)
北海道立三岸好太郎美術館(札幌)

岡部昌生を追ったアートドキュメント映像
「微(しるし)はいたる所に
LES SIGNES PARMI NOUS」
出演: 岡部昌生 港千尋
石丸勝三 Victor Erice ほか
制作: スタジオ・マラバルテ
提供: Art Square
撮影: 宮岡秀行
音楽: 鈴木明男 LUIGI NONO GIACINTO
SCELSI ROBERT SCHUMANN

「微はいたる所に」特別上映会
岡部昌生+宮岡秀行+八巻真哉
11月15日
京都精華大学(京都)

講演とワークショップ
「生でふれようアーティスト in 大教大」
金剛・生駒・紀泉の森
11月15日-17日
大阪教育大学(柏原)

「谷の会46回展」
11月22日-27日
「Studio Montparnasse VIII」(2007)
大丸藤井セントラル(札幌)

北海道造形教育研究会プレ・ワークショップ
「オ・ベレベレケ・プ」
12月17日-18日
帯広市立帯広第五中学校, 水光園ほか(帯広)

koi 鯉アートのほり
2012年3月14日-4月4日
福島空港(福島)

Hiroshima EXsite
3月17日-3月25日
きみは, 3.11を見たか?
「戦禍の瓦礫, 埋立地の土」土の記憶—事後のイメージ FUKUSHIMA」(2011)
旧日本銀行広島支店(広島)

■協力

茅野市美術館 釧路市立美術館 art space HAP 高文連釧路根室支部 高文連網走支部
北網圏北見文化センター 京都精華大学 大阪教育大学 札幌大谷大学 北海道造形教育連盟十勝支部 北海道新聞社 中国新聞社
港千尋 ユジェン・パフチャル 宮岡秀行 石丸勝三 木村成代 松波静香 川延安直 佐藤久美子 中優樹 露口啓二 大前洋和
矢島光明 上野秀実 川添龍一 太田玲子 小堀芳子 柳原卓彦 藤森照信 功力司 九富美香 渡邊美香 堀口力 西雅秋 八巻真哉 林弘亮 中川潤 gallery G

■参考文献

- 1)『オホーツクのエッジから 三つのベクトル』北網圏北見文化センター美術館(1999)
- 2)岡部昌生『風に触れる』sakiyama works(2001)
- 3)港千尋編『岡部昌生 わたしたちの過去に, 未来はあるのか』東京大学出版会(2007)
- 4)『被爆樹に触れて』sakiyama works(2008)
- 5)港千尋編『愛の小さな微』札幌駅総合開発株式会社(2010)
- 6)『岡部昌生<諏訪をめぐる, 縄文にふれる>』茅野市美術館(2011)